
I want BRAVERY

深々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I want BRAVERY

【Nコード】

N2771S

【作者名】

深々

【あらすじ】

主人公はある日突然、願わぬ転生をさせられてしまう。とりあえずそこで頑張って生きてみる、というお話。

ちなみに主人公は原作の主人公の代わりではありません。

※作者はさほどペルソナシリーズをやり込んではいません。

間違った設定や解釈をしています、それでもいいと言う人だけどうぞ。

序章

授業中に下を向いて、いつものようにサボりながら携帯をイジくる。

お気に入り登録してあるURLから二次創作の小説を探してソレを読む。

それが、この退屈な古文の授業中での俺の日課だ。

しかし、いつもと違うことが一つだけ。

授業中であることからサイレントモードにしていた携帯に、メールを受信したランプが点滅した。

「ん？」

授業中に携帯をイジってるのは自分くらいなので、友達からのメールでないことはわかる。

携帯会社からのメールか、それともメルマガか、どちらだろうか
と思いながらも小説に再び注意を向ける。

しかし、どうしてもそのランプ点滅が気になってしまい、小説サイトを閉じ、メールをチェックする。

『○月△日 11..20
From..xxxxxx@xxx.ne.jp
sub..

あなたわなにおのぞむ？

「は？」

知らないアドレスからのメールだった。

しかし、それよりも驚いたのがそのメールの内容だ。

「あなたわなにおのぞむ？・・・あなたわ・・・あなたは、か。な
におのぞむ・・・何を望む・・・どゆこと？」

意味が分からないままメールの内容の続きを見る。

のうりよくはいこだけ

はじめのすてたすはごうけいで10まで

きよひけんはない

いまから5ふんいないにへんしん

じゃないとかてにきまる

ペルソナ

』

「イタズラかよ・・・しかもどこぞの小学生、いや幼稚園児みたいな文章だな。『能力は1個だけ。始めのすてたすは合計10まで。拒否権はない。今から5分以内に返信。じゃないとかてに決まる』といったところか・・・『すてたす』？『かて』？・・・意味わからんな」

イマイチ要領の得ない内容。

イタズラにしてもなんにしても雑すぎる作り。

本文は全てひらがな。しかし、最後の一文字だけがカタカナ。

「『ペルソナ』か。ゲームの話なのか？」

イタズラかどうかはわからないがこんなものにメールを返すのは少々、

「勇気が足りない。どうやら『漢』くらいは必要なようだ・・・ってか？」

なんてな。と心の中でつぶやきながら、そのメールの返信画面を開く。

『

t o . . x x x x x x @ x x x . n e . j p
s u b . . R e . .

お前誰？メールの相手間違ってない？』

そう打って送信ボタンを押す。
そして、そのままタイトルへと戻り、もう一度さっきのサイトへ
行こうとする。

その時、またしてもランプが光った。
そしてそのメールの差出人を見て驚愕する。

「おいおい・・・返信早すぎだよ。なんかこええ」

『○月△日 11..23
F r o m . . x x x x x x @ x x x . n e . j p
s u b . . R e . . R e . .

のうりょくいこだけ

すてたすは
がくりよく

みりよく
ゆうき

あなたはゆうきがいはいひつよう』

「・・・おい、こら」

ふざけてんのかこれ。内心でイラッときたのが分かる。
勇気が足りない？んなことわかってるよ。
チキンですよ。何か問題でもあんのかよ。

「こんにやろう・・・しかもマジでペルソナのゲームのステータス
じゃねえか・・・!？」

そこまで自分でつぶやいて気付く。

「もしかして・・・『すてたす』ってステータスか！」

どうでもいいことだが、気付くと嬉しいものがある。

「なるほど。もしやこれは俺に勇気をくれるメールというわけか」
勘違いしていない気もしないが、納得してしまったものは仕方な
い。

そう開き直って再びメールを打つ。

「
to...xxxxxx@xxx.ne.jp
sub...Re...Re...
」

学力 3
魅力 3
勇気 4

」

ここまで打って気付く。

「能力って・・・何だ？」

勇気4と言いながらもやはり怖いものはある。
何事にも保険は必要だ。

『直視の魔眼と脅威の幻視、の能力を持った眼』

と、追加するように打ち込む。

「ふむふむ。我ながら完璧だ」

なんて呟いて送信ボタンを押す。
押してしばらくして気付く。

「あれ・・・？これもしイタズラだったら俺・・・なんかめっちゃ痛い子じゃないか・・・」

気付いて絶望し、羞恥で真っ赤になりながら机に突っ伏する。

まさか、いくらなんでもこんなアホみたいなメールにガチで返してしまう高校3年生がいるなんてことはありえない。

そんなありえない中で、まるで中学生か小学生のようなメールを返してしまったことに自己嫌悪する。

すると突然眠気のようなものが襲ってくる。

「うお・・・？なんで・・・？」

今日はたっぷり10時間寝て登校して来たはずだと思いながら、自分の意識がブラックアウトするのを感じた。

1話 誕生（前書き）

文章が下手なのは今更なので、そこらへんは目を瞑っていただけ
と幸いです。

1話 誕生

突然目に光が入ってきたことによるまぶしさで目を覚ます。
しかし、目が開かない。

「（ここは一体・・・？）おぎゃああ？」

嫌な予感を感じる。

冷や汗が流れる。

「奥さん、産まりましたよ。元気な男の子です！」

近くから大音量でそんな声が聞こえ、自分の体が空中で移動するのを感じた。

「（目があかねえ！！そしてお前！うるせえよ！！）おぎゃああ！おぎゃああ！おぎゃつああ！」

赤ちゃんにしては奇妙な泣き声を上げながら、その赤ん坊は彼を持ち上げた医師を殴るかのように腕をわずかながら振る。

当然、生後1分程度の赤ん坊にそんなことは出来ないので、精少し医師側に体が傾く程度だ。

「（どうなってんのお！？赤ちゃん！？赤ちゃんになったの！？俺！）おぎゃああ！？おぎゃああ！？おっぎゃああ！？おぎゃ！」

意味も分からぬまま騒いで、その後しばらくして、また再び自分の意識がブラックアウトするのを感じた。

そんな感じで俺がこの世に生を受けてはや4年。

正直なところ、今までの記憶は曖昧で、わかったのは転生？らしきことをしたということだけだった。

物心がまだ付いていないのか、いまだに前世の記憶が、自分の記憶の99%以上を占めている状況だ。

この4年間はなにやら話したり、歩いたりしていたみたいだが、それらの記憶もあまりない。

毎日毎日、朝目が覚めるたびに、此处は何処だ、という疑問が浮かぶ。

そして、泣き、喚いて暴れ、しばらくして状況を把握する。そんなことを繰り返していた。

「あらあら。彩ちゃんったら、また泣いちゃって」

そう言っ、いつも泣いている俺の世話を焼いているのがこの世界でも俺の母親だ。

この世で4年生きているのだが、今だに今の状況についていけず、夜な夜な泣かずにはいられない俺。

そうして、幼稚園の子達や母親に癒され、なんとか4歳を生きているのが今の現状だ。

なんと言っても幼稚園児はイイ！

ここで誤解を招きそうなので訂正しておくが、決してペドやロリ
の意味ではない。

こう、無邪気さというものにありえないくらい癒される。

自分も一緒になって、本来の歳を忘れ走り回るくらいに癒される。

時間はまた飛んで、7歳。

やっと色々と記憶が定着してきたと思う。

正直なところ、前世で死んだわけでもないのに突然この世界に産
まれた理由はわからない。

やはり鍵になっているのは、最後のあのメールではないかと思う。
死んでないから転生ではないと思う、というのが正直なところな
のだが、こういう場合はなんと言うのかわからない。

そして何より、そのメールが原因ではと確信したのには、俺の目
に原因があった。

どこぞの吸血鬼に恋をした主人公ではないが、あらゆるものに線
が見えるのだ。

なぞってみると、ほらもう言わずもがな、真っ二つに。

そして、たまに光も。

しかもこの光は普通じゃないのだ。

そう危険を知らせるかのように光が見える。

しかし、これを誰かに知られないように隠すのにはあまり苦勞し

ない。

魔眼の方は意識しなければあまり見えないし、脅威の方はあっても別に困ったりはせず、特段不思議がられることもない。

まあそこら辺は別に、これらは俺が生前にメールで返信した内容の、直視の魔眼と脅威の幻視ではないかと思うのだ。
というかそれ以外ありえない。

そして、本当に今さらだが疑問に思うのは、

『能力は一個』といいつつも、屁理屈のようにまるめたこの二つの能力がもらえらるとは、一体全体どういうことなんだろうか。

そのことについてうんうん唸りながらも、本日学校で出された宿題を解く。

はたから見たら本当にその問題に対して難しくて唸っているように見えるのだろう。

自分の目の異常さに気付き、それらを悟られないようにと決心してからさらに月日は流れ12歳を迎えた。

正直なところ、前世のことが気になって仕方がない。
毎度毎度、『正直なところ』『今だ』を連発するのは気が引けるが、仕方がないと割り切る。

今まで、本当に子供のように振舞ってきたのは、というよりもそうになっていたのは、若干の自暴自棄があったのだと思う。
子供でいずにはいられなかった。といったところだろうか。

転生したいなんて思ったこともない。

あの頃はあの現状に満足していたと言ってもいい。

友達から『キング・オブ・チキン』の名をもらい、イジられキャラとして定着していたとしてもだ。

こんななどこの世界かも分からないところに生まれたくはなかった。はじめはタイムトリップを考えたのだが、ありえないものを見てしまったことからその考えはなくなる。

自分のステータスが見れるのだ。

あくまで、大雑把ではあるが、それも見える、目で確認できるというのは異常だろうと思う。

そして、おのステータスの表示があまりにも、あまりにもゲームの『ペルソナ』の表示に酷似していたのだ。

ステータスはPSPボタンの△を押す、なんていうのは出来ないのでどうやって見たのか、ということに疑問がいくのだが。

何故か、こう

(あゝ、今の俺って勇氣あるんだろうか?)

なんて思うと見えるのだ。

そう、勇氣がポイントなのだ。

生前の俺が求めてやまなかったものだ。

学力…3

そこそこ良い

魅力3

そこそこある

勇気 4

頼りがいがある

L V 1 流峰 彩

H P 10 / 10

S P 12 / 12

普通

N E X T E X P 10

正直、言いたいことはたくさんあるが、一番はやはり、

「俺に、俺に勇気があるとはあ!!!!」

思わず叫んでしまうくらい嬉しい。

2話 突然（前書き）

王道の展開です・・・。

2話 突然

そしてまた月日は流れ、その日、俺はこれから忘れられないであろう出来事を経験した。

学校では勉強もそれなりにこなし、顔もそれなりで、そこそこ勇気のある俺は明るく、クラスのムードメーカー的な存在だった。

前世でもそうであったように、周りに合わせて笑ったり、笑わせたり、それらのことを特に苦もなくやっていた。

学校でも友達が多く、部活もよくやっていた。

そして、何より前世でありえなかったことだが、それなりに女子からも人気があった。

なにより特に勉強しなくてもテストで点が取れるというのは、学生にとっては最高だろう。

まあ、勉強が本分というレベルの学生ではないのだが。

そして俺はそのまま、なんの悩みもないまま、というのはいささか言いすぎだが（というよりも悩みはかなりあるのだが、もう諦めることにした）、かなり順調に過ごしていた。

そしてその日も、いつも通り部活をして、友達と一緒に下校し、そのまま家へと帰ってきた。

「ただいまー」

いつも通り、自分で鍵を開けて家へと入る。

しかし、いつものようにそこへ返答する声はない。

ふと疑問に思いリビングを覗く。

すると、いつもは付いているはずの電気がついていない。

「あー、そっか。今日は二人の結婚記念日だったか」

両親はラブラブ、というわけではないが、俺の世話に小学生頃から一切手間がかからなくなったためか、よく二人で出かけていた。

そして今日はその二人の結婚記念日。

夫婦水入らずでどこかへ出かけていったのだ。

そうボヤきながた手を洗い、着替えるために自分の部屋への階段を上がる。

制服を脱ぎ、それに皺が出来ないようにハンガーにかけ、そして部屋着に着替えて再びリビングへと戻る。

ちょうど時刻は夕刻の6時。

両親は、今日が金曜日のため今日から二泊三日で日曜日の夕方に帰ってくるとのこと。

リビングでは、特にやることがないので適当に学校の宿題を持ってきてそれを開いてテレビをつける。

テレビを見ながらでは集中できない、と思うのは最もだ。

しかし、問題は集中する必要があるのか、ということだ。

正直にいうと、ない。

その一言に尽きる。

「・・・ふっ、ククク」

お笑い系の番組を見ながら独り笑う。

はたから見れば少し奇妙な光景だろう。

そして、スラスラと学校の宿題を解く。

それらの問題は自分のレベルに合ってなさ過ぎる。

まあ、そんなことは当たり前なので、適当に終わらせて高校生用の問題を解く。

これらの高校生用の問題集は父親の書斎にあったものだ。

何故あの歳になってまで高校生の時の物が残っているのかは知らない。

しかし折角あるのだから使わせてもらう。

転生らしきものをしてから、何故か自らを高めることに関しては何故か進んでやろうという気になるのだ。

そして、父親の昔使っていたであろうボロボロの参考書を、書斎の奥から引っ張り出し、それをパラパラめくりながら解いていく。
今の自分は、前世の受験を控えた人生で最高潮の頭よりも良いと思う。

なんだかんだ思いながら、時刻が8時頃になり、流石に腹が減ります。

元々減っていたのだが、先にこれをやろうと決めてやっていたのでそちらをほって置いてしまったのだ。

「晩飯は自分で作らなきゃダメかな・・・こんなことならコンビニ寄っとけばよかったわ」

別に料理ができないわけではない。

正直、学生が勉強をしない、そして新たに発見することに対する好奇心があまりないとなると、おのずと趣味は増えるものだ。

しかしこの時間になると、作るのも億劫になってしまうというものだ。

両親はおいしいと言ってくれるが、正直なところ味は普通だと思う。

特に料理の腕を上げようとは思わないが、できればおいしいものを食べて欲しいと思い、両親のいない今日に新しいものに挑戦しようかな、と考えキッチンへ向かう。

そして、キッチンの戸棚にある料理本を取る。

適当に今まで作ったことのなかったものを選び、その作り方を確認していく。

「♪♪♪」

『ペルソナ3』の『Burn my dream』を歌詞も大してわからぬまま、音楽だけを鼻歌で歌いながら、ご飯を作っていく。

だいたい40分程度かけて料理をつくり、外が大分暗くなったのを見ながら一人ご飯を食べる。

食べ終わったら、食器を流しに置いて、フロを沸かす。

そうやっていつも通りに過ごしていく。

時刻が0時を回る。

「お？もうこんな時間か」

普段は親に言われるが、今日はその親がいないため、気付けば0時を回っていた。

「まあ、どうせ明日休みだし」

学校は土曜日はない。

（ゆとり万歳！）

内心叫ばずにはられない。

とか思いながら、携帯ゲーム機を取って、ベットの上で適当なカセットで遊ぶ。

——P u r u r u r u r u

ふと家の電話が鳴った音で目が覚める。

「あれ？いつの間にか寝てたのか」

手元にあるゲーム機の画面には『GAME OVER』と書かれている。

ゲーム機の電源を切って立ち上がる。

「こんな時間に誰だよ・・・」

時刻を見やると、午前5時。

正直言ってこんな時間に電話をかけてくるやつなんているはずがない。

この歳で携帯なんて持てるはずもなく、大抵は家電で友達と連絡を取っている。

だからと言って、ここまで常識がない友達はいないはずなのだが。

両親かな? と思い、眠たい目をこすって一階へと降り、今だ鳴り響く受話器を取る。

「もしもし?」

眠そうなの口調で言う。

しかし、一瞬受話器の向こうは無言で、一泊置いてから聞き慣れない声が聞こえた。

「・・・もしもし、流峰さんのお宅でしょうか? 警察です」

嫌な予感がする。

手に握る受話器に力が自然ともる。

「ご両親が・・・交通事故で亡くなれました」

強く握ってたはずの受話器がスルリと手から滑り落ちた。

手から力がなくなり、足にも力が入らず、空腹も感じなくなった。そして、落ちた受話器がガタン、と音を立てて床に当たる。

自分以外誰もいないリビングで、その音はやけに大きく聞こえた。
落ちた受話器からなにやら声が聞こえるが、聞こえない。

世界に音がなくなったような気がした。

外伝 母親（前書き）

短いですが、外伝だから、ということでは・・・

外伝 母親

Side…母親

私の名前は流峰千佳。

元々は普通のOLをしていて、その会社の上司だった夫にプロポーズされてそのまま結婚した。

当時、私は22歳だった。

あまり高学歴とはいえないが、たまたま面接で受かりその会社に入社した私は、会社に居心地の悪さを感じていた。

その会社は、皆かなりの学歴を持った人達ばかりだった。

私は、美人だからという理由で気に入った社長が、将来性がある、なんて下心丸見えの意見えお言って通したらしい。

そのせいか、女の同僚からは、いつも見下され、嫉まれた。

そんな私に、いつも声を掛けてくれたのが夫だった。

上司である立場から、いつもは無理だったがそれでもよく世話を焼いてくれた。

だから、夫にプロポーズされた時は思わず涙が出るほど嬉しかった。

好きな人と結婚し、会社を辞め専業主婦になった。

しかし、最初は良かった夫婦仲も時が経つにつれて、その熱を失っていった。

居心地が良かった家も、少しずつ悪くなっていった時だった。

息子の彩が生まれた。

読み方はさい。断じてあやなんではない。

彩りのある人生を、という思いをこめて名づけた。

女の子みたいな名前だったので、男の子にはどうかと思ったのだが、あまりそこは気にしないことにした。

何故なら、夫がその名前を聞いて、『良い名前だね』と言ってくれたから。

彩はよく泣く子だった。

時折、何処か大人びた、とまでは言わないがそのような雰囲気を感じたが、やはりいつも泣いていたという印象が強い。

すぐになんでも覚え、そのうち学んでもない言葉を話始めた時は驚いた。

しかし、幼稚園に入ると、今までの涙が嘘のようになくなり、いんな子と遊んでいた。

そんな様子を見るとやっぱり子供だな、と思った。
だからこそ、その頭の良さが目立ったが夫の子なのだからそれくらいは当たり前だと思った。

小学校へと上がり、より明るく笑うようになった。

時折、こちらを氣遣ったり、大人のような行動を取り驚かされたが、たまにベツトで泣いているのを慰めたり、学校の宿題と解くのうんうん唸っているのを見ると、まだまだ子供だなと思う。

しかし、7、8歳の頃だろうか、何か吹っ切れたような顔するようになり、行動が目に見えて大人びるようになった。

なのに学校ではイタズラをよくして、よく私が呼び出されていた。学校での彩と家での彩で、あまりにも違うので戸惑うことが多かった。

そして、その頃からあの子には一切手がかからなくなり、子供を得たことで一時的に戻った熱が再び冷めていくのを感じていた私は、夫と二人で出かけることの望むようになった。

夫も彩に手がかからないのを知っていたからだろう。

彩を一人留守番させ、出かけた。

特にそのことについて罪悪感を感じたことはない。

私達の仲が良いと、なにより彩が喜んでいたからだった。

そして彩は、学年でほぼトップの成績でクラスでもムードメーカーになり、よく担任に褒められ、まるで我がことのように誇らしかった。

あまり何かを与えたりすることはできなかったが、それでもあそこまで真っ直ぐに育ってくれて本当に嬉しい。

大人びた彩。泣き虫な彩。

どちらも本当の彩。私達のかかけがない宝物。

だから、だから・・・どうかこれからもう健やかに過ごしてほしい。怪我もなく、なによりも泣かないで生きていて欲しい。

そう、思った。

「彩・・・」

あなたの顔をもう一度見たかった。

そして、そこで私は体にすごい衝撃を受け、意識を失った。

3話 発見（前書き）

原作（？）開始までは結構かかります。

3話 発見

両親が死んでからちょうど2年が経った。

あの頃が大いに取り乱してしまい、学校にも行かずに家に閉じこもっていた。

別に知らない親戚類が来たりして、財産についてあれこれ、なんてことはなかったのは幸いだった。

前世で両親が死んだりなどと、身近に死を感じたことは今までになかった。

転生し、自分の本当の親ではないと始めは思っていたが、長く共にすごしているとやはりと言うべきか、家族、という繋がりを感じるようになった。

悲劇の主人公になりたいわけじゃない。

どちらかと言えば、やっと吹っ切れたこの世界で、大いに高校生活や、できなかった大学生生活をエンジョイしたいと考えていた。そんな矢先の出来事だった。

正直、世界から色が消え、どうしようもなくなった。

転生し戸惑いを隠せず、唯一とまでは言わないがこの世界での安息の地であった家。

その家も、住む住人がいなくなれば意味をなさなくなる。

そして結局は、よく遊びに行ったりしていた祖父母の家に預けられることになった。

祖父母の家はそれなりに裕福らしく、何よりも同じ学校に通える

というのが大きかった。

そして、祖父母の家でなんとか立ち直り、両親の死後から一ヶ月後、ひさしぶりに学校へ通った。

いつも通りの明るさを振りまいている俺に、不安な顔を向けながらも、皆俺に合わせてくれた。

空元気であったのは間違いないのだが、自分は塞ぎこんでいては、立ち直れなくなるキャラだと自覚していたため、俺は空元気でありつづけた。

俺が完全に両親の死について受け入れられたのは、そのような環境だったからかもしれない。

クラスメイトにも、そして過去の自分の行動にも感謝しながら俺は日々を過ごしていった。

そろそろ中学最高学年の中学3年生の終盤にさしかかったころのこと。

気付いてしまった。

そう、ここはやはり、というか今まで気付いてなかったわけではないのだが、『ペルソナ3』の世界なのだ。

何故なら、見つけてしまったのだ。『月光館学園』という高校を。

『月光館学園』というのは、ペルソナ3の舞台になった高校だ。

やはりな、と思いながらもネットでその学校について調べていく。

世話になっている祖父母の家からは正直遠い。

もし、ここに通うのなら寮になるだろうな、と思いながらもどれほどの偏差値が調べていく。

「ふむ・・・余裕だな」

別段月光館が低いわけではないのだが、自分は正直高校3年生のレベル以上の頭を持っているのだ。

それくらは当たり前だろう。

そして、両親が死んでほんの一時期引きこもっていた時に気付いたことなのだが、

自分のステータスが上がっているのだ。

学力…4

なかなか優秀

魅力4

光っている

勇気5

肝が据わっている

Lv1 流峰 彩

HP 10／10

SP 12／12

普通

NEXT EXP 10

レベルは上がっていない。
これは当たり前だろう。

レベルを上げるにはペルソナを手に入れ、シャドウを倒す必要がありそうな気がするのだ。

しかし、だ。

問題はそこではない。

学力、魅力、勇気が全て一段階づつ上がっているのだ。

夜はあまり出かけていない。となると原因は放課後の生活だろう。大盛りの牛丼を食ったりなどしていた覚えがある。

しかし、あれで勇気が上がるのは『ペルソナ4』だったと思うのだが……。

まあ、それは置いて置くとして。

このステータスの値なのだが、『ペルソナ3』で主人公は初期でオール1だったはずだ。

しかし、たったの1年でそれをMAXにすることは余裕だったはず。

自分も前世では『ペルソナ3』『ペルソナ3FES』『ペルソナ4』『ペルソナ3ポータブル』を買った。

まあ、買ったといってクリアしたわけではないのだが、どちらかというと攻略サイトを見て、余裕とか思っていたニワカだ。

また話が脱線してしまったのだが、思うに高校生の間が一番成長するのだろう。

まあ、主人公は特別過ぎる、という説もあるのだが、というよりそちらの方が有力だ。

しかし、攻略サイト見ながらやっていた俺からするとあることが気になるのだ。

学力が2の状態で、始めの中間テストの選択肢を全て正解させると、なんと上位10位に入れるのだ。

もうおわかりいただけただろうか。

自分は今、学力4なのだ。

そして、選択肢は全て授業中に教師が言っていた。
つまり、

学力2＋選択肢全問正解⇨学年10位以内

という方程式が成り立ち、それに今の自分を代入すると、

学力4＋前世の知識⇨学年1位

というのも十二分にありえるわけだ。

余裕過ぎるのではないか？

その上、多分高1の間に頑張れば、ほぼ全てをMAXにできるのではないかと思う。

なにより、一度あがったステータスが下がったためしがないのだ。
学力にせよ、魅力にせよ勇気にせよ。

一度到達すると下がらない。これはやはりゲームの設定と同じなのだと思う。

下がることのない魅力や学力なんて現実ではありえないことなのだから。

つまり！言いたいことを簡潔に言くと、

初期の4月から桐条先輩や岳羽さんや、後々登場の山岸さんと！
なんと一発でコミュを作れるのだ！

と、ここまで思い、すごく、本当にすごくテンションが上がった
のだが、これだけ友達がいてもコミュの存在を感じたことはないし、
影時間も知らない。

これはフラグが建てれないのではないかと思う。

正直、せっかくなので原作に介入しようと思うのだ。
なにより、主人公が男だった場合、女の子達をとられる可能性が
高い。

そこで早目、早目にアプローチをかける必要がある。
何よりペルソナに目覚めていない、今後目覚めないかもしれない
自分には影時間で共に過ごすという分、主人公に差をつけられてし
まうのだ。

結論から言って、

「とにかく・・・ペルそなあ！！カモン！！」

叫ばずにはいられない日だった。

3話 発見（後書き）

しよっぱなからステータスがチートっぽいですがお気になさらず。
ここらへんから自己解釈が激しくなるので、もし間違っているの
であれば言ってください。
直せる時は直します。

4話 入学（前書き）

言葉使用が適当です。

4話 入学

待ちに待った月光館学園の入学式。

俺は、対して緊張した風もなく入学式の中にいた。

あの日、ペルソナを望み夜叫んだ日（後に祖母からどうしたの？
としつこく聞かれたのは割合して）から約半年が経ち、俺は無事入
学式を迎えることができた。

家から遠かったので祖父母は反対したのだが、自立してみたい、
とかなんやら色々いってこの学校へ来る許可を得た。

中学卒業と同時にそちら移るためか卒業式は大変だった。

中学の友達達は会えなくなるから、と泣き出したりしたのだ。

特に男子に泣かれた。

まあ、そこでもらい泣きをしてしまい、歳に似合わず泣いてしま
った。

どうやら俺は今も昔も涙もろいみたいだ。

まあ、そんなことはおいといて、ついに入学式を迎えたのだ！

俺の前方には入学式にも関わらず帽子を被った生徒が見える。

多分あれが伊織順平だろうと思う。

そして、その帽子の左後ろらへんに座っている、白いチョーカー
をつけた生徒。

これは間違いなく岳羽さんだ。

入学式ということもあって、あのピンクの上着（あれはなんと
言うんだろうか）は着ていない、普通の制服のためわかりにくいが
チョーカーらしきものはつけている。

というより、伊織とか、帽子脱げよ。思わず言いたくなるが誰も言おうとしないので、ここは黙っておくでしょう。

入学するに当たって、俺が割り当てられた寮なのだが、伊織と一緒にの寮だった。
思わず、

「あれ！？俺もしかして適性あんの！？」

とか部屋で喜びのあまりベットに飛び乗って、はしゃぎまくったのは仕方ないだろう。

もし、例え後になって、

「あ、伊織って途中から原作の寮に行くのか」

なんて気付いてしまったとしてもだ。

まあ、結論を言うには、自分にはまだ適正はないっぽい。

これから1年の間になんとかして適性にならなければ、正直置いてけぼりをくらう。

ご都合主義みたく、途中から参戦して、レベルが主人公達に合わせてある、なんてことはきっと俺には適用されないだろう。

そんなこと頭の中で考えながら入学式で校長の話を聞く。

——ツンツン

「？」

横腹を指でつつかれ、思わずそちらに目を向けると、どこぞのモブキャラ（笑）みたいな生徒が俺の方を見ていた。

「お前、度胸あんな。入学式で寝るなんてさ」

正直、濡れ衣もいいとろだなんて思いながら俺は、当たり障りのない言い方で答える。

「あれ？俺寝てた？」

すると、その生徒は若干呆れが混じった顔で、

「下向いて、目を瞑って固まってるヤツ見て、起きてるなんて思うやつはいねえよ」

どうやら考え事をする時に下を向く癖は治ってなく、その上目を瞑っていたらしい。

「あゝいや、なんていうか寝不足？でさ」

「わかるよその気持ち。だってこれから高校生だぜ？俺ら」

ニヤニヤと何を想像したのか知らないが、その生徒は腕を組んで言う。

「あ、俺、友近健二な。これからヨロシク。あんたとは気が合いそ

うだ」

（おおお！原作キャラ！接点持つのはええ！てかこいつモブ顔過ぎる！！）

内心驚き、そして爆笑しつつ表面ではさっきと変わらぬ顔で接する。

「俺は琉峰彩。よろしく」

ニヤリと笑って返す。

「おうよ。お前と友達になるとナンパ成功率が上がりそうだ」

そう言って友近もニヤリと笑う。

「おいおい、俺をダシに使うつもりかよ」

「冗談だっの」

なんて、初対面とは思えないような会話をしながら、校長の時間時間を潰す。

「にしても長いな」

「ああ、なげえわ」

もうそろそろ45分くらいだ。

そろそろ終わってもいいはずなんだが、校長の様子からすると、今で半分みたいな感じだ。

「ありえねーわ。・・・てかさ、知ってる？」

友近に言われ疑問に思い言い返す。

「何を？」

「この学校ってさ、他の学校に比べてレベルが高いんだよ」

「なんのレベルだよ？」

「もちろん・・・女子さ！」

小声で言いながらも、ちゃんと“！”の感情も伝えれるっていうのは、なかなかにできない真似ではないかと思う。

「ああ・・・なるほど。ってもしかしてそんな理由で？」

「流石にそれはないけど、結構おっきなウエイトを占めてる」

まあ、自分も人のことは言えないのだが。

「てことは、早くも誰かみつけたか？」

「これからだっての」

ニヤニヤと友近と笑いあう。

本当にコイツとは気が合いそうだ。

（そういえば友近と言えば、叶先生だな・・・）

教師陣に目を向ける。

（でも、叶先生の顔知らないんだよなあ、俺）

「お！お前良い趣味してんじゃん」

嬉しそうな声を友近が上げたのでそちらへと視線を向ける。

「やっぱ、狙うは大人だ」

「おいおい、さっきまで『この女子は』なんて言ってたやつのセリフじゃねえな」

そう言うのと友近はまたニヤリと笑う。

「一応、この席から見える女子を見たけど、正直なんかこう、グツとくるもんがないわ」

「・・・わからんでもない」

「お？マジで？やっぱ気が合うな」

（まあ、こいつが年上好きってのは分かったことなんだけどな）

内心そう思いながら、友近へ俺もまたニヤリと笑いかける。

自分的には大人、というよりも、自分と精神年齢が合いそうな人間が同学年にいないのが大きな問題だろう。

どうも、同学年相手だと、というより一つ二つ程度ではそういっ

た恋愛対象にはなりづらい。

そのことは中学の時に告白されてか改めて気付いたことだ。

何より中身はもう30を超えている。

女子高校生に欲情するのはどうかと思わずにはいられない。

しかし、これでは原作キャラにフラグを立てる、という当初の目的が早くも潰れそうだ。

「しかし、あの先生、めっちゃ色気あんな」

そう言って友近が見ている方へと俺も目を向ける。

（・・・なんていうか、あれ叶先生っぽいな）

俺の直感がそう告げている。

（ていうか友近、この時点からすでに気になってるのか。なかなか難儀なことだ）

それにしても、男主人公の場合の『魔術師』のコミュを発生させることができる友近と知り合えた、というのは結構嬉しい。

特別課外活動部SEESのメンバーではないので直接原作に関わりはないのだが、なんだかんだ言ってきっかけを掴めた、そんな気がした。

（てか・・・叶先生・・・いいかも）

なんて思わずには居られないほど、あの人は色気をだしていた。

4話 入学（後書き）

伊織が最初どうしてたとか、友近が何処から通ってたとか、そこらへん全くわからないので、
とりあえず二人とも寮ってことで W W W

5話 友達

まず入学や転校して、最も大切なのは最初の友達だ。

俺の場合、中学校からではないので、全員と初対面の状態ゆえに、それが余計に必要なになる。

何をするにしても一人というのはダメだ。

寂しい、というのもあるがやはり何かと不便なのだ。

いざノートを借りるにしても。

何か質問するにしても。

相談にしても。

一人というのは不便で仕方がない。

故に俺はとにかく誰かと友達になろうと、主に狙っていたのは伊織なのだが、気付けば友近と友達になっていた。

これは嬉しい誤算だ。

一人友達がいるのといないのでは天と地ほどの差がある。

「伊織順平でっす！これからヨロシクウ！趣味は・・・」

今は入学式が終わり、教室に戻って自己紹介のときだ。

というよりも、友近も伊織もともに同じクラスとは、運がいろいろか。

「岳羽ゆかりです。よろしく」

伊織などとは違い、自分の名前だけ簡潔に述べる岳羽さん。

「友近健二です。一番すきなのはラーメンです。これからよろしく」

しばらくして友近の番が回ってきたようだった。

岳羽さんも同じクラス・・・

⇒運命を感じる

偶然だ

仕組まれているようだ

（・・・なんだこの選択肢は・・・もしか仕組まれているのかっ！
？それが本当な

「琉峰君！」

「・・・っ！？おっと俺の番か」

いつの間にか俺の自己紹介の番になったようだった。
鳥海先生が呆れながらこっちを見ている。

（鳥海！？）

もしか、やっぱなんかこれ仕組まれてんじゃね？
そう思わずには居られない。

「おっとじゃないわよまったく」

「さーせん。えっと琉峰彩です。趣味は友達作りです。ヨロシク」

趣味は友達作り。

そう、俺の趣味はこれなのだ。

最初に友達の必要性を語ったように、俺の趣味はコレだ。

前世では男限定だったため、それほど量はいなかった。

かといって少ないなんてはずもなかったが。

とにかく友達を作る！

中学の時の友達は、当時携帯をまだ買っていなかったのほとんど連絡が取れない。

となると！

この高校生活にかけるしかない！

なんて意気込みながらも、表面ではボォーと先生の顔を見ていただけだった。

「おいおい。お前さ、なんか寝てること多くない？」

友近が帰りになって話しかけてきた。

「別に寝てるわけじゃないんだけどなあ」

なんてボヤきながら鞆を持って立ち上がる。

「ま、どうでもいいけどさ。それより！ラーメン食いにいかね？」

「おいおい、マジでラーメン好きなのなお前」

「当たたり前だろ。じゃなきゃわざわざ言わないっつの。んなことよりお前の『趣味は友達作り』ってなんだよ」

笑いながら友近がそう尋ねてくる。

「あーそれはな」

「あっ！それ俺も気になる〜！」

突如、友近に友達の重要性を語ろうとしていた俺の言葉を遮るように声がかかった。

「んあ？・・・老けてんなお前」

ゲーム画面を見ながら常々思っていたことを言う。

「ぐはっ！・・・お前、割と人の心をエグるな」

胸を押さえてうずくまり、そんなことを言いながら伊織は立ち上がる。

「髭剃れ髭」

「いいんだよこれは、これが俺のチャームポイント、ってやつ？」

なんていいながら決めポーズを取る伊織。

「おいおい、そりゃないだろ」

横に居る友近が思わずツツコム。

「お前みたいに特徴ないやつよりマシだっつの！」

（・・・ズバリだな！）

「・・・てつめ、人が一番気にしてることを！」

「はいはい。どーでもいいっての。てかお前誰よ」

流石に喧嘩に発展させるわけにもいかず止める。

「ん？俺のこと覚えてない！？あんなにアピったのに！？」

「あーワリ、髭しか覚えてないわ」

「ひどっ！」

「それで、誰よ」

「おいおい・・・『友達作り』とか嘘なんじゃねーのコイツ・・・
まあいいか。俺は伊織順平！気軽に順平って呼んでくれ！」

なんていいながら、さっきとは違う決めポーズを取る伊織、いや
髭。

「俺は琉峰彩。まあ、彩って呼んで」

チラリと横に目線を向ける。

「・・・俺は友近健二。なんとも呼んでくれ」

「じゃ、モブで」^^b

思わず言ってしまった俺は悪くない。

「ぶっははは！そりゃイイ！じゃ、今から俺達は友達だぜ！彩！」

よくわからない熱血ぶりを順平、いや髭が発揮していた。

「おう！よろしくな！髭！」

「おい！」

「・・・どーせ俺はモブだよ・・・」

伊織、いや髭の突っ込みのテンションとは正負が全く逆のベクトルのテンションのヤツがいる。

「・・・あー悪かったって」

ぽんぽんと座りこんでいる友近、いやモブの肩を叩きながら俺は慰めてやる」

「って、声に出てるから！てかモブって言い直さなくていいから！」

「どうやら声に出ていたらしいが、それは気にしていけない。気にしたら負けだ」

「いやいやいや！全然負けじゃないよ！もっと気にしようよ！」

なんかもうキャラが早くも崩壊してる友近。

「まあ、いい。そんなことよりも『友達作り』について語るとしよう」

「話逸らさないで！」

友近の悲痛な声が聞こえるが、

「いや、コレが本題だから」

そう言うのと、友近がまた凹み、それを伊織、いや髭が同情した目で見ていた。

「よし、では『友達』の大切さから話そうか」

「いや！いいから！もういいよ！」

よほど『モブ』が堪えたのだろう。
友近が泣きそうになってる。

（そんな顔も・・・モブだぜ^^b）

そう思わずには居られなかった。

6話 部活

入学して直ぐだが、そろそろ部活に入部ができるらしい。そして、俺はここで重要なことに気が付いてしまった。

（宮本って・・・何部！？）

そう、問題はこれにつきる。

マネージャーの西脇さんを狙うために、同じ部活に所属する最も手っ取り早い方法が宮本と同じ部活に入ることなのだが。

（いや、だから何部！？）

宮本は残念ながら違うクラスだった。

ゲームなら、主人公が入った部活に自動的に宮本と西脇さんがいるようになるのだが、自分においてはそんなことになるはずがない。しかし、西脇さんと接点を持つにはなんとかして、宮本と同じ部活に入る必要があるのだ。

（どうしようか・・・）

部活の入部は強制ではない。

既に順平と友近・・・いや、髭とモブは帰宅部にすると言っていた。

（あれほど友達の重要性について語ったのにな）

残念で仕方がない。

部活の友達というのは、友達グループを構成するに当たって、大体8割程度の確立で同じ部活の人間がその構成メンバーに入る。そしてなにより、上や下との関係を持てる、という普通の生活では得られない関係を得れるのだ。

ゆえに、部活は『友達作り』には最適なのだ！

と、まあ、それは置いて置いて、唯一の救いは途中入部が可能、ということだろう。

後から宮本を見つけその部活に入るとというのが最も良い方法な気がする。

しかし、やっぱり途中入部よりも、最初から入りたいというのが俺の願望だ。

ゲームの主人公みたいに、一回一緒に帰ればランクが1上がる。つまり10回一緒に帰るだけで親友の域まで達してしまう、なんていうチート(?)能力は俺にはない。

だから、早いうちに早いうちに宮本と関わりたいわけなのだが。

(マジでどうしょ・・・)

まだ、友達は髭とモブのみ。

友達情報ネットワークはまだ作られていない。

とにかく、方法として挙げられるのは、

⇒後から見つけて入る。

宮本と友達になって一緒に入る。

西脇さんと友達になって一緒に入る。

（ダメだ・・・どれもダメだ。辛うじてありなのは2番だな）

宮本と友達になる・・・か。

正直時間がない。

いきなり違うクラスの生徒が来て、それで友達になろうとしてきたら、ソレはかなり怪しいだろう。

となると・・・最終手段。

（アテ勘で入る）

無理じゃないか？いささか無理があるんじゃないか？

原作で宮本が存在しうる部活は、水泳、剣道、陸上。

この3択だ。

3択、テストなら当たりそうな気がするがこの状況ではイマイチ分が悪い。

（はぁ・・・とりあえず見学だけでも今日中にしておくか）

ため息を付かずには居られなかった。

＞この先はプールだ。

水泳部が使っているらしい。

＞“水泳部 部員 大募集 途中入部OK！”

イルカと共に太平洋横断！”と書いてある。

＞水泳部に入部しますか？

⇒さっそく入部する

まずは見学してみる

入部しない

（見学だな・・・てか、なにこれなんで選択肢？）

⇒まずは見学してみる

俺は室内プールへと入った。

「お？入部希望者か？」

ブーメランパンツをはいた先輩らしき人物が話しかけてくる。

「いえ、見学です」

そう言って、許可をもらってから端の方へと行く。

（宮本は居ないな）

それだけ確認してすぐ出るのもアレなので、少しだけ泳いでいる生徒を見る。

大体時間にして5分程度ただたろうか、

（なんか女子からの視線が痛いな・・・）

居たたまれなくなりプールから出た。

「ふう・・・次は・・・」

＞この先は体育館だ。

剣道部が使っているらしい。

＞“剣道部 部員募集 途中入部OK！

漢を極めてみませんか？”と書いてある。

＞剣道部に入部しますか？

⇒さっそく入部する

まずは見学してみる

入部しない

（て、いい加減これダルくない？）

⇒まずは見学してみる

そして、俺は体育館へと入った。

「入部希望者？」

防具を今からつけようとしていた先輩に声を掛けられた。

「いえ、見学です」

さっきと全く同じセリフを吐いて、また許可をもらって隅の方へ
と行く。

（・・・顔見えねえよ。てか宮本ってもう来てんのか？てかまだだ
よな・・・）

剣道部の気合の入った声をこんな間近で聞いたのだが、あまりビ
ックリしなかった。

（まさか！これが、これが勇気の力か！！）

そう思わずには居られない。

「ふう・・・てか見つかるわけないかな」

体育館から出てきてそうつぶやく。
あとはグラウンドの陸上部だけだ。

>この先はグラウンドだ。

陸上部が使っているらしい。

>“陸上部 部員募集 途中入部OK！”

風になろう今なら飛べる！”と書いてある。

>陸上部に入部しますか？

（飛べる？んなわけあるかボケエ）

なんてツツコミつつ、

「お、お前も陸上部に入るのか？」

さっきと同じようにまた頭の中に選択肢がでるのか？と思った矢先に声をかけられ振り返る。

（ミ・ヤ・モ・ト、キターー）

あくまで心のなかだが、そう叫ばずには居られない。

「ん？違ったか？」

内心ではこの偶然に感謝しながらも、表面ではそんな素振りは全く見せずに言う。

「いや、なんか一人でいくのがちよい不安でさ」

なんて言ってみる。

「ふーん。ま、ちょうどいいんじゃない？俺、中学から陸上やってんだよ」

そう言うのと宮本は俺の横を通りすぎてグラウンドへと出る。

（てか、てかお前！ジャージかよ！）

これもまた叫ばずには居られない。

7話 部活(2) (前書き)

サブタイトルは適当です。

話数だけでは味気ないので付けたので、変でも気にしないでください。

7話 部活(2)

部活に入ってから大体2週間がたった。

部活に入ったことによって、宮本と西脇さんと知り合う、という目的は達成されたと言えるだろう。

1年の陸上部員の中で、俺はそれなりに足が速いみたいだ。

直視の魔眼にしても脅威の幻視にしても、どの道それらの発動をより十分なものにするには、体を鍛えるのは必須だったためそれなりに鍛えてはいた。

しかし鍛えた、といってもフットワークや瞬間的な瞬発力と集中力。

これらが最もメインになっていたため、陸上部では正直ヤバいな、なんて思っていたのだが、その心配はなさそうだ。

「お前、割と早いな」

入って直ぐに期待のホープ扱いの宮本は、練習ですぐにタイムを計ったりしていた。

入りたての俺は、柔軟やフォームのことに关してしか触れていなかったのだが、宮本にさそわれ今さっき一緒に走ってみたのだ。

「んーそうか？てか、彩って呼べよ」

なんとなく人に『お前』とか言われるのはあまり好きじゃない。別にそれは俺だけじゃないと思うのだが。

「あー、そうだったな。にしてもなんか自信失くすぜ。中学からや

ってきたのに最近始めたばかりの奴と対してかわらないなんてさあ」

「いやいや、結構差あったろ？」

それなりに差はあったはずだ。

それに俺は全力で走ったにも関わらず、宮本は最後までへんは流していた気がする。

それでいて俺が負けているのだから、結構な差だとは思う。

遠くから宮本を呼ぶ先輩の声が聞こえる。

「お前、いや彩はこれから伸びると思うぜ」

ま、負けないけどな。と続けて宮本は先輩陣の方へと走っていった。

「ふう・・・結構キツイのな、陸上って」

「当ったり前でしょ」

なんとなくボヤいてみたが、どうやらソレを聞いている人が居たみたいだ。

「お、西脇さん」

「結子でいいって言ってるじゃん」

「あーそうだった」

なんて、ポリポリと頭をかく。

「ミヤに自分のこと彩って呼ぶように言ってるくせに、当の本人は私のことを苗字で呼んでるなんて笑えないですけど」

若干口を尖らせながら、そんなことを言う西脇さん、いや結子。

結子の言う『ミヤ』というのは宮本のことだ。

二人は幼馴染らしい。

らしい、と言ってもそんなことは知っているのだけれど。

「にしても、これはまた明日筋肉痛な予感がする」

どうやら普段鍛えている時とは違う筋肉を使っているみたいで、しょっちゅう筋肉痛に悩まされる。

「まだ筋肉痛なってるんだ。いい加減慣れてもいい頃なのにね」

まあ、それはあんたら二人のように昔から鍛えてる奴らのみだけどな！

なんて言えるわけないが、

「そーだね。そろそろこの痛みとはおさらばしたいよ」

「彩はとりあえずは体力だね。息切れするの早すぎ」

ニヤッとイタズラを見つけた子供のような表情をする結子。

「俺は短期集中型なの」

なんて言い訳を試みる。

「はいはい。此処2週間でそれは聞き飽きたー。短距離走といえど、何本も一日に走れなきゃ練習になんないってば」

正直、体力には全くの自信がない。

結構部活をしていたのだが。

ちなみにその部活はバスケット部なのだが。

普通バスケットといえば体力と考える人も多いと思うが、実際の出来上がっていない中学生に体力作りのために走りまさせることは、いらない筋肉がついて瞬発力が落ちるのだ。

それゆえに中学時代は、あまり体力づくりに励んだ記憶はない。

ポジションもPG、スラダンで言うあのブロッコリーのところなのだが。

正直、部活をしていたというよりも、皆で遊んでいたというような部活だったので、全く体力に繋がらなかった。

その結果、運動部に入っていたにもかかわらず俺には体力がない。

「ま、2週間前に走り出したばっかであれだけ走れるなら、結構才能あるんじゃない？」

「お？マジで？今のでちょっとやる気でできたかも」

なんて青春してる少年みたいなセリフを言ってみる。

実際は、

（どーせ影時間に入れるようになったら、自然と体力つくんだし、ま、いっか）

なんて思ったりする。

「お、そろそろ1年に集合かかるんじゃない？」

「んお？」

結子は最後にそう言ってマネージャー陣へと戻っていった。

その後ろ姿に数秒視線を送った後、顧問の竹ノ塚先生の方へと目を向けると、首にかかっているホイッスルに手をかけているところだった。

（おうおう、俺と話してたのにいつの間に先生のこと見てたんだよ）

なんて思っているとホイッスルが鳴らされ、1年が呼ばれるのを聞いてそちらへと向かった。

そして、今日の部活が終わった。

「ん？ 彩も今帰り？」

下駄箱に疲れた体を引きずって向かうと、結子が靴を履き替えているところだった。

「おう。そっちも？」

「そ」

＞どうやら結子是一緒に帰りたいようだ。
＞ペルソナもコミュもないがどうする？

⇒一緒に帰ろうぜ
じゃね

(またかよ。てか、ほんと何この選択肢)

選択肢の存在をテラ疑問に思いながら、

⇒一緒に帰ろうぜ

を選択する。

「一緒に帰ろうぜ」

(これ、口が勝手に動くのな)

そのことに驚愕しながらも、表面では笑顔で結子に尋ねる。

「いいよ。ミヤはどうも先生となんか話しあるみたいだし」

＞結子はかなり嬉しそうだ、まではいかないがほどほどに嬉しそう
だ。

(・・・なんでそんな遠まわしなんだよ)

しかしまあ、原作では2回だったか3回だったか、それくらい話
しかけた後でないと一緒に帰れなかったのだが、一発である。

ま、いくなれば

(やっぱりか！やっぱり、勇気の花なんだな！これは勇気なんだな
あ！！！)

と、内心叫ばずには居られなかった。

7話 部活(2) (後書き)

誤字脱字がありましたら、感想をお願いします。

8話 年上

今の所、俺の『友達作り』は順調だ。

入学して、まだ全然時間が経っていないが、すでにクラスメイトとはだいぶ打ち解けている。

そして、肝心の原作で名前が出ていた人の知り合いは、
友近^{モブ}、伊織（髭）、宮本^{ミヤ}、西脇（結子）この4人がそれなりに仲が良い。

そして、ワンランク下がった程度は、岳羽（岳羽さん）だ。

なかなかの出来ではないかと思う。

そして、何故今こんなことを言っているのかというと、

（タメじゃ駄目なんだよ！タメじゃ！）

どうやらさっそく友近に毒されているようだ。

二日前。

「でさー、彩狙ってるやつとかいんの？」

授業の中休みに後ろの席の友近に声を掛けられた。

「狙ってる・・・って、流石にまだそんな時期じゃないだろう？」

「そうかあ？ だってお前、岳羽さんともそれなりに話すしさ、そのうえ部活のマネージャーまで、ほんと見境ないなあ」

確かに岳羽さんとはよく話す。
いや、もう原作キャラだしね。

（でも、正直あのキャラめんどくさいんだよな。なんか絡みづらいんだよ）

原作キャラでなければ、いくらあの顔でも正直お断りしたいところだ。

「まー、普通に友達だからな。そういうモブはどうなんよ」

なんていうか、精神年齢に差がありすぎてそういう対象に見れないんだよ。

「おまえ・・・もう、いいよ」

「何事も諦めが肝心だ」

「・・・なに名言みたく言ってたんだよ。そんなことより、やっぱ駄目だな、あいつらはガキだよ、ガキ」

なんて言いながら、なんか悟った顔をしてい友近。

「おいおい、モブ。お前もしかして、マジでエミリーねらってるの
お？」

突然横から伊織が話しに入ってきた。

「え？マジで？・・・モブ、お前やめとけって。所詮モブだぜ？モブ。無理無理」

「お、おまえ・・・殺されたいのか！？」

ガタンと音を立てて友近が立ち上がる。

「あの人、しってっか？なんかたまに廊下ですれ違うと俺見て笑うんだぜ？あれは絶対、俺に気がある！」

「んなわけねーだろ。どうせ『あ、こいつまたモブ顔晒してやがる』なんて思ってるんだって」

「ぎやははは！それありえる！！」

伊織はどうやら俺のモノマネになってないモノマエがツボったらしい。

「お、お前ら・・・そこは普通友達として応援するところだろ！」

ポン、と友近の肩に手をのせ、諭すように言う。

「友近・・・友達として言う。『やめとけ』」

最初の『友近』でちょっと目を輝かせたようだったが、最後のセリフでその希望は完全に墜落したようだ。

「ま、そこらへんいしとけよ彩。まあさ、確かに、ゆかりっちもエミリーもイイけどさ、やっぱりもっと大人のお姉さんの方がイイ！そうは思わないか！？」

突如、さっきまで笑い転げていた伊織が熱烈に語り始める。

「こう、なんていうか、ボツ、キュッ、ボンッて感じでさ、大人の色気っての？エミリーみたいなねっとりじゃなくてさ、もっとこう、なんていうかさ！」

一人でクネクネし始めた伊織。

今だに俺の言葉が胸に刺さって抜けないようで、落ち込んでいる友近。

なんていうか、

「なんだこのカオス」

そう呟かずには居られない。

その後立ち直った友近と、平静を取り戻した伊織とで『理想の女』についての話が始まった。

←以下、伊織、友近、俺の順番のループ。

髭「ロングヘアだな」

モブ「確かにそれは外せないな」

俺「そして、黒だな」

髭「おお！それわかる！」

モブ「そんでもって綺麗系だな」

俺「まあ、お姉さん、だもんな」

髭「そして毒舌！」

モブ「・・・それはお前だけだよ、このドM」

俺「確かにな。俺はどちらかというとSだ」

※主人公は元々自分が『キング・オブ・チキン』と呼ばれイジられていた頃、すこしMに目覚めかけていたことをすでに忘れています。

髭「ぐっ・・・まあ、彩がSってのは分かるわ。歳は・・・」

モブ「24だ！」

俺「なんでそんな具体的なんだよ」

髭「俺は27までいける！」

モブ「俺は28までだ！」

俺「聞いてねえよ！・・・ちなみに俺は30までいける！」

髭「それこそ聞いてねえよ！てか三十路はOUTだっつの！」

モブ「しっかし、そんな人この学校にいねえぞ」

俺「伊織の言ってた人なら、『ロングヘア』さえ除けば鳥海先生いけんじゃね？」

髭「・・・俺の今までのセリフ、なかったことにして」

モブ「んなことより、これはやっぱナンパしに行くか？」

俺「おいおい・・・なんて名案思いついてやがる」

髭「お前、態度とセリフがあってねえよ！」

モブ「ふっふっふ、最近思ってたんだが、行くならやっぱポロニアンモールのクラブだろ！」

俺「おいおいモブ・・・お前、天才か？」

髭「だから、なんでそんな呆れた顔しながらそんなセリフ言ってるだよ」

結論から言おう。

やはり『大人に限る』。

そこから俺の思考はかわった。
目に入るのは大人びた女のみ。

しかしだ、正直同じ学年にそれを求めるのは無理ってものが・・・

（おおおお！？）

思わず思考をやめ立ち止まってしまった。

（あ、あれは！『ペルソナ3ポータブル』新キャラの長谷川さんじゃないか！）

彼女がここにいるということは、この世界は『ペルソナ3ポータブル』の可能性が高い。

『ペルソナ3』の世界に彼女がいなかったか、と言われれば、それは設定されてないだけでいたかもしれないが、やはり『ペルソナ3ポータブル』であるから、という方が理由になるだろう。

そしてなにより、

（大人びた女性だあああ！！！！）

そう内心叫ばずにはいられない。

8話 年上（後書き）

長谷川さんがいつ頃復学してきたとか知らないのですが、とりあえず初期からで。

誤字脱字がありましたら、感想でお願いします。

9話 年上(2)

『ペルソナ3ポータブル』の方は、男主人公しかプレイしたことがなかったので、女主人公のコニユに関しては、ほとんど知識がない。

女主人公の場合のコミユについてある知識は、誰がコミュで、どういった顔で、それでおおまかな事情のみ。
詳しい内容は全くわからない。

しかし、だ。

長谷川さんが今の3年生と同じ年齢だということは知っている。

そして、噂に違わぬあの色気。

これは、狙わぬでいていいだろうか、いや駄目だ。反語。

と、いうわけで、

「長谷川さん」

まずは話しかけてみた。

「?どなたですか?」

いやはや、初対面でいきなり女子に話しかける。

これはまさに、

(勇気だああ!! This is bravery!)

内心叫ばずにはいられない。

「なんの御用でしょう？」

「突然目の前に綺麗な女性が現れれば声をかける、それが紳士って
もんですよ」

「あらあら。お世辞がお上手」

「お世辞なんかじゃありませんよ」

「ふふ。そういうことにしておくわ。それよりなんで私の名前を？」

「・・・」

おっと、そこを突付かれると、さっきのまるで偶然ですよ、みたいな発言に矛盾が。

「ふふ、琉峰さんは面白い人ですね」

長谷川さんは勝手に呼び止めたのにも関わらず、優しい対応で話
てくれる。

「琉峰さんなんて他人行儀な呼び方はなしなし。彩ってよんでよ」

キラ☆、がつきそうなくらい笑顔MAXで言う。

（魅力4の我が力ああ）

ていうより、この人も俺の名前知ってるんじゃないか。

「ふふ・・・丁寧語以外で同級生と話すのって楽しいね」

（・・・え、効果なし？）

俺の魅力はいずこへ？

「そっかな？だって、今は同級生でしょ？あ、それとも敬語使った方がよかった？」

「ううん。そんなことないよ。こっちの方が全然いい」

長谷川さんはたしか、自分が周りより年上で、クラスに馴染めないことを悩んでるんだったような気がする。

「そっか、なら遠慮なく」

「・・・そういえば彩君は、なんで私に話しかけたの？」

長谷川さんはどこか悲しそうな顔で聞いてきた。

「ん？なんでって・・・俺の趣味が『友達作り』だからだよ」

「『友達作り』？」

（やべえ・・・この趣味、超使える）

特に初対面の人用にバッチリな言い訳だ。

「そ、『友達作り』。まだ2クラス分くらいしかできてないけどね」

「それって、私と友達になりたい、ってこと？」

俺が、恋人になりたいと思って近づいたんだらうとこの人は思っていたのだろうか、かなり不思議そうな顔で尋ねてきた。

「そゆこと。長谷川さんとは話したことなかったし」

「そっか、でも、いいの？」

「何が？」

「私といると、ほら・・・」

長谷川さんは俯き加減で尋ねてくる。

その言葉に、問題ない、と答えようとした時、

「あ、先パㇿイ」

1つか2つかはわからないが、多分先輩であろう女子が声をかけてきた。

かなり皮肉を込めた言い方だった。

先輩といったことから多分今の2年生だろうと推測する。

そして、その先輩という響きに悲しそうな顔をする長谷川さん。

「あ・・・」

俺に聞こえる程度の声を上げる。

「今度はその男ですかー？年下の子もOKて感じ〜？」

「あ・・・」

長谷川さんは完全に俯いてしまった。

「フンッ！・・・君も、そんな女やめた方がいいよ。良い男みつけたら、すぐ色目使うし」

女子生徒は、それだけ一方的に言って去って行った。
過去に何かあったのだろうか。

「・・・」

長谷川さんとの間にきまづい沈黙が落ちる。

「気にすることないよ。俺から話しかけたんだし、それに俺と長谷川さんは『友達』じゃん？」

「・・・あ」

俯いていた顔が上がる。

「そうなんだ・・・ありがとう」

長谷川さんはそう言って弱弱しく微笑んだ。

「そんな悲しい顔してほしくないな。あんまりこういうの初対面で聞くのもどうかと思うけどさ、なんかあったの？」

初対面でもその人の心に土足で思いっきり踏みあがる。
これぞ、まさに

（勇気だああ！！）

（※ただの無神経です）

「ふふ。なんでもないの。ただ・・・そう、ただ私が馴染めてないだけ」

長谷川さんは俯いてしまった。

「ふーん。でもさ、まだ始まったばかりだよ？」

「そう、なんだけどね」

「？」

「皆、寮住まいの子が多いからかな？寮の先輩から私のこと色々聞いてるみたいで・・・」

どうやら、今のクラスにも全然馴染めてないようだ。
そして今後もその自信がない、と。

「まだ5月だったのに諦めモード入るの早すぎだね。ま、でも、も

う問題は解決したね！」

そう言って長谷川さんにサムズアップをする俺。

「え？」

「まずは俺で一人目、でしょ？」

ニヤリと笑いかける。

「・・・そうだね」

俯いてた顔が少し上がる。

ふふ、とまた微笑みながら長谷川さんは言った。

「やっぱり彩君はおもしろい人だね。隣のクラスでもよく噂になってるよ」

そう言ってニコリと微笑む。

「おお、それは『友達作り』がしやすくなる展開だ」

ニヤリと笑って返す。

「ふふ。じゃあ、またね」

長谷川さんは、俺との会話に満足したのか去っていった。

「まったね」

今去って行った長谷川さんの顔。
これは、もう

（フラグ立ったあああ！！！！）

そう叫ばずにはいられない。

（※まだです）

9話 年上(2) (後書き)

誤字、脱字がありましたら感想をお願いします。

10話 完璧

月光館学園に入学して2ヶ月。
季節はだんだんと夏へと向かう。

今は6月。

「てか、この学校って体育祭とかないのかよ」

普通の学校は、『秋（9・10月）、次いで春（5・6月上旬）、
北海道は天候的なこともあり5、6月が圧倒的に多い』By Wi
ki

のはずなんだが。この学校にそういったものは見られない。

2時間目の終わりの授業休憩中にボヤク。

体勢はさっきの授業とあまり変わらない、突っ伏しかけの状態。
所謂、伸びている状態である。

ちなみに前世の高校ですくなくとも体育祭はあったし、こっちの
中学校でもあった。

「体育祭?・・・ああ、確かにないな・・・」

横の伊織がそれに答える。

ちなみに帽子は授業中もつけている。

「でも、言われてみればなんでだろうな」

伊織は、帽子を少しイジりながら首を傾げる。

伊織はそのことに今まで疑問を持たなかったのだろうか。

「ここの母体は桐条グループって話だぜ？ どうせそこのお偉いさんがいない、とか言ったんじゃないの？」

前の授業では完全に寝ていた友近が起きたのか、後ろから声をかけてきた。

それに合わせるように、机に突っ伏しかけの上半身を起こし、壁にもたれるようにする。

しかし、友近の寝起き(?)の顔もまたモブ顔である。

「ふーん。桐条って言えば、あの2年の完全無欠の先輩か」

「そうそう。なんかさあの人今の生徒会長に既に、来年頼むわ、的なこと言われてるらしいぜ」

どっからそんな情報が入ってくるんだか。

まだ2ヶ月だが、それなりに友達はいるはずだ。

しかし、そんなことを聞いたことがない。

やっぱり悪友、と呼べるべきものを作るべきか。

「お、それは俺も聞いたことあるな。まあ親が、って理由なしにあの人なら敵なしだろ」

伊織も友近に同意するように言う。

「へえ、あんまり興味なかったけど、結構すごい人なんだな」

（1年の間は接触するつもりないから、興味なかったんだけど、やっぱり2年から既に完璧人間だったのか）

「ええ！？お前！マジで！？あの桐条先輩に興味ないって・・・お前、もう男じゃねえよ」

「おい、髭。てめ、それどういう意味だ」

「んなもん、あの抜群のスタイルに大人の雰囲気！もうこれだけで十二分に全校生の男の目を奪ってるってのに」

「そうだぜ、彩。あの人に興味が無い！ホモ、の方程式が成り立つんだぜ？」

「成り立たねえよ。まあさ、完璧過ぎるとアレじゃん？なんてか、こう関わりづらくね？」

これは多分皆が思っていることだと思う。
やはり完璧すぎる、というのはどうしても自分と比べてしまった時に、こちらが不快な思いをしてしまう。

「そうだな。もしあの人に彼氏なんかいたら、そいつは多分コンプレックスだらけになりそうだな」

（そう考えると、原作の男主人公はよくまあ、あんな人に・・・）

「ま、ここにも完璧人間はいるけどな」

友近がこっちをジーと見つめながら言う。

「確かに、こんなところにもいたわ。何？同族嫌悪？」

伊織までもがこちらを見てくる。

「おいおい。なんで俺がそうなるんだよ」

「その上、話しかけやすい、友達が多い、なんてなれば、もうこいつの方が完璧なんじゃね？」

友近が呆れたような、それでいて諦めたような顔で言う。

「しかし、それと友達の俺達ってどうなんよ」

「そうだよ、勉強は天と地ほどの差があって」

段々と二人の間の空気が重くなっていく。

「フェイスの方も俄然負けてて」

「運動神経もなんかいいらしいし」

さらに空気が重くなる。

「友達の数も、もちろんまけてて」

「その上こいつは女友達がいて」

さらに空気が（ry

「なのになのに、若干フラグ建て気味で」

「チックショウ！なんだ！なんなんだ！？この差は！」

何故か爆発した。

「天は人に二物、いや三物ならぬ四物を与えるってかぁ！？」

そう言って二人は勝手に落ち込んだ後、机をバンバンを叩き、天を仰ぎ見るように叫んだ。

「ジュンペーうるさい」

いつからいたのか、岳羽さんが俺の席の前に立っていた。

「お、うるさくしてゴメンね」

一応謝っておく、原因の8割は俺にあるのだから。
ちなみに残りの2割はこいつらがただ勉強してないってのがある。

「気にしないで。どーせまた二人でバカなことしてたんでしょ」

「うるせいやい！彩と比べて、それで・・・自分の小ささに気付いたんだ俺」

「そう、俺達、井の中の蛙だったんだ」

ふたりは何故か、燃え尽きた男みたいな顔をしている。

「なんて、かっこつけて言ってみてもさ、ただ現実見ただけだろ」

するとウガー、と叫びながら二人は机に突っ伏し、机をまたバンバン叩いていた。

「彩君と比べるのがそもそも間違ってるでしょ」

「あれ？ 岳羽さんも俺のことそんなに評価してくれてんの？」

「評価もなにも、入学してたった2ヶ月でここまで完璧になんでもこなされちゃ、そうなるんじゃない？」

どこでさじ加減をミスったのか。

元々目立つつもりはなかつ

（た、わけねーだろう！ 目立つつもりでしたよ！ そりゃもう計画通り！）

内心ガッツポーズをとりながら叫ばずにはられない。

10話 完璧（後書き）

ペルソナに目覚めるのはもうすこし先です。

11話 部活(3)

「もうすぐ夏休みだなー」

放課後の部活が終わり、柔軟を行いながらそう呟く。

そろそろ暑くなってきた時期、部活がない日に部活に出て走るなんてことはしたくない。

となると、

(夏休みには・・・やっぱステ上げが一番なのか?)

ちなみに今現在のステータスは、

学力..5

かなりの秀才

魅力5

オーラが出ている

勇気6

漢

Lv1 流峰 彩

HP 10/10

SP 12/12

普通

NEXT EXP 10

なのだ。

もちろん1vは1のまんま。

それ以外はどうかやら高校に入ってから、知らぬ間に上がっていたらしい。

意図的ではないため、ひとつランクを上げるのにも年単位だ。

（しかし、そろそろ全部MAXにしておきたいな）

勇氣は既にMAX。

他も、別に今の時期にMAXにする必要はない。

原作の主人公とは違って、俺は1年から学校にいる。

だから、焦って早いうちにランクを上げて、その分学校での友達関係がおろそかになるような真似は避けたい。

それに、俺はゲームでいうクリアの時期なくても、人生は続く。

ステがなくてもたぶん、ゲームでいうコミュは俺なら、というより学校の『普通』の人間なら上げれる。

繰り返すようだが、無理して失敗したくはないのだ。

まあ、ちなみに気分は『ペルソナ3』2週目だ。

だから別に上げる必要はないのだが、隙間隙間で上げれたらな、と考えていた時、

「まあ、その楽しみしている夏休みは入った途端、部活合宿あるけどね」

突然後ろから声がかかった。

「えっ！？何それ？」

「はあ、彩君ってばまた聞いてなかったの？」

呆れちゃうね、とか言いつつなんだが嬉しげに言う西脇さん。

「夏休みの途中の8月の初めに、陸上の大会があるの、聞いてなかった？」

「・・・そういえばそんなこと言ってたような、なかったような」

(Oh Shit! すっかり宮本と同じ部活入っただけで安心してたぁ！)

顧問の竹ノ塚先生が、前にそれらしきことを言っていたのだが、ちょうどその時は、今後のどうやって魔眼に合ったトレーニングをしようかと、真剣に考え込んでいたところだったので、聞き逃してしまったのだ。

しかし、まさかその時にそんな重要な話をしていたとは。

「ま、私ら1年にはあんま関係なって話なんだけどね」

西脇は残念そうな声で言った。

「ふーん。なのに、俺ら合宿出なきゃダメなの？」

俺のその言葉に呆れたように西脇さんは言う。

「彩君さあ、本当に前の中学で部活入ってた？ こういうのは普通、全員強制参加だよ」

（おのれえ！弱小校めえ！）

自分の通っていた中学校に愚痴る。

前の中学では合宿すら存在していなかった。

余談だが、前世ではちゃんと合宿はあった。

しかし、もう16年も前の話。

覚えておこうと記憶していた『ペルソナ3』の内容とは、やはり記憶の持ちが違う。

「うへへ、前の学校ではそんななかったんだけどなあ」

頭を掻きながら言う。

「よっぽど弱かったか、よほどやる気がなかったか、まあどうでもいいけど」

そんなことより、と西脇さんは続ける。

「合宿は大会に出ない1年も強制参加だから。だから、7月は夏休みないのとかわんないよ」

「なにっ!？」

（そ、そんな俺の、俺の夏休みの完璧なプランがああ!?!）

（※まだ立てていません）

叫びつつorzのポーズへと、滑らかにフォームチェンジする俺。
最近、陸上の部活終わりは毎回このポーズになっている気がする。

「んあ？どうしたんだ彩。なんでこんな落ち込んでんの？」

そこへどうやら宮本が来たようだ。

「あ、ミヤ。なんかね、彩君合宿の存在忘れてたんだって」

「なっ！彩！お前！」

（やべえ、なんか熱血の予感）

「俺と一緒に合宿頑張ってアピールして、来年は確実に大会に出る
って約束したじゃねえか！」

「いやいやしてねえよ！」

「と、いうのはあくまで俺の頭の中だけなんだけどな」

「・・・頭の中まで熱血だな、お前」

てか宮本ってそんな冗談言うようなキャラだったのか。

（思ってたキャラと結構違うもんだな）

「そう褒めるな。なんならこのあと一緒に走るか！？」

何故そんなに元気そうに走りたがるのか、たぶん彩には一生理解

できないであろう。

「やめときなってミヤ。無理に走って体壊したら意味ないよ。ほらクールダウンする!」

「ちょ、おまつ!これから走ろうって時に!」

グイグイと宮本を地面に押さえつけ、上から体を伸ばすように押し掛かる宮脇さん。

「おうおう、見せ付けてくれちゃって」

なんてひがんでみる、俺。

だって、その体勢当たってるんじゃないの? 胸。

「はあ!? 違うから! 私とミヤはそんなじゃないから!」

「ばっ、てめ! こいつはただの幼馴染だっつもの!」

バツと宮本から離れる西脇さん。

「いいよ、いいよ照れなくて」

むしろジャンジャンやってよ、なんて朗らかに笑いながら言うってみる。

(決して嫉妬ではありません)

(※嫉妬です)

「違うってば！」

「うお、チャンス！」

西脇さんが俺に講義の声を上げながら、宮本から手を離れた隙に、宮本が走り出した。

「ちょ！ミヤ！こらあ！」

いやいや、ほんと、あなたは宮本君のお母様ですか？と言いたくなる世話の焼きっぷり。

部活に入ると二人が、本当に恋愛感情ないのかと不思議に思ってしまうくらい、一緒にいる。

（よくまあ原作の主人公はこの間に入っていけたもんだ・・・）

最近、原作の主人公へ、無駄に尊敬パラメーターが高まっている彩だった。

11話 部活(3) (後書き)

誤字、脱字がありましたら報告おねがいします。

12話 夏前

入学してはや3ヶ月。
気付けばもう夏休み。

「いよっしゃああ！夏休みだああ！」

終業式が終わり、鞆を取りに教室に入った途端伊織が騒ぎ出した。
もちろん騒いでいるのは伊織だけではないのだが。

「うるせえよ」

何故、俺の耳元で叫ぶので、迷惑で仕方がない。

「じゃああああ！！ラーメン食いに行こうぜええ！！」

「お前、ほんとそればっかだな。もっと野菜食え野菜」

友近も伊織と同じような感じで叫んでいた。

「とりあえず最近買った『デビルバスターズ・オンライン』をするか！」

伊織はどうやらネットゲームのカセットを買ったようだ。
原作では、男主人公にネットが復旧して貸していたはずだ。

「なあなあ、お前らも一緒にやらね？」

俺は、前世で携帯ゲーム機、PSP、DSをそれなりにやりこん

だ。

そのうえP S 2、P S 3、そしてクソ箱と呼ばれたX B O Xなど
浅く広くではあるがやり込んだ。

所謂ゲーマーだ。

そんな俺がネットゲームに手を出していない、なんてことはない
のだが。

「俺はパス。ネットゲームは人間を腐らせる」

これに尽きる。

ネットゲームにハマりこみ、どれだけ苦労したことか。

小遣いは全て課金へと消えた。

そもそも基本無料でアイテム課金と言うのは、ハマった人間にと
っては際限がない。

月5000円の小遣いと、参考書を買うと言って親からもらった
金は全てゲームへ。

学校の宿題をすべき時間や睡眠時間はゲームへ。
本来学校の授業を受けるべき時間は睡眠へ。

今思い出しても、あれは駄目だ。

あそこから俺は終わったんだ・・・

「・・・彩、お前過去になんかあったのか？」

伊織がo r zの形で落ち込んでいる俺に心配げに声をかける。

「いや、なんでもない。気にしないでくれ」

「そうは言っても・・・」

流石に俺があまりにも落ち込んでいたため、

「聞いちゃダメなことだったのか？」

伊織は首をかしげながら友近を見た。

「いやいや、俺はなんも知らないから」

「・・・まあ、いいか。友近はやらね？」

「・・・まあ、いいな。やらんわ」

親友がこんなにも落ち込んでいるというのに、なんとも薄情な奴らだ。

(※普段の行いのせいです)

「にしてもさ、数学さ宿題出しすぎじゃね？」

伊織が学校出て暫くしてから愚痴りだす。

「確かに！終わる気しねえよ」

宿題に文句を言うのは学生だから当たり前だ。

たとえば、その宿題があまりに簡単でもだ。

たぶんだが、今回の宿題は前世の時と比べると遥かに量が少ない。
1年だからと言って加減したのだろうか。

「終わらせる気がないの間違いだろ」

真面目にやれば、誰でも結構すぐに終わらせれるだろう。

「いやマジありえねえって！」

「彩は頭いいから問題ないけどさ、たぶん俺らレベルじゃあれ無理だし！」

「お前らが底辺過ぎるんだろ！」

他愛のない話をしながら寮へと向かう。

「まっ！そんな堅苦しい話は置いといて！」

突然伊織が元気な声を出す。

ついでに一人鼻息が荒い。

「やっぱ、夏と言えば海！水着！綺麗なお姉さん！」

「そう、だよ！勉強どうせもいいし！」

「そんなこと言って、夏休み中に見せてくれなんて言いに来るなよ？」

「・・・」

「・・・」

途端二人は固まる。

「おい」

「そんな時はそんな時だ！」

「そうそう。まっ、そんな時は任せたぜ！親友！」

そして何故か開き直る。

「お前・・・」

「んなことより海だよ！海！」

またもや伊織が騒ぎ出す。

「夏休みこそは、エミリーと仲良くなってみせる！」

友近も騒ぎ出す。

「お前、まだ諦めてなかったのか」

「当たり前だろ！こっからだよ！」

「そうだぜ、友近！夏休みから全てが始まるんだ！」

「じゃ、明日勉強会でも開始するか？」

つい先日発表された試験結果で、二人の成績は散々なものだった。

ちなみに俺はキッチリ3位をキープ。

「勉強会？んなもんイラネー！」

「人生に一回しかないんだぜ？高校1年の夏休みは！楽しまなくてどうする！」

「その理屈で行くと、お前は一生勉強しねえよ！」

「チクショウ！これが学年トップ3の余裕なのか！？」

突如友近が逆ギレしはじめる。

「俺なんて・・・学年ワースト3だし」

友近の横で地面に蹲る伊織。

「まあ、なんか友近もバカみたいな扱いになってるけど、お前平均だからな？平均ジャストだからもう、どんだけ悪ぶっても、所詮モブだから！てか、全科目平均とか、ありえないくらいモブだから！」

「クッソォ！言われると思ったよ！これでも頑張ったんだよ！なのになんで平均なんだよ！これがモブの宿命なのか！？」

地面を蹴る友近。
蹲っている伊織。
呆れている俺。

最近なんかカオスな状況が多い気がする。

「おおおお！！とにかく夏休みなんだ！」

「そうだ！夏休みなんだあ！！」

何故か叫びだす。
付いていけない。

はぁ、とため息を吐いて、俺は空を見上げる。

なんて黄昏ているようにいえるかもしれないが、

（いつになったらペルソナ目覚めるんだよおお！）

とか思ったりする。

それにしても、

（部活の特訓合宿とかいらねえ！俺の夏休みがあ！）

帰宅部のこいつらにはわからないが、そこまで好きではない陸上で、夏休みの一部を潰されるというのは中々に辛い。

（夏休みい！）

内心叫ばずにはいられない。

12話 夏前（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告お願いします。

そろそろ、ペルソナ。

13話 夏中

月光館学園に入学して、もう4ヶ月は過ぎた。

「ふぁ」

いつもの学校へ行くときよりも遅めの時間に起きる。
ベットから起き上がり携帯を開いて時間を確認する。

8月22日 9..30

なんたって今はまだ夏休み。

この時刻に起きてもなんの問題もない。

「んー」

グッと体を伸ばす。

ペキペキと肩や腰から音がする。

「ふう」

その音に満足しながらベットから降りる。

寮は長期休暇では朝食が一定時間までにリビングに下りると、寮母さんが作ってくれる。

服を着替えて、顔を洗い下へと向かう。
ちなみに今の部屋は2階にある。

「おはよー」

「おーう」

この時間に起きているのは俺と友達と数人だ。

元々この寮にはそれほど人数はいない。

かと言って原作の主人公達の寮ほど少くはないが。

どうやらこの寮は最近できたらしく、居るのはほとんどが1年生。たまに2年生を見かける、その程度だ。

3年生に関しては一人もいない。

学生にとってたかが朝食代と侮ることは出来ない。

だからと言って毎日朝食抜きというのもどうかと思う。

だからなのか、寮の大抵の人間は朝食を食べる時間に起きてくる。しかし、起きてこないのが一人。

「順平はまだ寝てんのか」

友近が呆れながらテーブルの上に置かれた朝食をとる。

この寮が小さいためなのかはわからないが、席の数がそれほど多くはない。

そのためほとんど皆、毎日決まった席で朝食をとっている。

「あいつのことだ、どーせ夜中までネットゲやってんじゃないの？」

そう言って、友近の前に座っている俺も朝食をとる。

「なん言ったつけ？・・・えーと、デビ、デビなんとか」

「デビバスターズ・オンラインだろ？」

「そうソレだ」

最近は毎日のようにそれについて語ってくるのだ伊織は。

「ま、どうでもいいけど。んなことよりさ、今日暇？」

「大抵暇だろ。毎日が日曜日みたいなもんだし」

「そうだなー。あーでもそろそろ宿題とかやんなきゃなんねえのか」

「お前まだやってないのかよ」

呆れ気味に言う。

前世ではありえなかったことだが、この世界で俺は優等生なのだ。
なんてたって、

（勇気が！勇気がある！）

というのは関係ないのだが、前世ですでにやったことであるし、
子供の頃に高校生用の勉強を既に行っていた。

「嘘！？おまつ！・・・もしかして終わってんの？」

友近が一瞬固まった後、声を潜めて聞いてくる。

この寮の人間は何故だか知らないが、あまり頭の良い生徒がいな
い。

言うなれば伊織のような人間ばかりが集まっているようなものだ。

そんな場所で既に自分は宿題が終わっている、などという発言を大声でしようものなら、その日のうちに同級生の寮生へと俺のノートは、俺の意図しないところで回っていくだろう。

「・・・もちろん。俺を誰だと思っている」

ふんぞり返りながら言う。

正直、前世の記憶とかズルすぎることにこの上ないのだが、できるのだから仕方がない。

そのうえ、学力5だ。5はデカイ。

なんの勉強をせずとも上位4分の1に入れてしまう。

これは1学期の最初の間テストで確認した。

前世の知識を使わずとも（使う、使わないなんてできるわけではないのだが）この成績。

期末テストでちょっと頑張ってみると、なんとなんと簡単に3位という成績が取れてしまった。

前世の俺は一生懸命やっても精精、平均を超えるかどうかというカスっぶり。

なんてすばらしいんだ、今の頭のスペック。

「彩・・・いや、彩様・・・見せてください！」

そう言って、声は小さいままで頭を下げる友近。

「おいおい、俺達は親友だろ？」

「・・・さ、彩・・・グス・・・お前ってやつは」

感動したのか、友近はわずかに涙をにじませている。

「お前がそういうことは、とうの昔にわかっていたさ」

「ありがとう・・・さっそく今日の昼にでもみせて」

「だが断る」

「・・・え」

友近が文字通り固まる。

その間にカチャカチャと食べ終えて空っぽになった食器を重ね、キッチンの方へと持っていく。

返却場に置いて、戻ってきてみると、友近がまだ固まっていた。

——ポーン

「冗談だ」

友近の肩に手を置く。

「・・・さ、彩いいいー!!」

(どうせ、伊織のやつも見せてくれと言いに来るんだろうな)

目の前で俺の服を掴んでブンブン揺さぶっている友近を見ながら思った。

案の定だろうか、伊織にも宿題を見せることになった。

朝食後、友近と、昼と朝が兼用になる伊織とでラーメンを昼飯に食いにいった。

そのときに、伊織にも頼まれた。

正直、まだまだ夏休みが終わるまでは余裕がある。

ギリギリになるまで普通は焦ったりしないのだが、この二人はちゃんと自分のことが分かってるらしい。

「期限が迫ったからといって焦るなんて漢じゃない！ましてや期限なんて他人に決められたものに従う気もない！」

つとさつき伊織が自慢げに言っていた。

要するに、

（どーせ、夏休み最終日になってもやらない、てことか？）

なんて、内心で伊織のセリフを思い出して呆れつつ、目の前で必死の形相で俺の宿題を写している二人を見る。

「つたく、なんで現代文に宿題が出てんだよ・・・」

「・・・あークソっ！数学とか、もやは暗号だぜ！」

二人ともこの後の夜にゲーセンに行く気らしく、この昼の4、5時間で終わらせるつもりらしい。

「おい、髭。その問題はお前じゃ解けないから空白にしとけ」

「うお！？マジか。助かるぜ！」

時々、伊織の頭じゃ、どんなに頑張っても分からないであろう問題に差し掛かったときには、そう言って空白にさせる。

それにしても、この調子じゃ、今日中に終わるかどうかなんて怪しいラインだ。

そんな苦勞している二人を見ると、

（頭がイイってさいこおお！！）

いや、ほんと内心叫ばずには居られない。

13話 夏中（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告お願いします。

14話 影初

結局その日のうちに伊織たちが宿題を写し終えることはなさそうだった。

伊織たちの勉強の写し具合を見ながらそう判断する。

「駄目だぁ・・・終わんねえ！彩なんか買ってきてえ！」

伊織が机に突っ伏しながら言う。

そろそろ体力の限界のようだ。

（ちなみに、それ俺の机だから、顔の油あんまつけないで欲しいんだが）

時刻を表すデジタル時計は11..45分を示している。

「さーいー、俺もお！プリンが食いたい！」

友近も伊織に便乗してきた。

「はぁ。お前、もうすぐ0時だぜ？いくら今日は寮母さんが戻ってこないからってさ・・・」

今日は寮母さんも用事があるらしく、朝ご飯を作って実家の方へと帰ってしまったのだ。

明日の昼頃帰ってくるらしく、明日は自分達で朝ご飯を調達しなければならぬ。

「頼む！」

「頼むよ！」

二人共、手を合わせて俺に拝むように頼み込んでくる。

「・・・はあ、しゃないな。モブはプリンで、髭は？カミソリでいいのか？」

「おう、味はなんでもいいぜ。あつたらラーメン味で」

「ねえよ！」

「ちよい待って！この髭剃る気ないから！・・・えっとな、ポテチで」

「はいはい・・・ポテトの形をしたカミソリな」

「ちっげえよ！」

なんて笑いの取れない、ギャグのような会話をした後、俺は寮を出た。

コンビニは寮からそれほど離れていない。
歩いてほしい10分かない程度だ。

「はあ、もう0時じゃないか。なんでこんな時間まであいつらに付き合ってたんだか」

実際は、自分だけズルをしてるといふ罪悪感から逃れるためかもしれない。

まあ、友達だから、という理由が大半を占めているのだろうけど。

「お、あった」

コンビニを見つける。

流石コンビニというべきか、日付が変わりそうというのに電気がついている。

中にも人がチラホラ見受けられる。

流石に学生は俺くらいだろうけど。

不良に会いませんように、なんて考えながら自動ドアをくぐる。

「ありがとうございましたー」

店員に見送られてコンビニに出る。

伊織用のポテチ、念のため3袋ほど買って、友近用にラーメン味はあるわけないので普通のプリンを買った。

コンビニから出て数歩歩いた時だろうか、突如世界が変わる。
なにかに塗り替えられるように。

黒に染まっていた空は緑へと、銀色に輝いていた月は黄色へと変わる。

町の中の電気が消える。

さっきまで明るく、話し声がわずかに聞こえていたコンビニもシンと静まり返り、音が消える。

前の方に歩いていったサラリーマンのような男性はいなくなり、いつの間にかそこは棺桶のようなものが立っている。

——ぱちゅっ

足元から水溜りを踏んだような音がする。
静まり返った町に、その音は大きく響いたように聞こえた。

「ん・・・血!？」

ふと下を見て驚愕し、そのあと直ぐにこの状況を理解する。

(まさか! 影時間!?)

どうせなら寮にいるときに来てほしかった。

こんな街中では安全もクソもない。

かと言って寮内が安全というわけではないのだが、やはりこういった状況になるとビビってしまうものだ。

そのときの混乱が寮内の自分の部屋ならある程度は緩和されるかと、0時以降は出歩いたことがなかった。

(こんな時にっ!・・・嬉しいのか嬉しくないのかわかんねえな)

影時間に存在していられるということは、俺にも適正があることが証明されたため、嬉しくなくはないのだが。
そんなときだった。

——グチヨリグチヨリ

何か得たいの知れないものが後ろから迫っている音がする。

振り返ると、そこには棺おけのオブジェクトに並んだ町の風景に溶け込むように黒い、黒いスライムのようなモノがいた。

スライムでないのは、その一部に顔らしきお面が存在しているということ。

（シャドウ！）

何か、戦いに使えるものはないかとポケットを探る。

いきなりのシャドウの登場に焦る。

（何か！何かないのか！）

本当なら、真田先輩や桐条先輩のいる安全な場所でこのような状況になりたかったのだが、なってしまったものは仕方ない。

今は、そんなことを言ったらこっちが『影人間』になってしまう。

（くそっ！ポケットには財布、手にはコンビニ袋で、その中にはポテチとプリンとか！なんか刃物を！）

『直視の魔眼』があるため、指でやろうと思えば、多分、多分戦えるのだろうけど。

もし、シャドウに線が見えなかった場合を考えると刃物が最も好ましい。

（くっそ・・・これでもし線が見えなかった、最悪じゃねーか！）

焦る。焦る。

勇気MAXの『漢』はどこえやら。

足が震える。

冷や汗が止まらない。何故立っていられるかが不思議だ。

しかし、シャドウはこっちの気もしらずに近づいてくる。

そんな時、

「いやああ！来ないで！！」

聞きなれない女の声が聞こえた。

（誰だ！？）

バツとそちらへ顔を向けると、同じ学校の制服を着た女が、向かいの道路にいるのを見つけた。

学校で見たことはないため、多分先輩だろう。

この時間にいるということあまり素行が良くないのだろうが、その先輩らしき女の顔は前髪が長く、正直どちらかというとイジめられてるような顔にしか見えない。

「来ないでええ！！」

女はヒステリック気味の声を上げる。

腰が抜けたのだろうか、尻餅をついた状態で、女はズリズリと座り込んだ体制のまま後ろへと下がる。

その女の目の前には、俺の前にいるスライムのようなシャドウと同じようなシャドウがいる。

「っ！」

流石に見過ごせない。

しかし、今の自分に戦うことができるのだろうか。

（どうしたら・・・っ！）

ふと探っていたポケットの中にと尖ったものを見つけた。
どうやら携帯のキーホルダーのようだ。

そのキーホルダーを携帯から引きちぎり、ポケットから出す。
今はどんなものでも武器になるのなら歓迎だ。

（頼りねえな！これ！）

出したキーホルダーは三角の形をした、数学教師がもっていそうな三角定規の縮小版だった。

別に自分の趣味というわけではないのだが、毎回毎回数学の教師の間違いを意地悪く指摘していたら、何故か気に入られてしまったらしく、こんなものをもらった。

せっかくももらったものなので、携帯につけていたわけだ。

それは、一辺が3 cm、7 cm、7 cmの二等辺三角形のものであった。

キーホルダーにしては大きく、ステンレスかそこの金属で出来ているため、それなりにつつついたりすれば痛いだろうが。
シャドウのような化物と戦うにはあまりにも心もとない。

こんなときこそまさに、

（・・・勇気だ！勇気！勇気カモン！）

内心そう叫ばずにはいられなかった。

14話 影初（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告お願いします。

15話 戦闘

「こっち！」

とりあえず、今は逃げるしかない。

このままでは二人とも精神が食われてしまう。

「え？」

シャドウに襲われるのに恐れ、とうとう蹲るように丸くなってしまった女の手をひっぱってそのまま走り出す。

女は突然手をひっぱられ、事態についていけないのか疑問の声を上げる。

（勇気関係ないじゃないか！めっちゃ怖えよ！）

無理やり立たせてそのままびっばる。

正直怖すぎる。

女の方はまだ足に力が入らないようで、今にも倒れそうだが、その勢いを利用して無理やり走る。

「あれなんなの！？わけわかんないよ！」

女は混乱した声を上げる。

「そんな俺が知るつかての！」

恐怖から少しでも気を紛らわそうと、いつもより大きめの声で言う。

（本当は知ってるんだけどね）

こんなところで説明しても、女はたぶん混乱してわからないだろうし、今はそれどころではない。

（とにかく、影時間が終わるまで逃げるっきゃない！）

走って。走って。

そのうち、手をひっぱられることで、だんだんと女も自力で走り始めた。

もし、もしも俺が主人公だったら、ここでペルソナにでも目覚めるイベントがあるのかもしれない。

でも今手元に召還機はない。

それに、桐条先輩が過去に召還機なしでペルソナを召還した時ほど、俺に強い覚悟はない。

だから今は逃げるしかない。

そうやって走って逃げていても、追ってくるシャドウとのキヨリは縮まらない。

後ろを時々振り返りながら思う。

（なんだって、あのスライム体系でこんなに足速いんだよ！）

そう愚痴らずにはいられない。

まさしく緑の世界。

地面にある赤い血の水溜りを踏むたびに、パシャ、パシャと水しぶきならぬ血しぶきがあがる。

（あーこりゃ、帰ったらこのズボンは洗濯だな・・・てか洗濯して血ってとれるのか？）

跳ねた血がズボンの裾につくのを見て思う。

今の俺の格好は部屋着で、かなりラフな格好をしている。

しかも割りとお気に入りで、血がついてとれないとなるのはちょっとショックだった。

街中の棺桶のようなオブジェクトを使いながら、それらがシャドウの道を邪魔してくれると信じてギザギザに走る。

そうやって暫く走っていた時だった。

「前っ！」

手を引っ張っていた女から声が上がる。

後ろを気にしながら走っていたため、前方にはあまり気をつけていなかった。

「マジかよ！」

女の声で前に顔を向けると、そこには俺達を挟み撃ちしようとしてきたのか、シャドウがもう一体現れた。

「っ！」

すぐに、よこの脇道へ入る。

そのまましばらくその道を走っていると、

「嘘！行き止まり！？」

先は行き止まりだったようだ。

（おいおい、マジかよ。マジなんですか！？脇道は死亡フラグなんですか！？）

行き止まりの壁を見て、女はついにへたり込んでしまった。

「もう・・・いやあ」

ボロボロと涙をこぼしてしまう。

しかし、シャドウは獲物を追い詰めたも同然。

俺達へと向かってくる。

（早くも死亡！？ありえねえ！こんなところで死ぬとか！）

⇒戦う

女を囚にして逃げる

土下座する

諦める

(・・・おい、なんだこの選択肢。2は鬼畜、3とかシャドウに効果あんのかよ！)

⇒戦う

「やるっきゃない、ってか？」

ポケットから例の三角形のキーホルダーを取り出す。

「無理よ！もう無理よ！」

女は俺の武器(?)を見てさらに悲痛そうな声をあげる。
それはそうだろう。

まさか三角定規で戦おうとするなんて無謀すぎる。
だけど、俺の武器はこれではなく目だ。

『脅威の幻視』くらいは役に立つだろうと考え、目を凝らす。

すると、うつすらとシャドウの体に線が見える。

(『直死の魔眼』も使える！・・・いけるかもしれないな)

そのことにわずかに希望を見出す。

「ふう・・・」

息を静かに吐き出す。
戦う覚悟を決める。

途端、シャドウが襲いかかってきた。

『脅威の幻視』で光が見えた右半身を左へずらす。

次の瞬間そこへ、シャドウの手が襲いかかっていた。

避けたことで安心したのもつかの間、自分の今立っている位置に
より濃く光が見える。

バツとバックステップをとる。

次の瞬間にはそこへ2体シャドウが手をたたきつけていた。

その瞬間わずかにシャドウに隙ができる。

そして運よくそのシャドウの横っ面に太い線が見える。

そこへ切り込もうと足に力を入れるが、

「くっ」

正直ビビって体がシャドウに近寄ろうとしない。

（怖ええ！！勇気とか、もはや勇気（笑）レベルなんですけど！）

叫ばすにはいられな

「っ！」

目の前で光が見えたので今度は右へと大きく跳ぶ。

なんとかしなければいけないのだが、どうにも体が思うように動かない。

恐怖と、影時間の中で全力疾走したことによる体力消耗だろう。

（倒さないと駄目か・・・なんとか『直視の魔眼』で線は見えてはいるんだけど）

後ろに女がいるということもあり、あまり無茶な行動をとって後ろに行かれるわけにはいかない。

そう『直視の魔眼』で線や点は見えているのだ。
見えるには見えるのだが、

（お前ら真っ黒すぎて！見えづらいんだよおお！）

こんな状況だからこそ、叫ばずにはいられない。。

15話 戦闘（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告お願いします。

16話 戦終

「・・・っ」

死と隣り合わせのこの感覚。
それがなんとも心地よ

（い、わけあるかあ！）

なんて一人ツツコミしながら攻撃を避ける。

右に光が見えれば左へ、左に光が見えれば右へと。

だんだんと避ける動作が小さく、より無駄がなくなってくる。
避けることに慣れてきたのか、それともアドレナリンが出てきて
集中力が高まったのか、それらを判断する余裕はない。

（勇気は！？ 勇気はどこいったあ！）

さっきからシャドウの方へ攻撃しようとは思いながらも、全くも
って体がそちらへは向かってくれない。

これはまさに、前世からの生粋のチキンっぷりが魂にまで定着で
もしてしまったかのようにだ。

（怖いっす！マジパネェっす！よく原作の奴らはこんなと戦えるな
！）

その時、より色濃く光が見える。

その光の範囲からギリギリの位置に小さな動作で避ける。

途端そこには体勢の崩れたシャドウが現れる。

（チャンス！もうやるっきゃない！）

勇気もクソもへったくれない。

思いつきり、2体のうち、自分に近い横っ腹に太い線の見えるシヤドウへと踏み込む。

「ふっ！」

軽く息を吐いてその線をなぞるように切り裂く。
まるで、戦いなれた者のような息遣いだが、

（うわああああ！あったれえ！！）

内心はそれどころではないようだ。

——ズシャッ！

血の代わりに黒いシャドウの一部が飛び散る。
それが後ろにいる女の目の前に落ちる。

「ひいい！」

女はそれを見て悲鳴を上げる。

そして、切り裂かれた、というよりは三角定規で表面をなぞられ

ただけのシャドウは地面に溶け込むようにして消えた。

（おおお！さっすが魔眼！）

「後一体かつ！」

内心ではテラ喜んでいるのだが、そんな風を見せることなく次のシャドウへと向く。

自分の頭らへんに光が見える。

上半身を反らすように避ける。

そこへ一拍遅れてシャドウの手が通りすぎる。

（大分慣れてきたな）

そして、シャドウが両手を振り上げる。

自分の体の中央に縦一直線の形で光が見える。

この光の場所具合からして、これは一瞬溜めた後に両手をますぐ振り下ろす動作がわかる。

（これまたチャンス！）

シャドウが溜めのために両手を高く上げているうちに、思いっきり踏み込みキヨリを詰める。

一見自殺行為に見えるかもしれないが、シャドウが手を振り下ろすまでにかかる時間はさっきまでの戦闘でなんとなくは掴んでいた。

そして、シャドウが振り下ろす前に、横一線。

これらの種類のシャドウはどれも同じなのかわからないが、少なくともこの2体は、大体同じところに太い横線が見える。

だから、その線をなぞるように切る。

「ふっ！」

（おおおお！）

内心は直線から三角定規がズレないか、それが心配で仕方がない。

ちなみにさっき倒したシャドウも共に、頭にあたる仮面に大きな点が見えるのだが、そこは怖くて攻撃する気にならない。

さっきと同じように線をなぞられたシャドウは溶けるように消える。

「はぁ、はぁ・・・」

息が上がる。

影時間で行動するのは初めてにも関わらず、あれほど激しい運動をしたせいか体力の消耗が激しい。

そのうえ、魔眼を2つとも戦闘で使ったため精神的にもくるもの

があった。

「た、助かったの？」

後ろからそんな声が聞こえた。

「たぶ・・・ね・・・はあ、はあ」

息がしづらい。

「だ、大丈夫ですか？」

「だいじょうぶに・・・はあ、はあ・・・見える？」

（やっべえ！足が今になって震えてきたあ！）

シャドウに切りかかり（？）にいった時から止まっていた足の震えが、今になって戻ってきていた。

「ご、ごめんなさい・・・私のせいで・・・」

「きにすんなっ・・・て・・・はあ、はあ」

ドサツと女の横の地面に腰掛ける。

俺が座った瞬間に、ビクツと横で震えたが、そこは気にしないこととした。

「にしてもさ・・・なんだったんだろうな」

頭上の月を見上げながら言う。

「わ、わかんないです・・・それに、こっから戻れるかも」

女は膝を抱えだした。

「きっと、すぐに元に戻るさ」

（頼むから！頼むからもう戻って！もう戦闘とか無理！）

内心は土下座ものだったが、表面上は女を安心させるように言う。

「・・・でも、すごいんですね」

「何が？」

「さっきの黒いの倒しちゃったし」

「ああ・・・あれか、なんてか我武者羅だったし」

「しかも、武器はそんな頼りないオモチャだし」

「これね、これは数学の先生からもらった由緒正しき三角定規なんだよ。断じてオモチャではない、三角定規だ」

「さっきの化物に対しては同じようなものです」

俺はさっきまで握っていた三角定規を見つめる。

「ま、確かにな」

「・・・名前」

「ん？」

「名前教えてくれませんか？」

「あ、そうだね。俺は琉峰彩、月光館高校1年」

キーホルダーをポケットに仕舞いながら言う。

「え？1年生！？」

「お、おう」

女があまりにも大きな声を上げたので、少々驚きを隠せぬまま頷く。

「年下・・・だったんだ」

「あーそれより、君は？名前なんての？」

「あつ、ゴメン。えっと、私は暗越楓。月光館高校の2年生です」

「へー」

「え？それだけ？『先輩だったんだ』とかないの？」

「いや、わかってたし」

「嘘・・・じゃあ私だけ？私だけずっと先輩とか勘違いしてたの？」

「え？俺のこと先輩だと思ってたの？」

なんだか微妙に敬語を使っていたけどそのせいだったのか。

「う、うん・・・って、あ！」

「おお！？」

またしても突然の大声に驚かされる。

「君が・・・琉峰君か」

「ん？俺って有名なの？」

まだ先輩達の方へ『友達作り』に行った覚えはないのだが。

「割とね。頭良くて、イケメンで、クラスの中心人物だって2年でも有名だよ？」

「へー、そんな噂2年にまで行くんだ」

頭が良いのには自信があった。

なんてった前世の知識がある。

それにクラスの中心人物、というのも俺の行動は結果的にそうなるであろうことはわかった。

「実際に会ってみると、その噂も納得できるしね」

しかし、予想外だったのは俺の顔だ。
確かに魅力5とかなり高めの数字だ。
でもこれがどの程度のものかは全くわからなかった。

先輩達からすれば、俺はあくまで後輩。

自分達よりも年下のガキだ。

そんな者がいくら魅力が高かろうと、あくまで年下の子供扱いか
と置いていたのだが。

「ま、そういう先輩も結構美人ですけどね」

ここで変に自慢したり、謙遜するのもいいと思わないので、とり
あえず無難に返してみる。

「え？そ、そうかな？」

「その長い前髪が邪魔で顔あんまり見えないけど、かなり美人じゃ
ない？」

「・・・／／／／」 ポツ

先輩は真っ赤になって俯いてしまった。

風邪でもひいたの

（ってミスったあああ！！こ、こんなところでフラグを立てるはずで
はなかったのに！！）

内心は焦りまくりだ。

こんなところでフラグを建ててしまうと後々、他の女の子と話しづ
らくなる。

それに、

（この先輩！なんでこんな簡単に！おかしい！おかしすぎる！何故だ！俺の狙った子にはこんなイベント起きないのに！）

いや、もう、叫ばずにはいられない。

16話 戦終（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告お願いします。

17話 戦後

例の死闘の次の日、俺はいつもと同じように起床した。

結局あの後には、先輩と二人だけの秘密ということで誰にも話さない約束し、携帯のアドレスを交換した。

その時、俺が『二人だけの秘密』と言った時の先輩の顔は今でも忘れられない。

あの長い前髪の下からニヤリと笑ったのを俺は見てしまった。

そして、先輩の笑顔とシャドウという、まさにダブルパンチを食らった上に、伊織と友近に怪しまれないようにコンビニもう一度行って同じ物を買って寮へ帰った。

しかしコンビニに二度入る。

そして同じ店員に、同じ物を渡し、同じ金額のおつりを貰うといった行為を、間隔を5分と開けずに行うのはかなり恥ずかしかった。出来れば二度としたくない。

寮に帰った時は、ズボンに付いた血らしきものがバレないように隠すのに苦労をした。

伊織達は、結局午前2時くらいまで俺の部屋にいた。

正直、シャドウの戦闘の後疲れてそれどころではなかったのだが、なんとか伊織達が帰るまで踏ん張った。

二人が部屋を出た瞬間、気絶するように俺は寝た。

(これからどうするかな・・・)

影時間に入れたということは、適正が俺にも見つかった、といことだ。

そして、もちろんあの先輩にも。

そして、適正が見つかったということは、これから俺は、毎日影時間に入ることになる。

当初予定していたのは、適正が見つかった後は、影時間にとにかく例の原作の寮まで逃げて、そこで偶然真田先輩か桐条先輩と鉢合わせする、というものだった。

その寮へ直接助けを求めるのが出来ないので、偶然を装うしかないのだが真田先輩はかなり好戦的だったはず。

だから、かなり頻繁に影時間にシャドウを倒しに行っているはずなので、容易に出会えると思っていた。

いや、今もそう思っているのだが。

(・・・あの二人に会うという事は、原作介入か)

そう、二人に会うという事は原作介入を意味する。

ここで問題にあがるのが、あの先輩と俺、つまり二人のイレギュラーがいてもいいのか、ということだ。

二人がいるとなると、原作の序盤の3人PTというところから変わるし、その上戦闘経験のある人間が先にいれば原作の主人公ではなく、俺やあの先輩がリーダーになる確率が高い。

もしそうなってしまうと、原作にあった伊織と主人公とのいがみ合い(まあ実際は伊織が勝手に嫉妬しただけなのだが)が起こらない。

つまるところ、伊織が人間的に成長しない可能性がある。

それは伊織の死亡フラグへと繋がるのではないかと思うのだ。

（と、まあ色々考えているのだが）

これらは全て言い訳だ。

正直に言おう。

（原作介入・・・怖くてできません！）

というのが俺の本音。

最もシャドウ戦で俺にとって重要だった『勇氣』は何故か全く役に立たない。

つまるところめっちゃめっちゃ怖いのだ。

そして、『勇氣』のない俺＝前世の俺。

つまりは『キング・オブ・チキン』なのだ。

シャドウと戦うなんて無理。

命がけの戦闘とか無理。

銃を頭に向けて撃つとか無理。

結論、

（原作介入は諦めるか）

自分の中でそう結論付けて、俺は部屋を出て、寮の一階へと降りる。

時刻は昼の1時。

完全な寝坊だ。

「あれ？彩が寝坊ってめずらしいな」

一階に下りると、同じ寮住まいの同級生にそう声をかけられる。友近以下のモブキャラ、所謂、友人Aだ。

「昨日、伊織達が俺の部屋に遅くまでいたんでね」

「あー、なるほどね。彩も何か知らんが苦勞してるな」

ポン、と俺の背中を叩いて友人Aは、自分の部屋へと戻るのか二階へ上がっていった。

（あーくそ。これが所謂『疲勞』か？めっちゃめっちゃ体がダリいわ）

ペルソナを召還したわけではないが、やはり戦闘というものは疲れらしい。

主人公達も初日の次の日には疲勞状態になっていたはずだ。

（しかし、原作介入しないとすると、ペルソナはどうするかな・・・

問題は山積みだった。

原作介入しないⅡ召還機を貰えない。

つまりはペルソナが出せない。

いや、出せないわけではないのだろうが、自力で出すにはかなり面倒くさそうだ。

『PERSONA — trinity soul —』での主人公達は踏ん張って出してたし、『ペルソナ3ポータブル』でもストレガは普通に出していた。

しかし、これを先輩に説明するには、俺が転生者であることまで話さなければいけない。

できれば俺が転生者であることは自分の墓場まで持って行きたい。

しかしの先輩はペルソナがないと戦力にならない。

自分の身を守ることすら出来ないのだ。

「はあ」

思わず口からため息が出る。

原作介入すれば危険が付きまとう。

しかししなければ、あの先輩を見殺しにすることになる。

自分はしたくない。

怖い、ただそれだけの理由だが、俺にとってはかなり重要なことだ。

でもしなければ・・・

「どうしたんだよ彩。ため息なんか付いちゃって」

一階のロビーにいた俺に、さっきとは違う同級生が話しかけてきた。

つまりは友人B。

「ん、伊織の馬鹿さ加減に、つい」

「なるほど。ま、ガンバレ」

またしても俺の背中をポン、と叩いて友人Bは去っていった。
伊織の馬鹿さは皆、重々承知しているのだろう。

ともかく、原作介入するにしてもしないにしても、今日の夜までに何か対策をしなければいけない。

（はぁぁ・・・学力5は何処へ消えた・・・）

内心ため息を付かずにはられない。

17話 戦後（後書き）

誤字、脱字、または矛盾点がありましたら報告お願いします。

18話 大会（前書き）

時間が少し巻き戻っています。

18話 大会

時は遡って夏休みに入ってすぐのこと。

「あー俺の夏休みがああ」

今日から部活の特訓の日だ。

「ほらほら、文句言っていないでウォーミングアップしてくる」

パシパシ、と結子に背中を叩かれる。

「あつい」

まだ特訓初日の日の開始20分、つまりは来て、着替えて、外に出た瞬間から俺はバテていた。

「日陰え」

そうボヤくほどに。

「もう、ほんとと体力ないんだね」

呆れながらも、どこか嬉しげに言う結子。

「なんでニヤついてんのさ」

「だって、彩君にも苦手なことあると思うとねー」

「俺は別に完璧人でもなんでもないんだけど」

（まあ、2週目ですから高校生活）

なんて内心で思っているけど口には出せないが。

「勉強が出来て、明るく人当たりもよくてそのうえイケメン、もうこれを完璧と言わないでなんていうのよ」

「完璧3歩手前人」

「・・・微妙」

「人間そんなもんなんだよ」

「何悟ったようなこと言ってるの」

「俺の好きな言葉にな・・・『何事も諦めが肝心』て言葉があるんだ」

「・・・ミヤの『根性論』とは真逆ね。というかただ楽しみたいだけでしょ」

「楽しんで何が悪い！」

「何も」

「・・・調子狂うんだけど」

「ハハハ、彩君もそんなことあるんだ」

「いつも髭やモブという時は常に狂いっぱなしなんだけどな」

「へえ」

そう言ってクスクスと笑う結子。

そんなに俺の欠点を見つけられて嬉しいのだろうか。

「あ、そんなことより早く走っておいでよ。早くしないと皆ウォーミングアップ終わしちゃうよ？」

「おっと、それはマズい」

結子に背中を最後に叩かれて、グラウンドを俺は走りだした。

今日は陸上の大会の日だ。

「うわ、かなり人多いな」

思わずそう呟いてしまうほど、人がいた。

「ま、そりゃそうでしょ。これでプロにスカウトされる選手とかいるみたいだし」

横にいる西脇さんがそう教えてくれる。

「ほほう。じゃあ、来年は頑張らなきゃってか？」

「うーん。でもスカウトされるのは本当にごく一部だし、どうせ3年だよ」

「あらまあ、3年か、まだ先だな。ま、来年でもミヤならスカウトされちゃいそうだけど？」

そう言ってチラリと宮本を見る。

「・・・」

「ん？どうしたんだ？」

「う・・・おおおおおお！」

突然宮本が叫び出した。

周りにいる他校の人もビックリしてるようだ。

「来年は俺が勝つ！！」

そんなことを堂々と言って見せる。

別に試合が終わったわけでも、ましてや負けたわけでもないのだ

が、宮本にとっては出れないというのは同じことなんだろう。

と言っても、ここは選手控え室に近い場所であるため、グラウンドの今の2、3年には聞こえていないだろう。

しかし、1年にはバッチリ聞こえている。

（おいおい、変に目立ってんじゃないよ！）

その1年の中に原作主人公の星コミュの他校のエースがいる可能性があるため、その状況であまり俺に注目を集めると俺が目をつけられる可能性がある。

（熱血は宮本だけでいい・・・）

内心ボヤかずにはいられない。

試合が終わった。

試合は、先輩達はほんの僅かの人が表彰台の一番低い所に上るだけに終わった。

「ああ、くそっ・・・」

宮本は先輩達が自分がずっと見てるだけだったためか、かなり悔しそうにしていた。

（どーせ来年もあるんだってのに）

彩には一生、部活を真面目にする人間の気持ちかわからないだろ

う。

「ミヤ・・・」

結子が宮本を見てどこか心配そうな顔をする。

「来年こそは出てやる」

決意したような顔で宮本は言う。

試合前にも言って、出れないことはわかっていたはずだが、やはり試合を前にすると悔しいようだ。

それにしてもかなりの熱血ぶりである。

（え？もしかしてもう甥っ子と約束した？）

実際、それを確かめる術を俺は持たないためわからない。
いきなり甥っ子と約束した？なんて聞けるはずもない。

「そうだな。来年こそは出たいな」

悔しくともなんともないが、握りこぶしを作って悔しげに言ってみる。

「彩・・・そうだな俺達の番だ」

「てか俺らが出たら先輩の出る幕ないんじゃない？」

若干おどけた風に言う。

「彩君・・・もうちょっと早くなってから言おうか？そういうことは」

場の空気が緩んだことに安心したのか、結子は俺の耳を引っ張っていつも通りのように振舞う。

「アデデ、耳ひっぱるなって」

耳を引っ張られながら思う。

（こんな暑い中、日の下に出たくねえ）

宮本達の前では口が裂けても言えないセリフである。

「ま、その大会までに怪我しないように頑張りますかね」

そして俺は宮本の方を見て言う。

「特にミヤ。お前一番怪我しそうだわ。なんかあったらすぐ言えよ？」

「俺が怪我するわけないだろ」

原作では怪我してるんだよ、なんていえないけど、これはキツク注意してもいい内容だろう。

「そう言ってる奴が一番危ないんだよ。怪我してもそれを隠すなんてことしそうだしな」

「ま、ここに怪我してなくてもしたと言いたいような人がいるけどね」

そう言って結子は俺を見て笑う。

「ハハッ、確かに。ま、心配すんなって俺は大丈夫だから」

「本当だな？ミヤは時期エース、てか主将なんだから体気をつけろよ？」

「大丈夫、そこらへんは私がちゃんと見てるから」

「おいおい、お前は俺の母ちゃんかよ」

結子が見ていてくれるなら問題ないだろうとは思う。

実際俺がもし宮本が怪我を隠すような場面にいくわしたら、宮本に嫌われてでもそれを顧問なり結子に伝えるだろう。

それが本当の友情ってやつだ。

（というより、後々『なんで気付いていて言わなかった！』なんて言われたくないしな）

本当に友情もヘツタクレもない男である。

18話 大会（後書き）

この時期の大会に3年が出てたのか、とかはわかりませんが、とりあえず出ていたという設定で。

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

19話 次日

前日に初めての影時間を体験した日の夕方。

どうしようかと迷った結果、とりあえずは原作介入をしないという方向行こうと決めた。

やはり、自分の命は惜しい。

原作の中では、バトル中にHPが0になると、戦闘不能状態になる。

しかし、それは決して死亡したわけではない。

主人公が死んだ時のみ、本当に死んだかのように、セーブポイントからやり直しになる。

でもそれはあくまでゲームだからだ。

俺が今いるのは現実。

ゲームのようにいくとは限らない、いやいくはずがない。

実際、ゲームではアイテムやスキルなどで戦闘不能状態から復活することが可能だ。

しかし、その戦闘不能状態というのは一体どういうことなのかよく考えてみると、

「普通に死亡状態だよな」

あくまで俺の考えでしかないが、あれは紛れもない『死』。

主に街中で起きる『影人間』は、シャドウに精神を食われた存在。ゲームの序盤の最初の満月の日にシャドウに食われる人間が、ゲームでは描写されている。

あれは、ゲーム内で戦闘不能状態になっているのではないかと俺は思う。

その状態で、アイテムやスキルを使うと精神が復活する。

つまり、戦闘不能状態とは『影人間状態』もしくはその一歩手前ではないかと思う。

その示すところは、アイテムや復活スキル、ましてやペルソナを持たない俺が戦闘不能になると、それは『死』に直結するのではないかと思う。

「うん。やめよう。まだ死にたくないし」

俺は一人自分の部屋で頷く。

「となると、シャドウとの戦闘は避けるべき・・・か」

『シャドウとの戦闘を避ける』。ゲームの中なら、モンスターのオブジェクトを避ければ済む話だ。

しかし、現実ではそうはいかない。

影時間は毎日くるのだ。

つまりはシャドウは毎日出てくる可能性がある。

原作で主人公達は、タルタロスに入る時と満月時以外はシャドウと戦闘になっていない。

ここがわからない。

「寮の中は安全なのか・・・？」

それともあの寮だけなのか。

もしくはあれはご都合主義なのか。

ともかく寮の中が安全なのであれば、そこにいるにこしたことはない。

「・・・それしかないか」

一度試してみるしかない。

俺はそう思うと、携帯を取り出し、昨日の先輩にメールを送る。

『8月△日 18..30

From..xxxxx. xxx-xxxx@xxx.ne.jp
sub..暗越先輩へ

昨日みたいなことがあったら不安
なので、今日は一緒にいませんか？

』

「これくらいが無難か？」

正直、他から見たら誤解されそうだが本人は気付いていないよう
だ。

「ふう」

メールを送信し、携帯を閉じてため息をつく。

ベツトに座り、そのまま後ろに倒れる。

——PiPiPiPiPi

突然携帯が鳴る。

「うお!？」

急いで携帯を開き、通話ボタンを押して耳に当てる。

「もしもし?」

『もしもし? 琉峰君?』

「ええ、そうですよ。先輩ですか？」

『うん。先輩なんて堅苦しいから楓でいいよ?』

「いえ、やっぱ先輩を呼び捨てになんてできませんよ」

名前で呼んでしまうと、戻れない関係になりそうで怖い。

『まあいいけど・・・今はね』

「え？なんか言いましたか？最後の方聞こえなかったんですけど」

『ううん。なんでもないの。そんなことよりメールの件なんだけど』

「そうですか・・・えっと、さっき送ったメールですよね？」

『うん』

「もし、昨日みたいなことに今日もなったりしたら、って考えたら先輩が心配で」

これで先輩が『影人間』になったら、俺のせいだな。

『私を心配してくれるの？』

「え？ええ。当たり前じゃないですか」

この人、戦えないしな。

『そっか・・・そっか・・・』

「先輩？」

『な、なんでもないよ？』

「なんで疑問系なんですか・・・それより、とりあえず昨日は12

時の直後らへんになってたので、今日も出来ればその時間帯は一緒にいたいんですけど、大丈夫ですか？」

『一緒にいたい！？・・・そっか、うん、いいよ』

「・・・なんか勘違いしてませんか？てか都合のいいとこだけ聞くのやめてもらえます？」

『まだ、あって1日も経ってないけど、私全然大丈夫だから』

「・・・もういいです。とりあえず、11時くらいに、会いたいんですけど・・・」

『大丈夫だよ。こっちの寮さ、裏口から普通に出入りできるし・・・前友達がね、彼氏連れ込んだの』

「へ、へえ・・・」

向こうの寮の安全が証明されるかどうか考えると、向こうに行くのが最善なのだが、なんだか行きたくない。

「ま、まあ、その時間に何処かで落ち合いたいんですけど」

『お、落ち合うだなんて・・・まるで駆け落ちみたい』

「違います」

『照れないでよ』

（照れてねえよ！妄想は入りすぎだろ！）

「と、とにかく！ 11時に先輩の寮の前行くんで、待っててもらえます？」

『わかった・・・あ』

「？」

『私、ゴムもってないけどだい z y』

——ブツッ

思わず電源ボタンを押してしまった俺は悪くない。

「なんか・・・あの先輩ヤンデレになりそうで怖い」

そうならないことを願わずにはいられない。

19話 次日（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

キャラ設定（前書き）

一度キャラ設定いれておきます。

キャラ設定

オリジナルキャラクター設定

名前…琉峰りゅうみね 彩さい♂

歳…原作の主人公と同じ

身長…169 cm

体重…58 kg

特徴…黒髪、黒目。

見た目は「ブラッディマンデイ」の九条音弥のちよい劣化。
明るくムードメーカー。

特徴となる色は主に暗い青。

○最近の疑問は、

「真田先輩ってあの頭染めてるのか？ 桐条先輩は父親が黒髪なのに何故赤髪なのか」

○最近の悩みは、

「俺ってなんかチャームポイントのないよね？ 伊織の髭とかさ」

過去…強制的に転生させられてしまったが、そのことをフツきり原作に関わると決める。

しかし、実際にシャドウに会い、勇気5にもかかわらずビビって、原作介入を諦める。

過去に両親を失くしている。

能力…実際にはありえないのだが、どうやら転生特典のようだ。（若干説明がネタバレ）

『直死の魔眼』

月姫の主人公と同じ目。

あらゆるものに線や点が見え、それをなぞるとそのものは消滅する。

ただし、発動によるデメリットも暴走もない。

はつきりとはないがOn OFFもできる。

しかし、月姫の主人公のように鍛えていないため、十分に発揮はできていあにもよう。

ちなみに、序盤に出てくる真っ黒いシャドウは、線が見づらいためビビリぎみ。

『脅威の幻視』

サイレンにでてきたカブトの目。

危険を察知してそれを光として認識できる。

そしてこれも発動によつての頭痛などのデメリットは一切ない。

しかしヨヨがいないため、これもまた十分には発揮できていない。

戦闘中はコロマルを遥かに上回るありえないくらいの回避率を見せる。

備考…実際は結構めんどくさがり。

わりと他人の好意には敏感。

学力は学年トップ。

魅力も学年でトップレベル。女子で言うのならゆかりレベル。それゆえに色々とモテる様子。本人は気付き、その人たちとは友達のキヨリを保つよう心がけている。

そしてなにより勇氣。これはかなりある。

物事になんお躊躇いもなく飛び込んでいく。そのことから周りから地味に頼られがち。

しかし、シャドウとの戦闘時はあまり意味を持たない数値の

ようだ。

名前…暗越くらこし 楓かえで♀

歳…桐条先輩と同じ

身長…159 cm

体重…49 kg

特徴…黒髪でロング、黒目。

見た目は「君に届け」の爽子。
ちよつと暗い。

目立ってイジめられてはいないが、若干パシリ的なポジ。

○最近の疑問は、
「なし」

○最近の悩みは、
「体重が50?に入りそう」

過去…影時間に制服でいたのは、寮の友達にパシリ的なことを、学校後からずつとさせられていたため。

両親は健在。

若干、友達関係が上手く言っていないが、そこまで暗い過去はない。

能力…何故がある。

『依存』

他人に依存したがる傾向がかなり強い。

『一目ぼれ』

惚れる。とにかく惚れる。

備考…ヤンデレ(?)

人の顔色を伺っている、つもりらしいが周りからは空気が

読めないと言われている。

友人A

モブ

友人B

モブ

キャラ設定（後書き）

原作開始くらいには、アバウトな主人公のコミュを書こうと思います。

リンクと人だけです。

誤字、脱字がありましたら報告お願いします。

20話（前書き）

なんだか、影時間周辺だけ無駄に長い。

20話

先輩の寮は、俺の寮から歩いて大体10分程度だ。

女子寮ということもあってか、男子寮よりも駅に近い位置にある。

俺のいたことは、少し外見が違うが、基本は一緒といった感じの建物だった。

ただ今の時刻はPM10..58。

約束した時間の2分前。

デートのような場合ではあってはならないことだが、今回は別に構わないだろう。

というより、早めになんて行きたくない。

寮の近くまで来ると、携帯のバイブがなった。

「裏手？」

先輩からのメールの内容によれば、どうも裏口は裏手にあるらしい。

・・・まあ、裏にあるから裏口なのだが。

とりあえず、メールからして、先輩は自分の部屋から外を見ていて俺を見つけたみたいだ。

あまり遅れないように裏の方へと回ることにした。

「こんばんわ」

裏口らしきドアのところに、中から顔を覗かせる先輩を見つけ、声を掛ける。

「あ、彩君。遅いよ」

「すみません。先輩の寮探すのに手間取っちゃって」

（わざとギリギリの時間を狙ったとは言えないな）

先輩は俺が遅れてきたことに若干不満そうな顔をしていたが、すぐに顔を笑顔にして俺を手招きする。

実際、不満そうな顔と言いつつも先輩は前髪が長いので、あまりよくはみえないのだが。

「中に入るんですか？」

流石に女子寮に入るのは気が引ける。

「外の方がいい？」

「ええ、まあ。一応俺も男なんで」

「そ、そっか・・・やっぱ好きなシチュエーションってのがあるんだよね」

「・・・もしかして、まだ誤解してます？」

「誤解？・・・あ、ホテルに行くの？」

先輩はホッとしたような顔をした後、赤い顔で悶え始めた。

「・・・もうなんでもいいです。とにかく、ここら辺で時間潰せる
ところないですか？」

「別に時間潰す必要なんてないんじゃない？」

先輩はキョトンとした顔で俺を見る。

（うおお・・・なんて面倒な奴だよ・・・）

「時間潰す場所ないですか？」

先輩の発言を無視してもう一度言う。

「うゝん。まあ、人それぞれやっぱ好きな時間とかあるのかな？」

先輩は少し思案顔でぶつぶつ呟き始めた。

「あ、そんなことより時間を潰すんだったね」

俺の質問にちゃんと答えてくれる気になったようだ。

「えっとね、あっちにあるファミレスなら大丈夫なんじゃないかな
？」

俺も先輩も、住んでる地域はほとんど、というか全く同じなため
ここらへんにある店は二人ともわかってる。

それなのに、俺が先輩に時間を潰す場所について聞いたのはわけがある。

俺の外出している時間帯は、放課後から夜の9時ごろまで。

どんなに遅くても10時以降に外にすることはほとんどない。

例外として、前日のような場合とかがあるが。

ともかく、そういうわけで俺はあまりこの時間帯に開いている店
や、この時間帯に入っても追い出されない店を知らないのだ。

「じゃあ、そこ行きましょうか」

俺はそう言うと、先輩を待たずに、先ほど先輩が指差した方へと
歩き出す。

「あっ」

先輩が俺を追いかけてくる。

あっちにあるファミレスは一つしかない。

方角さえ教えてもらえば、それがどの店なのか判断できる。

「もうそろそろ12時ですね」

現在の時刻は11…50。

ファミレスに入って、大体40分程度が経った。

先輩がひたすらしゃべり続けるという、なんとも男女立場が逆のパターンだった。

話ながら、先輩はコーヒーを、俺は紅茶とたまにケーキを注文した。

「あ、もうそんな時間なんだ」

さっきまでは俺と一緒にいることが嬉しいのか、楽しいそうにしていた先輩だったが、昨日のことを思い出したのだろう。途端に顔に恐怖の色が現れる。

「一旦、先輩のほうの寮まで戻りましょう」

「え？なんで？」

「ここだと、前みたいなのがあったときに色々邪魔ですし」

ファミレスの中には机と椅子が、びっしりとまではいかないが並べられている。

逃げるにしても、万が一戦うにしてもそれをするのに十分なスペースがここにはない。

「わかった」

先輩が頷いたのを見て、俺は立ち上がり会計を済ませにいく。

大した額ではないので、ここは俺が驕るというものだろう。

「あ、別に私出したのに」

先輩が少し残念そうに呟く。

「俺も男なんで、こういう時くらい見栄張らしてくださいよ」

そう言って俺と先輩はファミレスを出た。

そして、先輩の寮の前に着いた。

時刻は11…58。

俺は12時ジャストに影時間に入ることを知っているので、心構えが出来ていたのだが、先輩の方はいつ影時間に入るかわからないので俺の傍を離れようとはしなかった。

「ふう」

息を吐く。

先輩にはいざとなったら寮の中に逃げてもらおうことにしている。

まず、ここで確認しなければならないことがある。

俺の目的は、寮の中が安全なのか、ということ。

予想ではほぼ100%安全だと思う。

その予想をするにあたってもう一つ確かめなければならないことがある。

シャドウは目で（あの黒スライムに目が見えているのかは知らないが）見て、人を襲うのか、それとも影時間中にいる人間の気配的なものがわかっていのか。

それを確かめることが出来れば、おのずと寮が安全なのかがわかる。

もしシャドウが目で見えていたのだとしたら、寮の中でシャドウが現れたり、原作の真田先輩がつれて帰ってくるみたいなのをしなければ、寮や建物の中は安全ということになる。

しかし、シャドウが気配のようなものを感じるのであれば、そのときはもう俺では対処できない。

もしそうだとすれば、元々のプランである原作の寮駆け込み作戦を実行するつもりだ。

「・・・」

先輩は無言で俺の腕に縋りつく。

その顔には、前のようなどこか楽しそうな雰囲気はなりを潜め、恐怖だけが残っている。

（あーやべえ、こええ・・・てか、都合よくシャドウ現れるんかな？てか来るなら超雑魚にしてくれよな。というより足遅い奴）

なんて思いながら俺は携帯を見つめる。

そして、時刻は0…00。

世界が変わる。

空は緑色になり、町からは人の気配が完全に消え、ゴーストタウンのような雰囲気へと一変する。

20話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

21話 確認（前書き）

今思えば20話にサブタイトルがついてない・・・

21話 確認

二度目の影時間を俺達は迎えた。

「っ!!」

思わず息を飲む。

世界が緑になった瞬間に眩暈を覚え、人の気配がしなくなったと同時に吐き気がしだす。

昨日の恐怖が再び沸いてくる。

足が震えそうになる。

念のために買った、ポケットに入っている果物ナイフを握り締める。

横で先輩がより強く俺の腕にしがみつく。

自分がしっかりしなければいけない。

「・・・やっぱり今日もか」

先輩に影時間が毎日来るであろうと思わせるために眩く。実際にそうなのだがそれを直接言うわけにはいかない。

「先輩はここにいてください」

「え!？」

もしシャドウがいた場合、先輩は足手まといにしかならない。
実際に戦闘する気はない。

というより、戦闘する勇気なんて元々持ち合わせていない。
こんな非日常で頑張れるほど、俺は強くない。

（ていうか、これがスタンダートなんだよ）

自分にそう言い聞かせる。

原作の主人公は普通に戦っていた。
もちろん伊織もそうだったし、岳羽さんも最初は戸惑っていたが
すぐに戦えるようになった。

しかし、自分はどうだろうか。
たぶんよほどのことがない限り戦えないだろう。

俺にはそんな勇気も覚悟もない。

「大丈夫です。昨日みたいに戦う気はありません」

では何故、自分をここに置いて行こうとするのか、先輩の目はそ
う言っていた。

「確かめたいことがあるんです」

そうだ。

確かめなければいけない。
今後の安全のためにも。

これで最後。

寮から出なければ安全、ということさえ確認できればそれでいい。
これで最後。

自分に何度も言い聞かせる。

（これで最後。もう二度とシャドウには会わない。だから、今だけ、
今だけは・・・）

動いてくれ、俺の足。

そう念じながら、俺はゆっくりとしがみついている先輩を離す。

「あ・・・」

離された先輩が泣きそうな声を上げる。

「大丈夫です。大丈夫ですから」

そう言っても先輩は離された後に掴んだ、俺の服の裾を離さない。

「大丈夫です。何があっても先輩は守りますから」

先輩の目を見て言う。

すると、ゆっくりと先輩の手から力が抜けていく。
そして最後には俺の裾から手を離す。

「すぐ戻ってきます」

俺は先輩にそう言って、自分の足が恐怖で竦んでしまう前に歩き出す。

先輩の寮は、正面から見ると右側は建物に隣接しているが、左側には向こう側へと繋がる道がある。

上から見れば、カタカナのエの形に道路がなっている。

エの真ん中の縦線の右に先輩の寮がある、上下の横線は道路、といった感じだ。

俺はゆっくりと寮の表へと回る。

今回のことを確認するにはシャドウを見つける必要がある。

そのため、シャドウがいないなんてことにはなって欲しくない。

しかし、内心ではシャドウがいて欲しくないと願う自分がいる。

「ははっ。やべえわ、すっげえ俺今ビビってる」

先輩には聞こえていないだろうが、自分で言って笑えてくる。

『勇気』を手に入れたと思ったのに、実際はなんの役にも立ちやしない。

表の道にちよつとだけ顔を出す。

——ズルリ、ズルリ

「っ！っ！」

思わず顔を引っ込める。

心臓が早鐘を打つのが聞こえる。

しばらく気持ちを落ち着けて、もう一度顔を出す。
今度はさっきよりも慎重に。

——ズルリ、ズルリ

シャドウをしっかりと目で捉える。

運がいいのか悪いのか、こちらへと向かってくるシャドウを見つけた。

（タルタロスだけでなく、街にも普通にいるんだな・・・）

そう思いながら、しっかりとシャドウを目で追う。

果物ナイフと一緒に買った、スーパーボールをポケットから出す。

シャドウに見えない位置から、そのスーパーボール3個をシャドウの進行方向へと投げる。

スーパーボールはちょうど、シャドウから見て、俺のいる通路を通り過ぎて5m程度に落ち、跳ねる。

ビビっていたせいか、予想よりも力がいらず全くボールが飛ばなかったことに内心毒づきながらもスーパーボールが何度も跳ねるのを確認する。

すると、シャドウは俺のいる通路から6, 7mのところから、スーパーボールが何度も跳ね、そのせいで周りの物に当たる音を聞きつけ一瞬動きを止めた。

(音にも反応するのか・・・)

シャドウが、スーパーボールの位置を目掛けて動くのを一瞬確認して、すぐに先輩のところへ戻る。

「先輩、中に」

「・・・何したの？」

「ちょっとした実験ですよ」

後ろからわずかに見ていたのか、先輩は俺の行動を疑問に思ったようだ。

「実験って・・・」

「とにかく中に」

先輩を寮の中へと促す。

先輩は俺の行動を疑問に思ったままだったが、とりあえずは俺の言葉に従ってくれた。

先輩と、寮の裏手のドアの隙間から、通路を覗き見る。

「何を見るの？」

「静かに・・・後で言います」

ジッと通路の先、道路を見る。

しばらくして、

——ズルリ、ズルリ

シャドウが移動する音が聞こえた。

その途端、先輩がビクリと震える。

ここで先輩に混乱されて、音を立てられても困るので、先輩を安心させるために先輩の手を握る。

——ズルリ、ズルリ

シャドウが、俺達の視界に入る。

自分の恐怖を紛らわすために、そして先輩を少しでも安心させるために、より強く手を握る。

シャドウが、通路を通り過ぎるのを待つ。

（頼む、通り過ぎてくれ！）

10秒程度にも感じたし、10時間にも感じるような時間が流れた。

シャドウが俺達の視界から完全に消えるのを確認した。

つまり、この瞬間に、シャドウは最低でも5m以上先の範囲の人間を感知できなくて、それで目と、そしてあるかはわからないが耳

で標的を捉えるというのがわかった。

「ふう」

俺は少し息を吐くと、ドアを閉め、完全に寮の中にはいる。

「・・・説明してくれる」

先輩にはまだ説明していないため、わけのわからない顔をしている。

「あの化物がどうやって人を見つけるのか知りたかったんですよ」

先輩は首を傾げる。

「昨日は俺達二人ともがあの化物の目の前にいました。だから、あいつらが何を目印にして俺達を見つけたかわからなかった」

先輩は黙って聞いている。

「だから、さっきスーパーボールを化物の先に投げました。それで化物が反応するか見たかったんです」

「・・・それで？」

「結果は、あくまで予想ですが音と視界で目的を見つけている可能性が高いことがわかりました」

俺は続ける。

「俺が言いたいののは、この奇妙な空間では寮から出なければ問題ない、ということですよ」

先輩はいまだ俺達が影時間にいるせいか不安が拭えていないが、とりあえずは納得してくれたようだ。

実際はシャドウがどっから沸いてくるかわからない以上、これが確かなことだといえないのだが、とりえずは、

（あゝ、もうこんなことしたくねえ）

いくら安全のためとはいえ、こんなことをするのはこれが最後にしたいと願わずにはいられなかった。

21話 確認（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありました報告お願いします。

22話

二度目の影時間を体験した次の日。

俺は昨日よりは早く起きることができた。

といっても時刻は11…00。

早起きではないが、昨日よりはマシな時刻だ。

この時間に起きることすら俺にとっては苦痛だったのだが、流石にもうすぐ夏休みが終わるこの時期にあまり生活リズムを崩すわけにもいかない。

「ふぁ・・・」

大きく欠伸をし、眠たい目をこする。

昨日は結局先輩の震えが止まるまで一緒にいた。
だいたい朝の、2時くらいまでだった。

それを考えると昨日という表現はあまり適切ではないのかもしれないが、気分的には昨日だ。

疲れた体を引きずって寮に戻ってきたときには3時前になっていた。

寝た時間はだいたい8時間程度。

普段の生活を考えると十分な睡眠時間のはずなのだが、あまり体

力が回復した気がしないのは、やはり影時間のせいだろう。

二回目の影時間なのだが、まだ全然慣れていないようだ。

戦闘をしたわけでもないと言うのに、次の日まで疲れが残るとは。

（やっぱ原作の主人公は化物だな）

実際、影時間にいるというだけで何故か知らないが体力、というよりも精神的にかなり疲れる。

原作の主人公は初回こそ倒れたが、それ以降はすぐに慣れていた。倒れたと言っても、それは無茶してペルソナを出したためだろう。

俺なんてペルソナを出していない、もはや戦ってすらいらないというのに今日も『疲労』状態だ。

なんと情けない。

なんて思っていると、ふと空腹を感じる。

「あ・・・また飯食えないな・・・」

昨日も朝飯を抜いたことを思い出す。

昨日起きてきたのは昼だったので、昼と朝を兼用で食べたことになる。

しかし、今日は違う。

今日は朝飯が必要な時間帯なのだ。

「どっか食いに行くかな」

そう決めると、重い体に鞭打ってベットから起き上がり服を着替える。

20分程度かけて朝の支度を終え、俺は外へ出るために一階へと降りた。

「おっす」

ロビーを通り過ぎようとすると、ソファアーに座っていた伊織に話しかけられた。

「おはよー。髭、もうメシ食った？」

「・・・なんかお前の中で俺は完全に髭で定着したのを今確認したわ」

そう言って伊織は若干の落ち込みを見せる。

「メシって朝食？」

「そうそう」

「もう食ったに決まってるだろ。もしかして彩今起きたところか？」

「そーなんだよねー。どしよっかなー」

まさか伊織がちゃんと朝飯を食べているとは思わなかった。

「俺が朝飯ここで食えなかったときは、ほら、こっから歩いて10分程度のところにある定食屋あるじゃん？」

「んなもんあったっけ？」

「あるんだって。この前友近がその話してたじゃん」

してたような、していなかったような。

「まあとにかく、駅とは逆方面の方に10分程度歩いたら緑色の暖簾のかかったやつあるから、そこ行ってみ？結構おすすめ」

駅とは逆ということは、昨日行った女子寮とは間逆ということだ。

「ふーん。おいしかった？」

「まーそれなりだな。無難っちゃ無難でとこ」

「そっか、まあサンキュー。そこ行ってみるわ」

「おーよ。いってらー」

伊織にお礼を言って寮を出る。

外に出た瞬間、太陽の光が目に入り、そのまぶしさから逃げために手をかざす。

そして、しばらくして外の明るさになれて今日はいい天気だな、

なんて思いながら空を見上げる。

そんな時、

「あ、彩君」

ふと自分の名前が呼ばれたことに気が付いた。

「?・・・あれ?先輩?」

空から視線を落とすと目の前に先輩がいた。

「うん。偶然だね」

(そうだね・・・俺の寮の前で会うとか超偶然だわ)

「どうしたんですか?寮に何か用でも?」

「ううん。別に、ただ散歩してただけ」

嫌な予感がする。

何故か背筋が寒くなってきた。

「そうなんですか・・・じゃ、俺はこれで」

こんなにすぐ話を切り上げるのは知り合いとしてはどうかと思うのだが、この先輩にはこれくらいで良いと思うのだ。

「え・・・せっかく会ったんだし、暇だったらどっか行かない?」

先輩はこちらに近づいてきながらそう言う。

「暇というか、俺これから朝飯なんで」

流石に先輩はもう食べただろうと思い、俺はそう言う。

「あ、そうなんだ。私も一緒にいい？なんか私もお腹少しすいちゃって」

「え・・・あ、まあ構いませんけど」

流石にそう言われると断れない。

「あがりと」

先輩はニコリと笑うと俺の真横にぴったりとくっついてきた。

「食べに行くとこ決まってるの？」

「まあ、一応は」

「そっか、じゃ行こう」

そう言って先輩は俺を促す。

ふと思う。

偶然寮の前、しかも俺の寮の前で会うことはあるのだろうか。

女子寮は男子寮よりも遥かに駅に近い。

大抵食事や買い物をするときは駅前だったり、ポロニアンモール

だったりする。

男子寮の方向にくることはほとんどないはずだ。
しかも散歩ときた。

昨日影時間に入ったのに、外を好んで出かけようとするだろうか。
何か怪しさを感じる。

（・・・この人、もしかしてずっと寮の前で待ってたとか言わない
よな？）

先輩との付き合い方を本格的に考えていかなければならないと思
わずにはいられない。

22話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありました報告おねがいます。

23話 今後（前書き）

なんというか、早く原作行きたい。

なんでこんな昔から書いてるんだろうか・・・

23話 今後

あの日、二度目の影時間を体験してから1週間と少しが経った。

毎日の影時間は寮の中でした。

はじめは、布団に包まって息を殺すようにしていたりしました。

数日経つと、だんだんと慣れてきたのか、影時間が終わるころになると寝ていたりするようになった。

本日は8月31日。

今日で夏休みが終わる。

とりあえず、これで命の危険はある程度去ったと言っていいだろうと思う。

しかし、原作介入をしないとすると原作のSEESメンバーの間とコミュを深めていくのは難しいのではないかと思う。

ちよつとここで、今後についての計画を立てる、というより今後のおおざっぱな方針を決めようと思う。

原作介入をしないと決めたのだが、原作介入をしないとすると攻略できないキャラが出てくるのではないかと思う。

困るのは女キャラ。

出来ればハーレムなんて目指してみたいな、なんて思っていた時期もあった。

しかし、よくよく考えれば100%修羅場になる。
というかゲームじゃなかやハーレムとか無理。

まあ、その考えは置いといて、原作に介入しなければ攻略できない
キャラについて考えよう。

SEESメンバーの攻略キャラと言えば、岳羽ゆかり、山岸風花、
桐条美鶴、アイギス(?)だ。

まず、岳羽ゆかり。

彼女は10年前に父親を失っている。

その原因は桐条グループによるシャドウの研究。

そして、その実験が失敗し、さらに彼女の父親はその事件の首謀
者という扱いを受ける。

そのため彼女の家族は転々と暮らさざるをえなくなった。

という過去を彼女は持っている。

そして俺は彼女と仲良くなるためにはかならずSEESに入らな
ければならないと思う。

なぜなら、岳羽さんを攻略するには、彼女の心の傷、所謂父親の
ことに関してなんとかする必要がある。

彼女がSEESで原作のように立ち直り、そのことで楽に付き合
えるようになればいいが、原作であそこまで影時間で濃い生活をし
ている以上、現実世界でのみの接点ではいささか物足りないと思わ
れる。

そして、彼女のことを理解するには、やはりシャドウに関しての

知識が必要となってくる。

原作介入を諦めるⅡ岳羽さん攻略を諦める。

この方程式が成り立ってしまうわけだ。

（うん。まあ、いいや）

俺にとってはテラハイルスク（原作介入）ローリターン（岳羽さん）だ。

今狙っている長谷川さんだけで十分、なんだかそんな気がしてこないこともない。

まあ、それは置いておこう。

次に山岸風花。

彼女はゆかりほどヘビィではないが、それなりの過去がある。

彼女の両親は、医者 of 血筋だった実家から飛び出した普通の夫婦だった。

しかし、いつの間にか、本家に対してそれがコンプレックスになっていったようで、山岸さんに医者になるよう期待する。

そのプレッシャーを受け、だんだんと人の顔色を伺うようになり、人に対して苦手意識が働くようになった。

彼女は、SEESに入るときに夏紀と仲直りをして親友になる。

そしてその後、自分の能力を使って皆に認められていくという風に成長していくのだが。

原作ではその成長をさせているのは主人公だ。

となると、それが男ならそのまんまそちらへ、というわけだ。
まあ、それは岳羽さんにも言えることなのだが。

原作介入せずに山岸フラグを立てるには、イジメられている時期に助けに行くという白馬の王子様の行動が最もいいと思うのだが。実際にそれをして、その場だけ助けても根本的解決にはならないし、かえって困らせてしまう場合もある。

まあ、彼女に対しても、

原作介入を諦める＝山岸さんの攻略を諦める

という方程式が成り立ってしまう。

岳羽さんと合わせても、
テラハイリスク（原作介入）ミドルリターン（岳羽さん＋山岸さん）というわけだ。

これでもまだ分が悪い。

続いて、先輩の桐条美鶴。

彼女は文武両道で才色兼備、そのうえ巨大コンツェルン・桐条の一人娘。

常日頃から努力をし、常に上を目指している。

幼い頃から、多忙な父親のために頑張ろうとしている。

彼女の行動の目的はその大半が裏に父親のために、というのがある。原作の後半になり、自分の父親が幾月に殺された後、彼女はどのようにやって生きるか悩んでいた。

実際、それほどまでに父親に依存していたのだ。

桐条先輩を攻略するには、とりあえず彼女に見合うだけの学力と、リーダーシップなどなど、色々必要だ。

俺も学校ではかなり優等生で通っているが、彼女の横に立てるかと言われれば無理だろう。

原作介入することによって、シャドウと戦い、彼女と共に試練を乗り越えることで初めて認めてもらえる。

同様に、

原作介入を諦める⇨桐条先輩の攻略を諦める

の方程式が成り立つわけだ。

そして、彼女たち3人を合わせると、
テラハイリスク（原作介入）ハイリターン（岳羽、山岸、桐条先輩）だ。

そしてアイギス。

彼女は・・・まあ、ロボット。

最初から主人公にゾッコンであります。

攻略不可、ってやつであります。

まあ、こんなけ長々と述べた結論は、

（割りにあわねえ）

なんというか、

（原作介入とか、なんで俺最初に考えたんだろ）

そう思わずにはられない。

23話 今後（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

修正点について

感想をいただいていて、その中の大半が矛盾点への指摘でした。その指摘に対して、その状況の見方を変え、とにかく作者のいいように解釈しまくりその矛盾点をどうにかしようとした結果が以下です。

このことでさらに矛盾点が生じたのを発見したり、この解釈が気に入らない、というのがあれば感想でいただけると幸いです。

まず、原作（漫画）でゆかりや伊織や桐条先輩は、主によくある危機的状況になった時にペルソナを召還しています。

そこで主人公のあの時もそういった感じの状況だったため、主人公がペルソナ召還をしていないのがおかしいと指摘をいただきました。

そのことについては、主人公にとってあくまでペルソナの世界はなんだかんだ言って、『ゲーム』としてみる節があります。

実際にシャドウと出会い、追い詰められ主人公自身も『死』を感じていたように思われますが、実際は心の奥ではそう感じていなかった、ということから主人公はペルソナ召還をできていません。

そして、あくまで自分の考えですが、ペルソナ召還にはやはり『覚悟』というものが必要なのではないかと思います。

主人公にはそれが絶対的に欠けている、というのも理由の一つです。

次に、影時間に迷い込んだ二人がシャドウとどのようにして遭遇したかについて。

二人には同時にペルソナ能力に目覚めた。

そして、伊織のように影時間に迷い込んだ。

シャドウが二人を襲った理由は、近くにいた人間からシャドウが生まれ、たまたま近くで迷い込んだ二人の方に来たということです。

そして、先輩のペルソナ召還について。

主人公と同様に先輩にもその『覚悟』がなかった、そのため召還にはいたらなかった、ということです。

先輩が影時間で危険な時を経験したのにも関わらず主人公にすぐ惚れる点。

これは、先輩の能力の『一目惚れ』が発動した、ということです。

無理やりですがこのような解釈で行こうと思います。

修正点について（後書き）

この無理やりな解釈でいけるかどうか判断した上で続きを書こうと思います。

意見があれば感想お願いします。

24話

「あーいつ聞いてても長げえよ」

伊織が欠伸をしながら教室へ向かう廊下を歩く。

「いや、もうマジ勘弁」

その横で友近も同じように愚痴を零す。

今しがた始業式が終わったところだ。

「あの校長早く辞めないかな・・・」

原作時でいるため、その確立は皆無なのだが、それでも呟かずにはいられない。

ゲームの中では、キャラが「長いなあ」とか言っていたが、実際は○ボタン押してたら勝手に終わるのでそこまでとは思っていないかったのだが。

いやはや、本当に長い。

そしてつまらない。

最悪だ。

何処の学校でも校長の話が長いのは一緒のようだ。

「あっという間に夏休み終わっちまったなあ」

ベチヨ〜という感じで机にへばり付いている伊織。

「でもまあ、もうすぐ文化祭があるだろ」

「おお！そうだったな！」

俺がそう言うのと伊織は急に元気になり始めた。

「メイド喫茶だ！メイド喫茶！もうこれしかねえ！」

そして立ち上がり、叫びだす。

拳まで握っている。

よほどメイドがすきなのだろう。

原作の時は確かメイド喫茶だったが、台風でお流れだったような気がする。

しかし、原作の主人公は文化祭の準備をしているようにみえなかったのだが・・・。

「メイド喫茶ってね、順平の趣味丸出しじゃない」

横から岳羽さんが会話に加わってきた。

「ゆかりっちのメイド姿もいいと思うんだよなあ、なあ健二」

岳羽さんのメイド姿を想像して若干鼻の下を伸ばした後、伊織は友近に同意を求めるかのように名前を呼ぶ。

「はぁ？俺はガキに興味ないっての」

（・・・あれ？）

「お前まだ・・・」

「はっ！俺はそんな簡単に諦めないぜ！」

「・・・私よりあんたの方がガキにに見えるわ」

呆れた、と言いながら岳羽さんは自分の席へと戻る。

それだけを言いに来るとは、原作のどこかのシーンを思い出させる。

「文化祭ねえ・・・」

前世ではバンドなどをやったり、舞台に出たりして楽しんだ。

さてはて、今回は一体何をしようか。

やっぱり文化祭を楽しまなければ、高校生活を楽しんだとは言えないだろう。

他には、食べ歩きとか、クラスの出し物に全力を注ぐとか、か。

「とりあえずナンパだな」

「おい」

思わず突っ込んでしまった。

「おいおい、こっちの主力は彩なんだぜ？ お前が乗り気でなきや、落とせる女も落とせねえよ」

最近の伊織と友近は、どうにもそちらの話にしか興味が無いように思えてくる。

「バンドとかどうよ？」

一応言ってみる。

「え？ 練習とかダルいんだけど」

「そんなんしなくても、普通に舞台に出てればいいじゃん」

なんとも冷たい反応である。

皆で一致団結ってのがいいんじゃないか。

それにしても、もうそんな時期だ。

あと半年も経てば原作開始。

昔は望んでいたが、今は全く嬉しくない原作。

もし原作の内容をあらかじめ知っている人間がいたら、なんていう二次創作を前世で読んだことが数回ある。

俺もそれと同じ状況にあるのだろう。

しかし、それらのことに必須条件である、完璧なチート力を俺は

持ち合わせていない。

ペルソナすら召還出来ない今俺はむしろ弱者に分類されるだろう。仮に出来たとしてもそのペルソナが補助系ならチートはできない。

あらかじめレベルを上げるという策もある。

しかし、ソロでタルタロスを攻略するのは無理だろう。

よくある、オンラインゲームでログアウトできなくなって、それがデスゲームになるのと同じ気分だ。

遊びのような感覚でシャドウに挑む気にはならないし、ソロなら死んだらそこで終わりだ。

助けてくれる人間はいない。

そして、そもそも原作介入をする気がない以上、特段強くなる理由もない。

しかし、原作の主人公は高校生活で最も楽しいと思われる高校2年生を、あんな多忙な日々で潰し、その上死んでしまうとは、なんとももったいないことだ。

まあ原作が始まったら、主人公には悪いが俺は『原作介入』以外の本来の目的である『人生をエンジョイする』ことにしよう。

「彩君」

なんて色々と考えていたら教室の入り口から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「ん？」

隣のクラスの誰かか？なんて思いながらそちらに顔を向ける。

「一緒に帰ろ？」

（・・・まじか）

いや、本当、この人はなんなんだろう。

「先輩・・・」

（くっそおお！この人と仲良くしてると、周りの女子から彼女持ちだと勘違いされかねん！）

そうになると、長谷川さんと一緒に帰れる機会が極端に減ってしまう。

それだけは避けなければならない。

「今から帰るんでしょ？」

「彩・・・ついにお前・・・」

「違うから！この人はなんでもないから！」

いつになく取り乱しながら俺はそう、伊織に対して言う。

「いや、わかってる。あの人の表情を見ればな」

「伊織・・・」

わかってくれるか。

あの人が勝手に妄想しているヤンデ

「お前の彼女だってな」

キラーンと歯を光らせながら伊織が言う。

「お前・・・死ね」

「グフツ」

思いつきり伊織の腹にパンチを決めて、伊織が崩れ落ちるのを確認してから先輩の方へと向かう。

「友達と一緒にでもいいですか？」

二人つきりはまずい。

「え・・・まあ、いいよ」

先輩は少し、いやかなり不満そうな顔をしながらも頷いてくれた。

「友近あ！！一緒に帰ろうぜ！！」

俺がそう叫ぶと、『友近』と名前を呼ばれたことか、それともこの状況で呼ばれたことか、どちらにせよ友近はギョツとしながらこっちを向いた。

「え・・・あ・・・俺、今日用」

事がある、と続けたかったのだろうがそんなことはさせない。

「友近？」

呼びかけながら伊織を指差す。

「・・・一緒に帰らせていただきます」

かなり引きつった笑みで友近は頷いた。

友近には悪いが、

（持つべきものは友だな）

そう思わずにはいられない。

24話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

25話 関係

「彩君、おはよー」

「おはよー」

手を上げて長谷川さんに挨拶をする。

この数ヶ月で一気に表情が明るくなったような気がする。

今は10月。

もう文化祭は終わった。

特に何かあるわけではなかった。

先輩がストーキングらしきことをしてきたこと以外は。

俺の日々の生活は、なんとか先輩を避けて、長谷川さんや結子と一緒に帰ったりすることだった。

しかし、何故だろうか。

もし俺にコミュがあったとしたら、もっと明確には分かるのだが、毎回毎回帰りにどこかによって分かれるときに、ふと頭の中に、

「もっと仲深まりそうな気がする」

というセリフばかりが浮かんでくる。

原作ゲームプレイでいうなれば、空振りというやつだ。

なぜ原作主人公は、狙えばたったの10回でCOMMUNMAXになる

のだろうか。

俺はすでに10回以上一緒に帰っているが、特別な関係にさえなっている気がしない。

これが主人公補正の有無なのだろうか。

「おはよ」

自分の教室に入った時に挨拶をされた。

「おはよ、岳羽さん」

いつも通りそれにも挨拶を返す。

岳羽さんとは、原作介入をあきらめてからはあまり一緒に帰るところはない。

それにしても最初から一緒に帰れたのは何故なんだろうか。ちなみにまだ魅力は5で止まっている。

「順平は一緒じゃないとか、珍しいね」

「別にいつも一緒ってわけじゃないんだけどねー」

笑いながらそう返す。

今日は一人で登校してきた。

伊織はなにやら昨日遅くまでネットゲームをしていたらしく、今日は眠そうに朝食を食べていた。

一緒に来てもよかったのだが、今日の伊織は遅刻しそうな雰囲気があったため先にきた。

ちなみに友近は一人で登校することが多い。
本人いわく、

「朝くらいは静かでいたい」

らしい。

岳羽さんと二、三言話して自分の席に座る。

その際に、かけられる挨拶に全て答えていく。

俺の今の岳羽さんのコミュはたぶん4程度、いやそれ以下だろう。
なんというか、クラスメイトよりは一步出てる気はするんだが、
どうも異性としてそこまで意識はされていない気がするのだ。

正直このペースだと原作が終わる時期になってもMAXは無理な
のではないだろうか。

長谷川さんにしてもそうだ。

結構一緒に帰ったし、彼女の悩みであるクラスに溶け込めないと
いうのを解消するために、知り合いの女子と一緒に3、4人で帰っ
たりして長谷川さんに友達が出来よう努めたつもりだ。

その結果、今の彼女には数人だが友達はある。

男の誘いに簡単に乗らないようにと注意もした。

これでよほどのことがない限り、彼女がクラスでまた浮くという
ことはないだろうと思う。

しかしだ、俺と彼女の関係は一向に進展しない。

こちらから異性として積極的になれていないことはわかっている。それでも、もうちょっとなんかあってもいいのではないだろうか。

原作の主人公は適当にセリフ選んでたらいつの間にか惚れられているというのに、俺にいたっては、

「フッフ、彩君っては冗談が上手いのね」

とか、

「はいはい、誰にでもそういうこと言ってるんでしょ？」

とか、

「そんな真顔で冗談言うとか、ウケ狙ってる？」

なんて、長谷川さんや結子、岳羽さんに言われる始末だ。

今言った結子は、原作ではかなり序盤にコミュを得れる女子のはずだ。

つまりは一番簡単に落とせるのだろうか？

(※違います)

なのになんでこんなにもハードルが高いというか、壁があるというか、ガードが固いんだろうか。

まあ、本来ならこんなことを考えたりしない。

そう本来ならだ。

なぜかイレギュラーがあるのだ。

言わずもがな、あの先輩だ。

俺は正直何もしていない。

自分から一緒に帰ろうなんて言ったことはないし、初影時間以来フラグを立てるようなことは微塵もしていない。

なのに何故か、あの先輩との関係だけはグングン近づいている気がするのだ。

先輩が俺に一気にコミュ2近づいて、俺が一步下がるといった感じで、なんとかコミュ6程度に納まっているような感じだ。

(※実際はもうすこし高いです)

この差はなんなんだろうか、やはり原作キャラであるかないかのだろうか。

原作に関わる気がないので、岳羽さんはどうでもいいが長谷川さんとは仲良くなりたいところである。

「セーフッ！」

ボーと窓の外を見ながらそんなことを考えていると、伊織が勢いよく教室に入ってきた。

「ギリギリだな」

黒板の上の時計を見ると後15秒ほどでホームルームだ。

「はあはあはあ、きつちいなあ」

ダッシュしてきたせいか、汗を結構かいているにも関わらず帽子は何故か脱がない伊織。

「帽子取ったら？」

「はあはあはあ、こ、これだけは譲れねえ」

一体全体、その帽子を被ることになんの意味があるのだろうか。

——キーンコーンカーンコーン

そうしているうちにチャイムが鳴った。

そして、そのチャイムと同時に鳥海先生が教室に入ってきた。

「はい、座って座って」

まだ経ち歩いている生徒に急かすように言う。

そして、生徒が座った後に、委員長に目配せをし挨拶をさせる。

先生に挨拶をして自分の席に再び座った時にふと思う。

（鳥海先生って手もありだな・・・）

原作の主人公も落としかけてたしな、なんて思う。

25話 関係（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

26話

「彩頼む!!」

「頼む!!」

今現在俺の目の前には二人の男子生徒が土下座をしている。

ここは俺の部屋、つまり寮の一室。

そして、時刻は夜の10時。

「またか？」

「仕方ないだろう!だってよお!」

「鳥海先生がさあ!!」

←以下、二人の回想。

「あ、伊織と友近は授業終わったら私のところ来るように」

若干イライラしたような雰囲気をかもし出しながら、鳥海先生は教室から出て行った。

「え?俺らなんかした?」

「さあ?」

そう言って二人は互いに首をかしげながら、授業が終わった後、鳥海先生の所へ行った。

「先生、来ましたけど」

伊織が先んじて職員室に入り、鳥海先生を見つけ、そこへ友近と共に向かう。

「はぁ・・・」

「え・・・何故に開口一番にため息」

「あんたらねえ・・・コレ」

そう言って先生が二人にみせたのは二人の成績表だった。

「はぁ・・・」

段々と二人は状況をつかめてきたようだ。

「他の先生からも注意されてんのよ、私がね、そう私が！」

そう言って先生はデスクにその紙をたたき付ける。

なんで私が、という気持ちちがヒシヒシと伝わってくる。

「あのねえ、もうウンザリなの」

はぁ、とさらにため息をつく。

「は、はあ。すみません」

いまだ詳細はわからないが、とりあえず謝る二人。
とりあえず人生謝っておけばなんとかな

「すみません？謝るくらいだったら駅前あの美味しいケーキ屋さんの一番高いケーキ買ってきなさい！」

る、というわけではなさそうだ。

しかし先生の理不尽な言葉にも、何故そうなるとは言えない二人。

「とにかく！もし今度のテスト悪かったら、毎日呼び出しだからね
！」

その言葉に絶句し、白くなる二人を余所に先生はもう話は終わったと、シッシツとでも言うように二人を追いつ出した。

「と、言うわけなんですよ」

平伏したままの体勢で伊織が言う。

「成績が悪い伊織はわかるけど、友近はそんなにじゃないのか？」

ふと疑問に思ったことを口にしてみる。
友近は何に関してもモブだったはずだ。

「そう思うだろ！俺もそう思ったよ！そしたらさ・・・」

←以下 友近の回想

「ちょ、先生納得いかないんですけど」

呼び出された次の日、友近はさっそく先生に抗議しにいった。
何故、成績が悪いとはいえまだ下に何人もいる俺もなのか、と。

「そんなん知らないわよ。回りの先生達が、あんたが寝てるのが気に食わないって言うんですもの」

（ええええええ）

「っていうわけでして」

「まあ、モブ顔なのに寝るってのは言語道断だから、それはわからんではない」

「いやいや！わかんないから！意味不明だから！」

この事態の理不尽さに半泣きの友近。

（人生ってのは理不尽なもんなんだよ。俺の転生とかな・・・）

「で、何点取ればいいんだ？」

「きよ、協力してくれるのかあ！」

「さ、彩いいい！！」

「ま、他に頼る奴いなさそうだしな」

（まあ、多分だが、授業中寝てる俺が成績がいいのが気に食わないとか、イヤミ田らへんが鳥海先生に言ったんだろうよ。それで成績が上がらなかったら、俺とつるんでるからだ、とかにもっていきたいんだろうな）

（※その通りです）

あの先生無駄に回りくどいしな、と思いながらも、自分のせいだとは言えないので、

「それに、俺達親友だろ？」

なんて言ってみる。

「彩いいい！！」

「一生付いていくうう！！」

なんて薄っぺらい親友だ。

（感激してるのに、その原因が俺とは、申し訳ない）

心の中では謝っておいた。

勉強会が始まって大体1時間が経っただろうか、早くも二人がダレ始めた。

「もー無理いゝ」

「ギブうゝ」

俺の部屋のテーブルに突っ伏している。

「おいおい、しっかりしてくれよ。せつかく教えてるのに」

「ううゝスマン」

「なんでこんなことにいゝ」

（俺のせいでこの状況になった、なんて言えないな・・・）

内心で罪悪感を感じながらも、実際に言うことはない。
ひどい奴である。

「とにかく、今日はこっから、ここまでのページが目標な」

「うげっ!?!? 多くない?」

「それだけサボって来たんだろ」

「ぐっ……そう言われると返す言葉もない」

「ま、とにかくガンガン問題解いていこ。分からなくなったら言つて。多分俺の方が教師より教えるのうまいから」

「おう！任せたぜ親友！」

「頼りにしてるぜ！」

二人は再び勉強をし始める。

それにしても、学力5というのはかなり便利だ。

大体4になった時くらいからだろうか、2，3回見たものは忘れなくなった。

もはや擬似瞬間記憶能力である。

それからだろうか、前世では苦勞した英語や古文の単語や、世界史などの暗記系で苦勞することがなくなった。

前世ではバリバリの理系（といっても文系科目があまりにも悪すぎてそうなっただけなのだが）だったため、他の数学や理科系では全く問題がない。

つまるところ、これで苦手科目がなくなったわけだ。

それに、前世では自分ができなかったため、所謂『出来ない人』の気持ちがわかるわけだ。

これでもクラスでは、教えるのがうまいと評判なのだ。

やはり、

（学力5はチートおおお！）

内心、何度目になるかわからない叫び声を上げる。

26話 (後書き)

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告おねがいします。

27話 通常

伊織と友近と勉強会らしきことをした次の日。

「おお！？ステータスが上がってる！」

思わず叫んでしまった。

俺らしくもない。

毎日の日課というわけではないが、暇になれば自分のステータスを確認する癖がある。

学力…6

天才

魅力5

オーラが出ている

勇気6

漢

Lv7 流峰 彩

HP 31／31

SP 60／60

普通

NEXT EXP 23

学力が！学力があ！

正直5でもチートレベルの頭の良さだったのに、MAXの6。

これはヤバイんじゃないだろうか？

もう、今から大学受ければ受かるんじゃないだろうか。

(※それはない)

いやしかし、多分これは完全に瞬間記憶能力を自由に使える、そんなレベルではないだろうか。

考えてもみてくれ。

ああ、単語が覚えられない、なんて誰しもが思うだろう。

それがだ、たった一回、覚えたいと思って見ればそれで覚えれる。

この能力をチートと言わずとしてなんと言おうか。

それによくある、忘れたい物まで覚えている、なんていうこともこの能力には関係ない。

あくまで擬似的瞬間記憶能力。

覚えたいと思わなければ覚えることはない。

本当の瞬間記憶能力は、直接に脳に全てが焼き付けられるような感じらしく、本来人間の脳がいらないと判断したものまで覚えてしまう。

しかしこれは違う。

とっても頭がいい結果、脳が覚えたいと思ったものを完全に記憶してくれるのだ。

やはりチート。

そして、自分のレベルが上がったのはシャドウを初日に倒した時に知っていた。

2体でLv6。

少し上がるのが早い、と言ったところだ。

まあ、まだレベルが低いので大して問題ではないし、今後関係があるとは思えない。

（それにしても学力6か・・・これで桐条先輩と一緒に帰れる）

なんてふと思ってしまう。

原作に関わる気はない。

でも女の子とは仲良くなりたい。

それが俺の内心だ。

（まあ、桐条先輩と一緒に帰るには、生徒会に入るもしくはSEE S、つまりは原作介入するしかないかな・・・）

どれほど頭がよくても、接点がないうちに話しかける勇氣はあまりない。

いや、勇氣はあるのだが、というより有り余っているのだけども、流石に不自然だろう。

長谷川さんのようにはいかない気がする。

というより、あの人の時はかなりノリ的なものがあっただろうし。

それに、桐条先輩と関わって下手に原作に関わりたいとは思わない。

とりあえず今は、学力が上がったことを素直に喜んでおこう。

そして、いつもの通り原作のことや、今の自分のステータスに友達関係について色々と考えていた。

いつも通り、なんて言ってる日に『いつも通り』なんてやってこない。

この日俺は、人生で最大の過ちを犯す。

例えるなら、大学のセンター試験で、マークをしょっぱなから一つづらしてマークしてしまった感じた。

実際にその過ちを犯す人間は少ないが、やってしまった人間にとっては最大の過ちだろう。

その日に『いつも通り』影時間がやってきた。

そして、俺は『いつも通り』ベットに潜り込む。

そこでふと窓に目線がいく。

カーテンが開いている。

別に毎日ではないが、大抵俺は影時間中に寝入ったり、寝ている

ことが多いため、最近では影時間が終わった時を確認したりしていない。

つまり、今この時点で開いているカーテンはこのままいくと開けっ放しというわけだ。

正直寝ている間にカーテンが開いているというのは落ち着かない。

それに普通は夜の7時ごろになると開けていたカーテンを閉める習慣があったのだが、何故か今日に限って忘れていたようだ。

そして俺は立ち上がりカーテンに手を伸ばす。

外にシャドウがいたら、なんて少し不安に思い窓の外を見る。

俺はそのときの行動を一生後悔するだろう。

そこで俺は見た。

いや、見られたという方が正しいのだろうか。

「・・・マジかよ」

口から思わず言葉が零れる。

別にシャドウに見つかったというわけではない。

人だ。

そう人なのだ。

この影時間中にいるはずのない、人間というもの。

その人は短く切りそろえられた髪型の白髪だ。
内心で染めてるんですか？なんて言う余裕はない。

目線が合う。

向こうは驚愕に目を見開く。

驚いているのはこちらと同じだ。

あの顔は知っている。

原作知識なんぞなくても、月光館に通っていれば誰もが知りうる人間だ。

月光館学園の2年生、ボクシング部。

2年でありながら実質、その強さで既に主将になっている男。

周りからはクールだとかなんだとかで、かなりモテている様子の男。

男子の一部はそれに憧れて入部したりもするらしい。

そして、俺が一番会いたくない、いや会ってはいけない人間の一人。

真田明彦。

考えてみれば不思議なことではない。

ここに真田先輩がいてもおかしくはない。

しかし、影時間に入るようになって一回も会わなかったことが俺

に油断を招いたらしい。

（おおおお！神よお！神よお！どうして私をお見捨てになったのですか！？）

（※見捨てられたわけではありません）

思わずキリストのあの言葉を叫んでしまうくらい俺は内心混乱していた。

というより内心叫ばずにはいられない、だろう？

27話 通常（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告おねがいします。

外伝 真田

真田Side

今日は影時間の中でトレーニングをすると決めている日だ。

だいたい3回に一回はシャドウを倒しに単独で出ている。

最近は敵のシャドウが弱すぎるためか、あまり強くなっているという実感は得ることができない。

影時間の中では通常の時よりも、より体力を使う。

そのためトレーニングには持って来いだ。

ここらへんに徘徊している弱いシャドウを倒すことが、俺が強くなることに直接関係がないと感じ始めてから、俺のトレーニングメニューは変わった。

影時間中の走りこみは、弱いシャドウを倒すことよりは有意義だと思う。

多分もつと遠くや、それこそタルタロスに入ればより強いシャドウに会えるだろう。

しかし、美鶴にそれは止められている。

遠くに行くとなると、それだけで体力を消耗するため、敵と戦うときに危険だと言われた。

しかしそれでこそトレーニングになるのでは、と俺は毎回思うのだが、どうにも美鶴には頭が上がらない。

タルタロスに至っては論外。

まずはバックアップに美鶴が必要になる。

その時点でタルタロス内部に入れるのは俺のみ。

昔はシンジがいたのだが、今はいない。

シンジが一緒なら美鶴も少しくらは許してくれただろう。
しかし、いない人間を頼っても仕方がない。

いつの日か、タルタロスでトレーニングをしたい、といつもの様に考えながら俺は寮の扉を押す。

「明彦か」

ふと後ろから声がする。

「美鶴か、驚かせるなよ」

振り返ってみるとそこには美鶴がいた。

「またトレーニングが？」

どこか呆れたような声を出す美鶴。

「ああ、今日こそは骨のある敵を見つけてみせるさ」

何処かにふと強いシャドウが現れないか、という希望は常に心にある。

「いつものことだが・・・まあ、無理はするなよ」

「ああ、わかってるさ」

パシンと自分の両手をぶつけ合わせ、俺は覚悟の意を示す。

「いってこい」

「ああ」

美鶴そう言ってから、俺は寮の外へとでた。

『いつも通り』俺は、寮の周りをランニングする。

時たま見つけるシャドウを2，3発殴って倒す。

そして、また走る。

そんなことを繰り返していた。

ふと目に入っただのは3匹のシャドウ。

「獲物が固まってくれているとは・・・」

ニヤリと笑い、そちらへと駆けていく。

シャドウがこちらに気付く。

一番手前にいた奴が手を振り上げる前に、走って来た勢いのまま相手の懐に入り込む。

そして、そのまま左で軽く打ち込んで、その後に右ストレートを放つ。

それで一体目が消える。

止まることなく2体目に向かう。

一步踏み出してから右で軽くジャブを放った後、左から来たもう一体を避けるためにバックステップを踏む。

そして、自分に対する攻撃が空振りに終わった、隙だらけの三匹目に2発パンチを打ち込む。

そいつが消えた後、敵が手を振り上げてるのを見ながら真正面から突っ込む。

振り下ろされる手が自分に当たる前に、右で殴り飛ばす。

「ふう」

一体づつだとあまりにも手ごたえがないため、2体以上の時はすこしテンションがあがる。

しかし、それでもこちらはノーダメージ。

正直おもしろくない。

「まあ、こんなものか」

とりあえず合計5体ほど倒したことだし、もう少し走ってから帰るか。

などと考えつつ、俺は走り始める。

偶然だったのだろう。

ふと目に付いた寮があった。

目に付いたというよりは、道路に出た時にたまたま正面にあった、ただそれだけのことなのだが。

ここらへんには、影時間の中では始めてきたなと思う。

普段は駅の方を重点的に見ている。

初めての場所だったためか、少し辺りを見渡す。

その時、視界の端で揺れる物を見た。

バツとそちらに顔を向ける。

（シャドウか？でも、寮の中だろ・・・）

寮の中まで攻め入るのは、後処理が面倒だなと思いながら、その揺れたカーテンのある部屋の場所を外から確認する。

そんな時だった。

窓の隅から除く人がいた。

（人！？）

驚愕に目を見開く。

俺と目線が合う。

相手の口が少し動くが、何を言っているのかはわからない。

しかしそんなことはどうでもいい。

この時間について、生きているということは適正のある人物ということだ。

今までどうやって逃げてきたかは知らないが、適正のある人間がいる。

つまり仲間が増える。

結果、タルタロスにいける。

最近、タルタロスのことばかり考えていたせいだ、『タルタロスに行ける』ということしか俺は考えられなかった。

相手がその誘いを断ることも、美鶴が反対するなんてことすら考えなかった。

「これは美鶴に報告だな！」

俺はしばし呆然とした後、その寮と部屋を外から再度確認して、寮まで走って帰った。

（これで俺はもっと強くなれる！）

そんなことしか俺の頭にはなかった。

外伝 真田（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

28話

「君は一日が24時間ではないと言ったら、信じるか？」

「信じません」

「・・・」

いきなり沈黙から俺と桐条先輩の会話は始まった。

結局昨日の出来事があった次の日、というよりも今日、俺は桐条先輩に呼び出された。

昨日か今日の朝かはわからないが、真田先輩がどうやら俺のことを言ってみたんだ。

昨日は何故か楽しそうに走って帰っていったため、何処か嫌な予感はしていたが、今日早速とは思わなかった。

それに、まさかあんな状況で呼ばれるとも思わなかった。

どうやら原作でそうであったように、桐条先輩はあまり一般庶民の常識を知らないようだ。

なぜなら、今日の昼休みに突然俺の教室までやって来て、

『琉峰彩』

いきなり名を呼ばれ、桐条先輩の方を向いた俺に、

『そうか。今日二人きりで話がしたい。放課後を空けておいてくれないか？』

なんて、クラスメイト皆の前で言うのだから。

これは間違いなく誤解を生むだろう。

そして放課後呼び出されて、そのまま先輩の寮まで連れて行かれた。

今日先輩に連れてこられたことは絶対明日皆の話のネタにされるのは間違いない。

なぜなら、あの桐条先輩が男を寮に堂々と連れ込むなんて、とかいうのを先輩に寮に連れていかれた時に、寮の近くを通っていた生徒から言われれば、そのことは容易に想像がつく。

前世では人にイジられるのはなれていたが好きというわけでは、もちろんない。

「そうか・・・いや、しかし、君は体験したいだろうか？」

「何をですか？」

原作のような状況とは違って、理事長はいない。

俺と桐条先輩の二人つきりだ。

理事長がいなくても関わらず、何故か勝手に作戦室を使っているのだが、これは許可はいらないのだろうか。

それにしても、まるでRPG系のゲームで、フィールドを歩いている時に『出てきて欲しくない』と思った時は出るくせに、レベルを上げるために『出てきて欲しい』と思った時は出てこないモンス

ターのように、俺の平穩は、『平穩であって欲しい』と思っていた時になくなった。

もしこの世界によくある『修正力』が働いているのなら、昨日の出来事はいえなかっただろう。

つまりこの世界には『修正力』はない。

（もしかして・・・これは原作とは完全に違うのか！？原作主人公がいないとかなるのか！？もしそうなら世界が終わる！？）

なんて、つまらないことを考えてしまうくらい今の俺はテンパっていた。

「・・・ふう、昨日明彦が君を『影時間』で見た」

「『影時間』？」

「君が体験したあの不思議な時間のことだ」

「いえ、そんなもの体験した覚えはないのですが」

とりあえずシラを切り通すしかない。

というより、なにか考える余裕がないので、ここは一時撤退するべきだと、俺の頭が告げている。

そう、学力6の頭がだ。

それに従わない術はない。

「どうあってもシラを切り通すつもりか？」

どうしょ。

てかなんで俺ってバレたんだ？

確かにあの時俺は真田先輩と目が合った。

しかし、顔を完全に見られた覚えはない。

「いえ、ですからなんのことか自分はわからないのですが」

あの真田先輩、頭脳派とは言えない彼が一体全体どうやって俺だとわかったのか。

もしくはどうやって桐条先輩が俺だと特定できる情報を見つけたのか。

わからない。

だいたいあの時、真田先輩は完全に寮の真正面にいたが、決して寮の傍にいたわけではない。

それなりにキヨリはあった。

・・・ああ、そういうことか。

俺の寮の部屋番号か。

それくらいなら外見から分からないこともない。

今ばかりは、寮の真正面に俺の部屋の窓があったことを恨まずにはいられない。

「・・・私たちは『シャドウ』と呼ばれる化物と戦っている。そのシャドウは影時間に人間を引きずりこみその人間の精神を食う。そして、その食われた人間は廃人、最近よく聞く『無気力症候群』と

なる。まあ、私達は『影人間』と呼んでいるがな」

先輩は俺の目を見ながら言う。

「そのシャドウを倒せるのは、あの時間に存在できる者のみ。影人間を救えるのも、あの時間に存在できる者のみ」

先輩は俺の反応を見るように、こちらを見ながら黙る。

「・・・先輩」

「どうした？」

「俺、先輩はもっと普通の人だと思っていました」

俺は心底失望したような顔で桐条先輩を見る。

「先輩が・・・皆の憧れの的の先輩が、まさか『オカルトマニア』だったなんて！」

「ちょ、ちょっと待ちたまえ！君は今の話を聞いていて何も思わないのか！？」

「俺は・・・あくまで一般人です。変な趣味はありません」

「そ、そういう意味ではない！彼らを救えるのは我々だけだと言っているのだ！」

桐条先輩は、キャラに似合わないほど慌てた様子で立ち上がりながら言う。

「先輩・・・正義のヒーローごっこが許されるのは小学生までですよ？しかも女の子がそんなことをするなんて・・・なんてはしたない」

「な！？き、君！明彦が言っていたんだ！影時間に適応している人間なんだろう！？」

「先輩、もう止めましょうよ。今日のことは誰にも言いませんから」

「違うと言っているだろう！だからだな！明彦という証人がいるんだ！言い逃れはできないぞ！」

「真田先輩に責任を押し付けるなんて・・・」

「だから！君という人間は！」

バンッとテーブルを強く叩きながら桐条先輩は言う。

「先輩・・・一体いつから」

なんて言いながら目頭を押さえて見せたり。

「誤解だ！誤解なんだ！」

必死なってそう言う桐条先輩のキャラ崩壊具合を見ながら思う。

（キャラ簡単に崩壊しすぎだろ）

「断じて私は『オカルトマニア』なんかではない！」

だんだんと話が逸れて来た。

これで俺の思い通りと思った時だった。

——ガチャリ

「美鶴」

後ろのドアから真田先輩が入って来た。
そして彼の脇には見覚えのある顔が。

「もう一人連れてきた」

そこには先輩がいた。

（ああああ！！なんでじゃああ！！）

思わず叫ばずにはられない。

28話（後書き）

キャラが崩壊してる・・・。

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

29話（前書き）

「先輩」とい表記だけの時は、大抵あのヤンデレです。

29話

「ほら！ほら！だから私は言ったんだ！」

あの後、普通に先輩が俺と不思議な時間にいたことを証言、もといチクってくれやりました。

「まったく、これでわかったか！私は断じてオカルトマニアなどではない！」

俺のことを盛大に睨みつけて、自分のキャラが崩壊していることにもイマイチ気付いてないようすで言う桐条先輩。

そもそも何故先輩がこの寮に居るのかというと、

先輩曰く、

『彩君と一緒に帰ろうと思って、彩君の教室に行ったらなんと、私の彩君が他の女と帰ったと聞いたのよ』

『私の彩君』？

なんか持病のヤンデレが悪化している気がする。

『それでね。誰と帰ったのかね、周りの子に聞いてたら後ろから真田君がね声を掛けてきたの』

他の男が嫌なのかわからないが、その時の先輩は真田先輩の顔を微妙に嫌そうな顔で見ていた。

後で聞くと、どうも熱血系は嫌らしい。

真田先輩は一応学校ではクールで通っているはずなんだが。

『それにしても失礼な人なのよこの人。だって私のことを彩君の彼女か？なんて間違えるし』

おお、先輩。

正常だったのか！あなたはヤンデレなんかじゃなく

『だからね、ちゃんと言ったよ。私は彩君の妻だって、ね』

ニコリと微笑んで先輩は話してくれたが、きっとその時の俺の顔は相当引きつっていただろう。

先輩はその後、真田先輩に俺の居場所がわかると言われ、そのまま寮に二人で向かうことになってしまったらしい。

それと、何故真田先輩が俺と桐条先輩が帰る時にいなかったかという、普通に部活を休むために色々していたらしい。

それで二人で帰っている時に、どうも先輩が俺との二人だけの空間があるやらなんやら語ってしまったらしい。

その結果、それをどう解釈したのかは知らないが、この熱血プロテイン馬鹿はそれを影時間だと思ったらしい。

その影時間について色々説明を聞いたら、先輩のそれと合っていたということで俺が影時間にいることが証明されたようだ。

そして、そのまま寮について冒頭に至るというわけだ。

「聞いているのか!？」

必死だな。なんて言えはしないが、今の桐条先輩はかなり必死だった。

「そんなことよりも！私の彩君とどういう関係なの！？」

場がカオスになりそうな予感がするのは俺だけなのだろうか。

「まあ落ち着け二人とも・・・早くタルタロスに行こうじゃないか」

おい、こら。

この熱血脳筋は何を言ってるんだ。

「先に私の誤解を解く方が先だ！君もいい加減認めたまえ！」

「彩君と私はね、夫婦なの！わかる！？夫婦よ！」

いや、違うからね。

「影時間までまだ時間はあるが、準備に時間がかかるだろう。早くこいつの分の装備を整える必要があると思うんだが」

こらこら、一人で勝手に進むな。

「ふっ、やっと誤解だと認めたか。つまりはだな、私は至って正常だということだ！」

なんも言っていないんですけど。

「全く、浮気は駄目だってあれほど言ったのに！」

だから浮気でもないし、そんなこと言われた覚えもない。

「お前の得意武器はなんだ？ 剣か？ それとも槍とかか？」

もういい。

誰かこのカオスをどうにかしてくれ。

あれからしばらく、いや結構経ってようやく皆落ち着いたようだ。

もうそろそろ寮に帰るべき時間だ。

いや、本当、いつまで続くんだよと思っていたがここまでとは。

「と、取り乱してすまなかったな」

桐条先輩は咳払いをしながら言う。

まあ、今更取り繕ったところでもう遅いのだけれど。

「いえ。面白いものが見れたので」

そう言ってニヤリと笑ってみる。

「・・・今日のことは忘れろ」

「はい。忘れます。じゃ、これで帰ります」

それだけ言って、俺は立ち上がる。

「待て、流峰」

ガシと後ろから真田先輩に肩を掴まれる。

「とりあえず今日、タルタロスに行かないか？」

何、学校帰りにカラオケにでも行かないか、的なノリで言うんだよ。

先輩相手にそんなツツコミはしないが、そう思った俺は悪くない、

「タルタロス？それってなんなの？」

先輩が真田先輩にタルタロスについて聞く。

そういえば真田先輩、タルタロスの説明してないのにひたすら、行かないかと誘っていた。

「シャドウの巣みたいところさ。場所は影時間中の学校」

真田先輩は何故かシャドーボクシングをしながら言う。

「巢？いっぱいあの化物がいるってこと？」

「ああ！そうさ！腕が鳴るだろう！？」

鳴らねえよ。

てか先輩いらんこと言うなよ。

「そうだな、確かにここまで人数が集まればタルタロスにも挑戦できるだろう」

桐条先輩は真田先輩ほどではないが、どこか嬉しそうに言う。

「ちょっと待ってください」

しかし、ここで流されるわけにはいかない。

「どうした？」

「初めては不安かもしれんが、すぐに慣れるぞ？」

桐条先輩と真田先輩が言う。

「いえ、そうではなくて、俺参加するなんて言ってませんし」

「・・・は？何言ってるんだ」

ハハハと笑いながら真田先輩が言う。

「ゲームで言うダンジョンだぞ？そこに行かなくてどうする？」

「いえ、そもそも自分はその『シャドウ』とかう化物と戦う気はないんで」

言った瞬間空気が凍った。
まさに凍った。

「君という人は！事の重大さがわかっていないのか！」

「わかってるから言ってるんじゃないですか」

「なんだと？」

おお。

桐条先輩めちゃくちゃキレてるよ。

まあ、あれだけ醜態されておいて収穫なし、ってのが嫌なのはわかるけど。

「ミスったら自分もその『影人間』とやらになる可能性もあるんですよ？」

「っ！？・・・それはそうだが・・・それでもだ！我々にしか出来ないことならするしかないだろう！」

「桐条先輩。あなたが一体何故そこまでこのことに責任感を感じているのか自分にはわかりません」

お父様のためなんだよね。
ファザコン乙。

「しかし、自分にはあなたのように命を賭ける覚悟も理屈もないんですよ」

そう、俺にはそんな命の危険を冒す理由なんてない。

俺は楽しく生きる。

別に俺がいなくても原作通りに進めば問題ないはずだ。

もし俺がいたら多少は楽になるかもしれないが、そこは俺の平穩のために諦めてもらう。

「我々がシャドウを倒せばそれで救われる人間もいるんだぞ！」

「だからといって自分の命まで賭けなければいけないんですか？」

「君は！君は、自分さえ無事なら良いと言うのか！」

「当たり前です。痛いのか嫌ですし、死ぬ可能性があるとか論外なんで」

悪いけど断らせてもらおう。

俺には自分の命の方が重い。

「彩君！」

横から先輩が俺の名前を叫ぶ。

さっきから空気になっていてと思ったら、どうやら真田先輩と何か話していたようだ。

「戦おうよ！」

え”。

「ちょ、先輩何言ってるですか」

「正義のためだよ！私達がやるしかないよ！」

あれ？先輩ってこんなキャラだったか？

「それにね！・・・もし影時間も一緒にいれるならさ」

先輩は突然モジモジし始める。

「先輩トイレですか？トイレですね。トイレはむこうなんd

「一日に一緒にいれる時間が増えるんだよ！」

先輩は俺の言葉を無視して嬉しそうに言う。
心底嬉しそうに。

「・・・」

（もうこの人嫌あああ）

内心、泣き叫ばずにはいられない。

29話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

30話（前書き）

サブタイトル考えるのが面倒になってきた。

30話

で、

「結局こうなるわけ？」

俺は今、タルタロスの前にいる。

「さっさと行くぞ」

「彩く〜ん」

グローブの感触を確かめながら真田先輩は一人元気がいい。

「私はここからバックアップする」

いつの間に持ってきたのかは知らないが、桐条先輩は白いバイクをポンポンと叩く。

原作で知ってはいたが、結構大きいもんだな。

「ちょい待ってください」

「なんだ？まだビビっているのか？」

真田先輩が不満そうな顔で言う。

「武器は？」

「・・・」

自分のグローブと俺の素手を見比べながら真田先輩は黙り込む。

「ふっ、安心しろちゃんと用意してある」

後ろから、またもや何処から出したかはわからないが剣やら槍やら色々と桐条先輩が出してきた。

「先輩達が言ってた『ペルソナ』とかいうやつ出せないんですが」

「ふっ、安心しろちゃんと用意してある」

おい。

今のセリフ、コピペじゃないよな？

「ほら」

桐条先輩はまたもや（ry

「銃？」

ここはやはり一度ツツコンでおかなければ逆に怪しまれるだろう。

「そうだ。私達はそれを『召還器』と呼んでいる」

「まんまじゃねーか。てか普通に銃だろ」

「召還器だ」

「・・・いや、別にいいですけど」

これに弾が入ってないことはわかっている。

それでも自分の頭に向けて撃つっていう行為は俺には無理。

いや、マジ無理。

「へえ〜。これどうするの？」

先輩は俺みたいにチキる様子は全くなく、桐条先輩から貰った銃、もとい召還器をイジっていた。

「それを頭に向けて撃つんだ」

そう言って桐条先輩は銃を頭に向けて構える。

「ええ！？そんなことしたら死んじゃうよ！」

「大丈夫だ。弾は入っていない」

桐条先輩はそう言って先輩を安心させた後、指に力を込める。

———パァン！

景気の発砲音が鳴り響く。

それと同時に桐条先輩の後ろから、なにやら出てきた。

「これが私の『ペルソナ』の『ペンテシレア』だ」

「へえ〜」

それだけかよ。

「女王様って感じですね」

「ふっ、そうか？」

何故そんな得意げに笑ってるんだ。

それほど自分のペルソナが誇らしいのだろうか。

「本当、ドSの先輩にピッタリですね」

「なっ！？私には断じてそんな趣味はない！」

おおう。

なんか知らないが、原作を知っている俺としては最近、というか今日はキャラ崩壊しすぎだろうと思わず思ってしまう。

「はいはい」

「聞いているのか！君はさっきからずっとそんな調子だがな、私はこれでも先輩なのだぞ！」

「へいへい」

「なんだその生返事は！」

「はい」

「ちゃんと私の話をきけ」

——パァン！

その時、横からまた発砲音が鳴り響いた。

ぎょつとしてそっちを見てみると、先輩が自分のペルソナを召還していた。

「ほえ。これが私のペルソナかあ」

何、ぽえくとしてんだが。

「……私の話の邪魔をするなあ！」

ああ、もう五月蠅い。

「なるほど、中々に便利なペルソナじゃないか」

あれからまたしばらくしてやっと桐条先輩が落ち着いたため、今はさっき召還した先輩のペルソナの能力について話し合っていた。

「そうかな？彩君の役に立つかな？」

チラチラとこちらばかりを見てくる。

ちなみに真田先輩は、さっきから一人でシャドーボクシングをしている。

これだから脳筋は、とか思わず思ってしまう。

「名前はなんというんだ？」

「『エリス』って言うの」

エリス。

聞いたことない名前にしばし戸惑う俺。

まさか原作メンバー以外にペルソナを召還するやつがいるとは思わなかった。

『ペルソナ3』では大抵が神話に登場する神だった気がする。

『ペルソナ4』では日本の神が出ていたが、『ペルソナ3』にはほとんど見られなかったはずだ。

となると、『エリス』も外国系の神話だと思われる。

まあ、だからと言って何かわかるわけではないのだが。

「それで便利な能力ってなんです？」

桐条先輩がさっき言ったことが若干気になり聞いてみた。

「うむ。どうやら彼女のペルソナは『通信機』としての能力があるらしい」

（え……それって原作の山岸さんのポジションじゃね？）

思わずそう思ってしまった。

「どういことですか？」

詳細を聞いてみることにしよう。

「彼女のペルソナと私のペルソナがいれば、十分とまでは行かないが、それなりちゃんとしたバックアップが行えそうなのだ」

先輩一人では無理なのだろうか。

「私が敵の居場所を察知し、彼女がそれを君達に伝える、というこ
とが出来る」

つまり、

先輩＋桐条先輩＝山岸劣化版
ということか。

あんまり原作の時と変わってないな。

うん。先輩役に立ってない。

「なるほど」

「ウッフ、これで彩君の役に立てるね」

こちらに擦り寄ってくる先輩。

正直、予想外だ。

まさか先輩が補助的なことをするペルソナを持っているとは。

この人が誰かを助けるなんて考えられない。

「ん？あれ？それじゃ、実際に探索するのは？」

「君と明彦の二人だ」

「私も彩君と一緒に行きたい！」

「君のペルソナなら常時彼と繋がるのが可能だ」

「ならいいや」

「・・・え」

（あれ？俺と脳筋の二人？え？何これ。死ぬの？死亡フラグなののおお！?!?!?!）

本日二度目だが、思わず内心で泣き叫んでしまった俺は悪くない。

30話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告おねがいします。

31話（前書き）

更新がだいぶ遅れてすいません。

ここ1週間はテストだったのでPC封印してましたw
なのでこれだけ時間かかっていてもクオオリティはあがってません。
むしろ下がってる？w

31話

結局、昨日は遅くなりそろそろ影時間も終わるということでの後帰ることになった。

先輩は補助としての能力が目覚めたらしいが、ペルソナ自体は戦闘をするためのスキルも持っているらしい。

ただ、先輩自体が戦闘を行えないために、完全に補助に回っている。

正直、無理やり連れて行きたいところだ。

真田先輩はどうやら熱血過ぎてあまり周りが見えていないようだ。今回の件にしてもそうだが、力を求めすぎるにあたって他のことを疎かにしているように感じる。

原作でも、怪我をしているにも関わらず戦闘に参加しようとするなどと、その頃からそういう性格であることはわかっていた。

しかし、実際に真田先輩と二人でタルタロス攻略という話になってしまふとかなり不安だ。

それに自分はまだペルソナを召還できていない。いや、これからも出来る気がしない。

このままタルタロスに挑むとして、ペルソナなし、というのは相当きついと思われる。

しかし、そんな時のためのこの『目』だ。

この『目』があれば危険な場所がわかる。
だから、最もベストと思われるのは遠距離からの攻撃だ。

よほどのことがない限り、敵の攻撃は真田先輩が受けてくれるだろう。

その上、敵の遠距離攻撃、つまりは魔法系統のスキルは『目』があれば簡単に避けれる。

俺が選ぶべきは遠距離武器。

ペルソナを召還できていない今はそれしかない。

しかし影時間では基本的に機械類は動かない。

例外としてはアイギスというロボットが動いたり、桐条先輩のバイクや召還器がある。

アイギスは元々、対シャドウ用ロボット。

桐条先輩のバイクも探索には必須だし、召還器もペルソナ召還を簡単に行うためには必須である。

それ相応の理由があってやっと、桐条グループが発見した謎の『羽』を使ってそれらを動かすことができる。

それなのに俺が安全のためという理由で銃を使わせてもらえるはずがない。

だから武器として飛び道具を選ぶ場合は原始的な物を選ばなければいけない。

例えば、原作で岳羽さんが使っていた弓やボウガンに投げナイフなどだ。

俺は弓などの心得は全くないし、投げナイフなんていうものを使えるほど器用ではない。

そうなるこの方法は無理ということになる。

初めて戦った時のように超近距離戦をするのが俺の『目』には一番あっているだろう。

月姫の主人公も、空の境界の着物にジャケットを着る女もそうだった。

彼らはより確実に線や点をつくためにナイフを使っていた。

俺も実際にあの時、戦った時の感覚としてもナイフ系の方が合っていると思う。

しかし、やはり近づくのは怖い。
これに尽きる。

あんな得たいの知れない物に自ら近づくなんて俺にはできない。

このままでは真田先輩に勧められたグローブで行く羽目になってしまう。

それだけは避けたい。

「彩く〜ん♪」

思考が遮られる。

どうも最近は考え事をしてばかりだ。

いや考えなければいけないことが多い、と取るべきだろうか。

「先輩、どうしたんです？」

「えへへ♪」

どうもこの先輩キャラが安定していない。

最近は馬鹿キャラのような気がする。

「おうおう、イチャついちゃって」

横から伊織が憎憎しげに言ってくる。

「別に俺はそんなつもりないんだけどな」

俺はいつもと同じセリフを言う。

先輩と恋仲などと誤解されることだけは避けたい。

しかし、俺のこの行動はどうも周りに軽いとか、女誑しなどと思われてしまっているようだ。

女誑しは認めよう。
が、しかしだ。

相手がこの先輩というのだけは認めない。
認めたくない。

「彩君」

俺の席の前の席に座って俺の顔ばかり眺めてくる。

「先輩。あんまり時間ないんですからわざわざここに来なくても・・・」

今は3時間目と4時間目の間の休憩時間だ。

次の時間の準備や、前の授業が長引いたりなどと考えれば5分程度しかないこの時間に先輩はわざわざやってくる。

正直勘弁して欲しい。

「いいの、いいの」

何がいいんだよ。

「今日も一緒に帰ろうねえ」

ニコニコと笑う先輩。

「あ、今日はちょっと約束があるので無理です」

今日は長谷川さんと帰るんだああ！

「え・・・」

呆然と固まる先輩。

まあ、そういう反応をすることはわかっていた。

「誰！？誰と帰るの！？」

ガクガクと先輩は俺の肩を激しく揺さぶる。

「と、友達です」

揺れる視界の中に辛うじて先輩を捉えながら言う。

「女！？女なの！？」

ええ！もちろんです！

なんて口が裂けてもこの人の前では言えない。

「ちょ、先輩っ」

俺の肩を痛いくらいに掴んでいる先輩の手を引き剥がそうとしながら俺は言う。

「私は遊びだったの！？」

いやいや何浮気について言及する恋人みたいな風に言ってるんだよ。

「そ、そもそもっ、先輩と俺はそういう関係じゃないじゃないですか」

先輩は揺さぶるのは止めてくれたが、肩を掴む手にはさっきより力が籠っている。

「そ、そんなあ」

先輩は、最近友近の習慣と化してきたorzのポーズをとる。

「あ、もしかして次移動？」

俺は後ろの席にいる、比較的真面目な性格の女子に聞く。

「うん。そうだよ」

目の前の光景の一切を無視して答えてくれる。

「じゃ、移動しなきゃね。おら、髭行くぞ」

「え？ 彩、この人は？」

「いいの、いいの」

先輩は嘘泣きしながらこちらにチラチラと視線を送ってくる。

が、無視。

「早くしないと遅れるって」

そう言って先に教室の出口へと向かう。

「彩くぅん」

後ろから呼ばれるが、まあ無視だ。

（畜生！自分だけ安全な所からサポートかよお！）

これだけで俺には十分さっきの仕打ちをする理由になる。

どうにかして先輩を前線に出せないかと考えながら俺は移動教室へと向かった。

31話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告おねがいします。

32話（前書き）

サブタイトルとか別にいらないよね・・・

32話

俺は今だに納得していないが、俺と真田先輩はいつものようにタルタロスに挑んでいる。

今は12階だ。

たぶん原作通りになら14階以降は進めないはずだ。

もうだいぶこころへんの階では余裕が出てくるようになってきた。

——PiPiPiPiPi

通信機から電話の着信音のような音になる。

ああ、またか、と内心思いながらも通信機に語りかける。

「どうしたんです？」

『彩君〜♪』

通信機から先輩の声が聞こえる。

先輩は戦闘中は流石にしないが、それ以外の探索ではしょっちゅうこうやって通信を掛けてくる。

どうせ今回も声が聞きたかっただけとかそういうノリなんだろう。

『なんでもないよお。声が聞きたかっただけ〜』

そんなことだろうとは内心思っていたが、やはりか、と内心ため息を吐く。

先輩がペルソナを召還してから1週間程度が過ぎた。

真田先輩が男ならペルソナよりも肉体だ、なんてアホなことを言っただけで、俺はペルソナ召還をすることなくここまで来た。

1週間で12階というのは原作のゲームからすればだいぶスローペースだろう。

無茶をすれば、いやしくとも1回か2回では14階までたどり着いていた覚えがある。

しかし、こっちは2人だ。

しかも回復役がない、筋肉バカと俺。

そのうえ俺は魔法が使えないし、筋肉バカは何を思ったのか、

『ふっ。琉峰が使わないのに俺が使えるか』

なんて、なんか先輩面し始めたりしたせいで、ガツガチの近距離のみで今まで戦っている。

正直アホの極み。

結局俺の武器はナイフになった。

しかも刃渡りがたったの12cmしかない、銃刀法に引っかかるかどうかすらわからないものだ。

原作で伊織や主人公の使う、明らかに銃刀法の違反の武器に比べたらなんとも心もとない。

それにコロマルの武器もナイフだということを考えると、キャラが被っている。

まあ、コロマルとは違って俺はナイフを2本使っている。

あえて言うなれば、ツインダガーといった具合だ。

実際は何本も桐条先輩から貰っているため、なんとなく両手に構えているだけなのだが。

俺の戦闘スタイルは極めてシンプル。

『ヒット&ウェイ』

当てて、すぐ逃げる。

ただそれだけ。

一気にシャドウの懷まで踏み込み、ナイフをブツ刺す、もしくはナイフで切り裂いた後、光が見えればそこでバックステップをして距離をとるといったもの。

大抵のシャドウは2体以上いるため、倒した場所で留まるのはあまりよろしくない。

たまに1体目で線をなぞり損ねると、結構危ないのできちんとなぞれたかどうかの確認をするまえに距離を先にとるようにしている。

実際、シャドウの懷に飛び込めるようになるまでに結構時間がかかった。

今は12階だが、俺がちゃんと戦えるようになったのはつい昨日のこと。

一昨日まではたったの5階で止まっていた。

俺がちゃんと攻撃できるようになると、ほぼ全ての攻撃がクリティカルで当たるようになり、毎回『1 more』のチャンスが来る。

最近思うのだが、どうにも『魔眼』で見える線を綺麗になぞるというのは難易度が高い。

ぴったりなぞれた時は、文句なしに一撃で倒すことが可能だ。しかし、少しズレたりした場合、ズレの大きさに応じて威力が下がっているようだ。

線の方ではイマイチわかりづらいので、点の方で説明すると、ど真ん中は一撃、つまり100%ダメージ。

そのど真ん中というのがまた範囲が小さい。だいたい俺の目測でいくと、中心から半径1cmといったところだと思う。

それより1cm間隔でズレるたびに、20%減といった感じだ。

掠れば即死、とかにして欲しかったのだが現実はそう甘くは無かった。

100%の確立で一撃で倒すのは俺には難しいようだった。しかし、線や点はある程度掠ればそれだけでクリティカルにはなる。

クリティカルになるということは掠るだけで敵が吹っ飛ぶので、真田先輩にはいらぬ誤解を招いてしまった。

「琉峰！次いくぞ！次！」

この真田先輩のテンションはどうにかならないものだろうか。
昨日からずっとこのテンションなのだ。

俺が戦力になることを知ってからもうヤバイ。
シャドウと戦闘をした後に休んだり、体力を回復したりすることなくドンドン次へと行くのだ。

そうでなくても先輩の戦闘時以外の時の通信に対応するので疲れ
るというのに、相手はこのテンション。

その上、戦闘が終われば桐条先輩から地味に小言を言われたりと、
もう散々だ。

もし俺がペルソナを召還した後、余計に戦力として換算されるの
は嬉しくない。
非常に嬉しくない。

しかし、14階で行き詰った場合、原作ではないので進むことは
出来ないはずだ。

それを考えると、原作開始時までにくらレベルを上げようとし
ても、一定以上は上がる気がしない。

そのうえ原作メンバーのペースでタルタロスを上っていくのは目
に見えている。

ならば必然と追いつかれることになるだろう。

そうになると、レベルが高いから安心、なんていうことは出来ない。

俺の平和は一体何処へ行ってしまったんだろうか。

「見つけたぞ！シャドウだ！」

お前は初めて遠足をする餓鬼か。
と思わず言いたくなってしまう。

なんでそんなにテンション高いんだ。
俺のテンションを見ろ。俺の。

そして、今回も順調にシャドウを倒す。

『彩。中々いい動きだった。だが・・・』

『彩君、彩君』

「琉峰！次だあ！」

（・・・もう勘弁してくれ・・・）

とかいつから桐条先輩は俺のことを名前で呼ぶようになったんだ？

なんて、周りのテンションについて行けてないなかで、どうでもいいことを考えるという現実逃避をした俺は悪くないと思う。

32話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告おねがいします。

33話(前書き)

クオリティーが日に日に落ちていく・・・

33話

あれからさらに1週間をかけて俺と真田先輩は14階に到達した。

気付けばもう11月だ。

やはり、俺の思っていた通り14階以降は進めないようになっていた。

真田先輩が10分ほどひたすら封印を殴りまくっていたけれど、もちろんそれが壊れることはなかった。

最近の悩みの種は、先に進めないことが原因なのか、真田先輩がトレーニングの相手に俺を指名してくることだった。

しかもそれが昼夜問わず、といった感じのため、何故か俺がボクシング部に度々顔出すことになっている。

別にそのせいで陸上部の方を疎かにしたりなどはしていない。

ちなみに最近気付いたことがある。

原作で主人公は部活に行くと、宮本のコミュしか上げなかった。まあ、それはゲームとしては当然のことなのだろう。

しかし、俺は違うのだ。

俺は原作の主人公のような、一回で確実にランクを1上げることが出来ないが、1日に2、3人と仲を深めることができる。

どうでもいいといえどもいいのだが、俺としては結構な新発見だった。

それにしてもどの女子も『特別な関係』に近づいている感じがしないのは何故なんだろうか。

「彩君」

毎度のことながら、思考を遮られるようにして今日も話しかけられる。

「結子か」

部活へ行く準備をしていた時に声をかけてきたのは結子だった。

「今日部活行く？」

「行くけど、なんかあるの？」

結子が俺にこうやって聞いてくるのは初めてだったので、何かあるのかと思う。

「えっと、その・・・部活終わったらさ、ちょっと付き合ってくれない？」

（え・・・まさかフラグ立ってた!?!?）

「いいよ」

ニコリと笑みを浮かべる俺。

内心はそんな爽やかな表面とは違って大分ドロドロとしていたが。

「ありがと、助かる。ちょっと相談したいことがあってね」

このセリフからするに、どうやら俺の期待していたようなことはなさそうだ。

最近先輩が俺にひたすらに絡むせいで、他の人と仲を深めるのも大変なのだ。

「お前また早くなったな」

宮本が走り終わった俺に声をかけてきた。

「ははっ。そろそろミヤに追いついちゃうかもね」

ニヤリと笑いながら言う。

（まあ、影時間にいれば自ずと体力は付きやすくなるしね）

影時間中に戦闘を行うようになってから、かなり体力がついたと思う。

真田先輩とのトレーニングもあるかもしれないが、やはりここまですぐ短期間で考えることを考えると、影時間だろう。

そして、いつも通りに部活をしていると、ふと目につくことがあった。

「ちょっとさあ、それあたしらの仕事なんだけどお」

原作でどうだったかは忘れたが、陸上部には今1年が1人、2年が2人マネージャーがいる。

もちろん1年のは結子のことだ。

「そうそう、慣れてるのはいいけどあたしらの面子も考えてよねえ」

洗濯機の前で先輩2人が結子にケチをつけているようだ。

「はあ、そうですか。じゃ、後ヨロシクお願いします」

結子はそういうと部員の服の入った籠を先輩の前に置いて去っていった。

「あの子なんなわけ？ ちょっと調子乗ってない？」

「ちよおっと手馴れてるからって、ねえ？」

あの声の大きさでは陰口にはならないのかもしれないが、2人は結子の陰口を言い合っていた。

結子は、ガングロでギャルっぽい部活に関しては真面目だ。

先輩も合わせ、部員からの評価は高い。

それに比べてあの先輩達2人は、今の3年の部長が目当てで2年に上がった時に入ったようだった。

それまでにいたマネージャーの先輩が卒業したため、目の上の人こぶがいなくなったためか、入ったらしい。

あくまでこれは部活の先輩から聞いた話なのだが。

別に今までこういうことがなかったわけじゃない。

見てみぬフリをしていなかったか、と言われれば俺は顔かざるをえないだろう。

俺としては、あんまり女子のそういったことに関わりたくないというのが正直なところだった。

それに先輩2人というのも、俺を関わらせるの留めさせる原因の一つだった。

今日のこれを見て察するに、結子の相談とはこのことなのだろう。

俺もちゃんと考えなければ、と思いながら俺はそのあとはいつも通りに部活をした。

「ごめん。待った？」

下駄箱のところで結子が来るのを待っていると、10分ほどして結子がやってきた。

「いや、そんなに」

ここで『全然待ってない』と言えるやつと、そう言えないやつとではきつと差がつく。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ。どっかに寄る？」

どうでもいいことを考えていたのが見抜かれたのだろうか。

結子の言葉に無難に返しながら話題を逸らす、

そして結子が希望した、定食屋『わかづ』で過ごすことになった。

「それで、相談って？」

とりあえず直球。

最近先輩と関わりだしてから、話をオブラートに包んだり、遠まわしに言うことをしなくなって来た気がする。

「うん・・・」

若干俯く結子。

それから結子はしばらくして、ぽつぽつと話始めた。

やはり内容は俺が思った通りのようだった。

最近先輩からの扱いが酷い。

何かとケチつけてくる。

などと、軽いイジメのような感じみたいだ。

予想していたとは言え、正直俺から言っても悪影響だろう。

「ゴメンね。何も出来なくて」

どうやら結子が煙たがられる理由の一つに、俺や宮本のこともあるらしい。

宮本と結子は幼馴染のようなものだし、俺はその友達、というだけなのだが先輩達からはそうは思われならしい。

そして、その原因がまた原因らしく、結子自身かなりキテるらしい。

「ううん。別にこうやって愚痴聞いてくれるだけでいいし」

そう言って笑う結子はどことなく寂しそうだ。

（って、おい！普通そこは『どこか嬉しそうだ』だろ！？）

ゲームではフォローに回れば、毎回そういう風になるというのに、俺だけは別なのだろうか。

結局その後、暗くなるまで結子の愚痴を聞いた。

「ごめんね。なんか遅くまでつき合わせちゃって」

「いいって、いいって」

ヘラヘラっと笑いながら結子に言う。

（こんな相談されるってことは、割とランク高くなっていたりして）

なんて、打算的な最低なことを考えながら俺達は帰路に付いた。

33話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告おねがいします。

34話

部屋にはカタカタとパソコンのキーボードを叩く音だけが響く。

前に疑問に思ったことがあった。

今はそれを解決するために、前世では慣れていたがこちらではあまり多用したことのないパソコンを使っている。

「・・・おおう、マジかよ」

なんとなく嫌な予感はしていたが、まさかここにも顕著に現れるとは思っていなかった。

今俺が開いているウィンドウにはこう書かれていた。

『エリス』

『ホメーロスによれば、軍神アレースの妹で彼に従う。ヘーシオドスによれば、夜の女神ニュクスの娘で不和を好み、口争いや殺人などの種々の災いの母でもある。戦場では血と埃にまみれた鎧を着て槍を持ち、火炎の息を吐く』(By Wiki)

最悪だ。

特に、『口争いや殺人などの種々の災いの母でもある』

いや、もう本当あの人はその通りだと思う。

しかしまさかペルソナまでそんなになる必要はないんじゃないかと思うのだが。

原作に出てないキャラだけに今後どうなるかわからない。
それ故にかなり接しづらい。

できれば、いやせめてもっと普通の人であって欲しかった。

そして俺はパソコンをシャッドダウンしベッドの上にうつ伏せに
倒れるように飛び乗る。

「ふう・・・」

布団に顔を埋めながらため息を付く。

タルタロスに挑む回数はここ数日で減ってきた。
今行っても先に進めないことがわかったからだ。

ふと俺は思いついて、自分のステータスを確認した。

学力…6
天才
魅力5
オーラが出ている
勇気6
漢

L v 1 6 流峰 彩
H P 8 8 / 8 8
S P 1 3 0 / 1 3 0

普通

レベルが上がっている。

これは前にも確認した。

HPとMPが多いのかどうかは比べる対象がないので判断できない。

しかしハッキリとわかることが一つ。

俺は完全に後衛タイプだということだ。

HPより明らかにMPの方が多し。

これは後衛タイプによくある傾向だ。

岳羽さんもそうだった気がする。

それにHPとMPの差が序盤からこんなに顕著に現れるなんて、はつきり言っておりえない。

俺のHPが多いかどうかかわからないが、このレベルでMPがHPより多いのはおかしい。

その疑問の解答を持たない俺はしばらくベッドの上で唸った後、学校の宿題をしようと起き上がる。

今日は土曜日だ。

明日は日曜日であるため、宿題は明日やってもかまわないのだが、

こういうものはやはり早めにやるべきだろう。

俺の前世の学校は週休二日制だったので、今の日曜日しか休みがないというはあまり好きではない。

なんて、心の中で学校のシステムにぶちぶち文句を言いながら、宿題をやるためにノートと教科書をカバンから出した時だった。

――PiPiPiPiPiPiPiPi

携帯が鳴った。

「ん？」

ポケットから携帯を取り出す。

携帯を開くとメールが着ていた。

原作で主人公は携帯で電話していなかったイメージがあったが、メールを使うことももちろんある。

「・・・おお!!」

思わず叫んでしまった。

ポーカーフェイスで、クール（※違います）な俺が叫んでしまうとは。

「長谷川さんから遊びのお誘いじゃないかあ！」

試験の前は流石にないが、それ以外はほぼ毎週遊びに誘われる。

大抵は伊織や友近なのだが、今日は珍しく長谷川さんだ。

『11月23日 20..48

From..saosaosa@xxx.ne.jp
sub..明日

明日、もし暇だったら遊びませんか？
新しく友達が出来たので紹介したいです。

沙織
』

「新しい友達か・・・長谷川さんもずいぶん変わったな」

学期初めのような、クラスから浮くこともなくなり友達も増えてきたようだ。

俺があまり親しくない人間が友達になった時は、毎回俺に紹介するのを兼ねて遊びに行くことが多い。

俺が、趣味が『友達作り』と言ったせいだろうか。

「空いてるよ・・・と」

明日行ける旨を伝えて、集合時間と場所を聞く。

しばらくして返信がくる。

From: saosaosa@xxx.ne.jp
 Subject: Re: 明日

昼の1時にポロニアンモールの噴水前に集合の予定です。

沙織

多分聞いても答えてくれそうにないので、紹介してくれる人のことは聞かない。

了解、とメールを打って送信し、携帯を閉じる。

「いつになったら長谷川さんにフラグ立つんだろうか」

原作で彼女のコミュは相手が女主人公だったため、攻略法がない。

年上の彼女なんてできなかったことがないので、長谷川さんにどう接すればフラグが立つのか分からない。

たぶん、今のままで行くと俺は『頼りになるお友達』で終わりそうなのがするのだ。

「というかこれは原作キャラの全ての女子に言えることだ。」

ふと嫌な予感がする。

俺が彼女達と仲を進展できないのには訳があるのではないか。

もしかすると原作の主人公用なのかもしれない。

しかし、そう考えると長谷川さんは関係がないはずだ。

（もしかして俺じゃダメなのかあ!?!）

さらに嫌な予感がする。

（このままいったら、俺には先輩しかルートがないじゃないかあ!）

内心泣き叫ばずにはいられない。

34話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

35話

午後1時の15分前に俺はポロニアンモールの噴水前に来た。

まだ長谷川さんは来ていないようだった。

デートではないのだから、5分前でもよかったのだが流石にそれで向こうに先に来られるとなんかきまづい。

俺の今日の服装は特に目立つようなことはなく、黒のジーンズの上に白の長袖のTシャツ、そしてその上にグレーのパーカーを着ている。

センス抜群のファッションとはお世辞にも言えない服装だ。

まあ、モノクロよりはマシだろう。

白と黒だけの組み合わせ、もしくは黒のみが許されるのは中学生までだ。

前に一回、クラスメイトの女子とかと遊んだ時に、

『彩君って、私服は普通なんだね』

とか言われた時は地味に凹んだ。

だからといってファッションにイマイチ拘りはない。

先輩に服を選んでもらうことも考えたが、思いついて2秒で却下した。

流石にあの人とデートらしきものをする勇氣はない。

どうも先輩関係になると、勇気6では足りないのではないかと思う。

話は元に戻るが、パーカーを女子と遊ぶときに着てくる男子高校生というのはどうなんだろうか。

軽い格好をしてくると相手に、自分はその程度なのか、なんて思われるなんて前世で聞いたことがある。

まあ、正直魅力が5ある俺にはファッションなんてあまり関係がないんだけど。

でもだ、例えばここにイケメンがいたでしょう。
元の顔のレベルが6。

イケメンだからそれなりに遊びなれている。
ファッション6。

ただし、魅力に関してはそこそこ。
魅力3。

結果としてそのイケメンは15。

俺の場合は、ほどほどの顔。
顔のレベル4。

ファッションセンスは微妙。
ファッション3。

しかし魅力だけは高い。

魅力5。

結果、俺は12。

ふむ、割と差がつくものだ。

まあ、今のところそんなイケメンはまだ出てきていないから問題はない。

というより、この『ペルソナ』の世界では魅力だけが問題なのだ。

別にそこまでファッションセンスも、元の顔も必要ないのだ！

つまるところ、今の俺でも全然モテるは

「あ、彩君」

「長谷川さん」

ニコリと笑って、こちらを見つけた長谷川さんに挨拶代わりに手を挙げる。

やはり女の子の私服姿はイイ。

長谷川さんは白色を基調としたワンピース型の服を着ている。

長谷川さんが着るといかにもお嬢様といった感じだ。

「こ、こんにちは・・・」

んお？

あれ？マジか。

「初めまして、かな？俺は琉峰彩。ヨロシクね」

「わ、私は、山岸風花っています。ヨロシクおねがいします」

「ふふふ。風花ってば真っ赤になっちゃって」

ふふふ、ふうか。

ふふふふうか。

ヤバイなんかツボりそう。

「あんまり男子に慣れてないのかな？」

「ま、風花は結構人見知りなのよ」

「なるほどねー。じゃ、行こっか」

「そうね。行きましょ風花」

カラオケ、マンドラゴラ。

ゲームではここに一人で来ると勇気が上がるのだが、今の俺にはもう必要ない。

なんたって俺は勇気MAXのおとこ

「3時間でいい？」

「うん、いいよ」

なんか最近、長谷川さんが俺に話しかけるタイミングが全て、俺の思考を遮る瞬間なのは気のせいかな？

「風花もそれでいいよね？」

「う、うん」

ドモリながら答える山岸さん。

しかし、こんな形で原作メンバーと知り合うことになるとは。

原作の攻略メンバーで勇気と言えば山岸。

これはもう一種の方程式だろう。

確かに俺には勇気がある。

そう、原作で言う風花の弁当を食べれる勇気がある。

しかし、皆考えてもみてくれ。

原作でキタローはどうした？

いや、どうなった？

そう、倒れたのだ。

あまりのマズさに。

そんなものが食えようか？ いや、食えまい。
(反語)

勇気6というのは案外MAXではないのかもしれない。
だって、想像しただけでガクブルしてしまいそうだ。

「じゃ、行こっか」

長谷川さんは割りとういう時に先導を切ることが多くなった。
本来であれば男である俺がこういった受付をするのだろうか、何
故か先に長谷川さんがやっているのだ。

「山岸さんとは何処で？」

「料理関係でね」

おお、マジか。

「へえ、山岸さんって料理できるの？」

「い、いえ全然！全くだ！」

超ドモリながら答える山岸さん。
そりゃそうだよ、アレだもんね。

リボー○で言う、ポイズンクッキングだもんね。

「はは、そんな謙遜することないって。一度食べてみたいな」

男なら、いや漢ならこう答えるしかないだろう？
女性が料理の話題をしているのだ。
このセリフはもうお決まりだろう？

（もしかしたら死亡フラグが立ったかも）

なんて思っていないさ。

ははは・・・。

「ええ!？」

驚く山岸さん。

自分でもひどいとわかってるんだな。

「あら？彩君は私の料理にはあまり興味ないのかしら？」

「そんなことないよ。長谷川さんの料理も食べてみたいな」

「ええええええ!?!？」

え、ちょっと山岸さん？

そんな驚くことなの？

「そうね。今度食べさせてあげるわ」

ニコリと大人の笑みを浮かべる長谷川さん。

横にいる山岸さんの顔が真っ青になっている。

（あれ？もしかしてこっちが地雷？）

踏んではいけないものを踏んでしまったかもしれない。

35話（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告お願いします。

36話

気付けばもう12月半ばだ。

タルタロスに関しては14階で止まってしばらく経って以降、一切行っていない。

真田先輩と鍛えていたせいか、レベルと関係なく強くなった気がする。

案外レベルというものは、俺にとっては意味を成さない。

何故なら、綺麗に決まればどんな敵でも一撃、これは多分間違いないからだ。

まあ、あくまで当たれば、っていうのはあるかもしれないが。

実際ナイフ裁きは大分上手くなったと思う。

ナイフっていうのは刃渡りの長さも関係あるが、俺の場合は超近距離戦だ。

拳で戦う真田先輩のアドバイスは結構ためになっていると思う。

気付けばペルソナを召還しないまま、ズルズルとこんな訓練までしてしまっている。

相変わらず先輩はヤンデレが悪化してきていて、最近我真田先輩にまで嫉妬している感じがいなめない。

というよりペルソナ召還がまだ出来ていないのはどうなのだろう

か。

結構ヤバいんじゃないか、って思う。

てか出来れば今からでも原作と関わりをなくしたい。

気付けば自分の寮は桐条先輩達と同じ寮に変わっていて、気付けば専用のナイフまで用意してあったのは正直怖い。

——PiPiPiPiPiPi

いつもの如く、自分の今の状況を整理していた時だった。

突然携帯になる。

なんとなく嫌な予感がする。

こう、なんというかゾワツとする感じだ。

嫌な予感が拭えないまま、鳴り続ける携帯を取る。

「はい」

『もしもし？彩君？』

——Pi

出たと思ったらすぐに切れた。

こんな時期にイタズラ電話かよ、なんてため息をつきながら思う。

今日はクリスマスイブだ。

学校で桐条先輩に、寮でパーティーをするから、なんて言われた
せいで誰も誘ってくれない。

——PiPiPiPiPiPi

「ん？もしもし？」

何故か、携帯にまた電話が掛かってきた。

『なんで切るの！？』

——Pi

またイタズラか。

正直、こんなに気分が沈んでいる時にイタズラ電話なんてしてき
て欲しくない。

長谷川さんは友達とカラオケでパーティーをしようと言っていた。
結子はミヤの家で毎年やっているらしく、今年もミヤの親に呼ば
れているのだとか。

長谷川さん繋がりで知り合った山岸さんは長谷川さんのパーティ
ーに参加するらしい。

岳羽さんは普通にお友達の家。

伊織と友近は、桐条先輩にそう言われた俺を恨めしげに見ながら、
『俺達は女の子と約束があるんだよ！』とか言ってた。

他にも所謂モブキャラとよばれる友達が俺にはいるが、皆一様に俺が桐条先輩に誘われたことを知ってか誰も誘ってくれない。

——PiPiPiPiPiPi

「なんなんですか？いい加減にしてください」

『それはこちらのセリフ！今部屋の前にいるから』

（・・・え）

ふと扉を振り返る。

そして、もう一度携帯に意識を戻すと、携帯は切れていた。

——コンコン

扉をノックする音が聞こえ・・・ない。

俺には何も聞こえない。

——コンコン

「すいませ〜ん。留守です〜」

——ガチャ

「ちょ、おい」

「彩く〜ん。会いたかったよ〜」

俺に抱きついてくる先輩。

もちろんそこは華麗に避けさせてもらう。

「ぶへっ」

ベツトに顔面からツツコム先輩。

「・・・あ、彩君の匂いだあ。クンクン」

「うおい！」

先輩の襟を掴んで顔を上げさせる。

「彩君。彩君」

「・・・はあ、なんなんですか？」

「あのね・・・」

その日、俺は人生で最も戦慄を感じた。

まるで両親の死を聞いた、あの時の電話のようだった。

世界の音が消え、まるで世界に自分ひとりだけが取り残された、そんな気分だった。

何故、俺は扉を開けてしまったのか。

（※開けてません）

何故、俺はそれを聞いてしまったのか。

この時ほど後悔した時はない。
今からでも戻れるのなら、俺は・・・

「好き。愛してる」

「好き。愛してる」

いつか、言われるとは思ってた。
というより今まで言っていなかった方が驚きだろう。

「彩君・・・だから、私と」

この先輩とはできればそんなに関わりたくないと思ってた。

何故か？

原作メンバーと関われなくなるから？
他の女の子と接しにくくなるから？

違う。

何かもつと根本的なところで彼女が嫌だった。

多分それは俺でなくてもそう思ったことだろう。
何か感じるのだ。

彼女からは、そう明確な

「結婚して」

「・・・え？結婚？」

「うん。本当はもっとロマンチックなシーンで、彩君から言って欲しかったんだけどね」

「待て待て」

「私・・・待ってるだけの女じゃないんだよ、って彩君にわかって欲しくて！」

「いやいや。意味わかんね」

「元々、私達は夫婦なんでけどね、やっぱりちゃんと籍入れて、形にしておきたくて」

「お帰りはアチラの扉からどうぞ」

なんかおかしいよね？色々と。

付き合う↓結婚。

これが正式ルートだろう？

「ガチで言ってるわけ？」

「うん」

「え？普通に嫌なんだけど」

「・・・え？」

「え？」

「え？」

「ナニソレコワイ」

「な、なんで!？」

「それこっちのセリフなんだけど」

「私、こんなにも彩君のこと愛してるのよ!」

「俺は全然愛してないよ?」

「私は愛してるの!」

「でも俺は愛してない」

「どうして!どうして分かってくれないの!?!皆、皆!私を遠ざける!」

「だって重いんだもの」

「私が何したっていうの!?!どうして私から離れていくの!?!」

「だから重いんだって」

「彩君は・・・彩君だけは違うって信じてた」

「俺も流石にこれはないだろうと信じてた」

「信じてたのに!!」

「俺も信じてたよ」

「私が彩君を幸せにするから!」

「いやいや、絶対俺不幸になるって」

「だから私と結婚しよう? ね? 私がずっと養ってあげるから」

「全然将来有望なんですけど、俺」

「働かなくなっていていいんだよ? 私一緒にいればそれでいいんだよ?」

「そんな男として絶対に嫌だし」

「だから私と結婚しようよ!」

「そもそも話が飛躍しすぎな件」

俺は叫ぶ先輩を尻目に携帯を取り出してイジる。

——カチカチ

1..通りすがりの被害者..20XX/12/24(X) 19..4
7..43..92 ID..abababee

ヤンデレに告白されたどうすればいい？

2..名無しさん(神奈川県)..20XX/12/24(X) 19..
48..34..84 ID..pp22098ss

リア充爆発しろ

「聞ってるの!？」

「結論から言うと、無理」

「どうして!？私と結婚すれば幸せになれるんだよ!？」

「いや、なれないよ」

3..名無しさん(福岡県)..20XX/12/24(X) 19..
50..34..84 ID..kirkirro

拒否って後ろから刺されてシネ

（ありそうで怖えーよ）

俺に迫ってくる先輩をシカトして俺は思考に耽る。

てか誰か助けて。

内心で、初めての戦闘時と同じくらい泣きそうになりながら俺はそう思った。

36話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

37話（前書き）

もちさん、ネタ使わせてもらいましたw

37話

先輩の訳のわからない告白をなんとか無視しきってはや1ヶ月。

もうそろそろ二月に入ろうとしている。

高校生活始めての冬休みは、今までになく充実していた。

なにより長谷川さんとの間がグッと縮まった・・・に違いない。

先輩の絡みが日に日にめんどくさくなっていく中、俺はそれでも他の女友達と遊ぶことに成功した。

2月といえば、俺の前の世界では卒業式があった。
多分大学受験に合わせてあるのだろう。

俺の世界の卒業式よりもちょうど1ヵ月後に、この世界の卒業式はある。

つまりは前の世界にいるよりも1ヶ月だけ長く高校生活を送れるということだ。

なんて、全くもってどうでもいいことを考えながら俺はタルタルス内で歩いていた。

もちろん横には真田先輩がいる。

「彩、本当にあの壁を壊せるんだな？」

「いや、ですから『かもしれない』であって、確実ではないです

よ」

「そうか。うむ。期待してるからな」

何か会話がかみ合っていない気がしないでもないが、そこは気にしないことにした。

真田先輩が言っている壁というのは、14階の次の階層への道を邪魔してるアレだ。

戦いたくないと日ごろから思っている俺が、何故わざわざ戦いに行くような真似を自分からしているのか。

別にトチ狂ったってわけじゃない。

実は、最近ひどいんだ。

そう真田先輩と桐条先輩が。

ああ、先輩は別だ。

あれは別だ。

格別、ではなく別格？

真田先輩と桐条先輩は、最近ひどくイライラしているのだ。

たぶん原作でもそんな時期があったのだろう。

俺はそんなこと知らないが。

タルタロスが行き詰まり、なかなかシャドウの真相が掴めそうで

掴めない現状が耐えられないんだろう。

俺がメンバーに強制的に加えられたので、タルタロスに入ることが可能になってしまい、先輩もペルソナに覚醒し、何もかもとまではいかないが、割ととんとん拍子に進んできているという思いがあったのだろう。

そのせいで逆に今の状態が許せない。

そして、何故かその溜まったストレスの捌け口が俺なのだ。

毎日毎日、人を救うにはどうすればよいかだとか、力ある者は、とか上に立つ者は、だとか、終いにはお父様の役に立つには、とか。もはや途中から俺関係ないよって話。

力もまだペルソナ出せてないし。

まあ、とにかくその愚痴を聞くのは何故か俺。

真田先輩の場合は言うまでもないと思うが、ひたすらに訓練。

正直最近、シャドウの方がマシなんじゃね？なんて思ってきた。

そんなことは決してないのだろうけど、喉元過ぎればなんとやら。

それで、ついそんな状況に俺もストレスが溜まったのか、『案外俺、あの壁突破出来るかも』なんて零してしまった。

いや本当、俺がこんなミスをするなんて天文学的確立だろう。

正直言った後に自分の顔から、血の気が引いていくのがわかった

ね。

「よし、ついたぞ」

なんていうんだろうな、あの感覚。
やっちまった、という感じだよ。

「さ、破壊してくれ！さあ！さあ！」

（・・・やべえ、うぜえ）

「彩！早く！早く壊すんだあ！うおおお！」

（なんてあんたが叫んでんだよ）

「出来るかはわからないんですけどね」

「うおおお！」

「聞いてます？」

真田先輩は何故か気合を入れて叫んでる。

いや、意味わかんね。

「・・・はあ」

ため息をついて俺は階段を遮る壁を見る。

目を凝らす。

薄くだが、死の線が見える。

ハッキリと見ることは何故かできない。

基本、タルタロスの中の物は、シャドウ以外は線が見えづらい。

原因は多分アレだろう。

アレだ。そうアレ。

所謂原因不明だ。

「うおおお！」

ちよつとガチでウザくなってきたので、とつと壊そうと思い、壁に近づく。

壁に近づくと、少ししゃがむ。

線を見つけ、それをゆっくりと線を確認しながらなぞっていく。

——ガシャン！

根元の方からポーン状の壁がポツキリと折れる。

「おおおお！」

真田先輩は、通れるようになった瞬間走っていった。

『彩！早く明彦を追うんだ！はぐれてしまうぞ！』

（えええ・・・だっる）

「はいはい。今行きますよー」

『きゃー、彩君カッコイイ！流石私の彩君！』

「はいはい、五月蠅いですよー」

『ほう？この部活内での恋愛は禁止なんだが？』

「初耳なんだが？」

『ちなみに私の許可があれば問題ない』

『じゃ、私と彩く』

『却下』

『なんで！？』

『彩、君には才能がある。そう、上に立つ、言い替えば私の隣に立つ才能がある。どうだ？』

「いや、意味わからんのですけど。てか真田先輩何処？」

（なんだ？フラグ立ってたか？いや、立っていないだろう？）

「うおおお！」

変な叫び声が聞こえる。

聞かなかったフリをしようと思う。

「うおおおおお！彩いいい！」

声が近づいてくる。

「弱い！弱すぎるぞ！こいつら！」

（そんなに1v上がってたか？）

「くそっ！このままじゃ、このままじゃ強くなれない！」

強くなることの動機はカッコイイんだが、いかんせん最近はカッコよくない。

ていうかウザい。

「上だ！上に行くぞ！」

「え？ちよっ！？」

真田先輩に腕を掴まれて強制的に上へ。

「うおおお！」

いや、もう黙れ。

距離近い。

37話（後書き）

最近思うけど、ナルトの二次でサスケが仲間になって、ナルトをアシチするのを読みたいw

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

38話

まさかまさかの展開でタルタロスの階層は30階まで上がった。

これって主人公が段々とレベルアップしていくの無理じゃないかな、って思うんだ。

まあ、多分別行動になる可能性が高い気がする。

真田先輩が怪我さえしなければ。

「彩、すこし話がある。後で作戦室に集まってくれ」

「?了解しました」

何か大事なイベントでもあったのだろうか。

俺以外の人も声を掛けに行けらしい。

嫌な予感がヒシヒシと、なんてことはないが、何か厄介というか面倒になりそうな予感。

「今日集まってもらったのは他でもない、新しくメンバーが増えることとなった」

「新メンバーだと!?!これで、これでより上にいける!」

おいおい、あんたの頭はそっちにしか働かないのか。

「えー、チョーありえないんですけどお。マジでもう増えなくていいしい」

お前は誰だよ。

何キャラ変えてんだよ。

そうでなくてもキャラ崩れ激しい奴いるんだから、キャラ固定しとけよ。

「・・・誰ですか？」

誰か居ただろうか。

「君と同じ学年の子だ」

（・・・岳羽さんか）

あの人はそういえば高1の内にメンバー入ってたっ婆かったな。

「岳羽ゆかり、というんだが、知らないか？」

「はあ！？女とか、イラネー」

いや、だからお前誰？

キャラ戻せよ。

「そう言うな暗越。これでより多くの人を助けれる」

「岳羽さんか・・・まあ、知り合いではある、かな？」

「じゃあ、彼女が入ってきたらお願いしてもいいか？」

「え？パス」

「・・・彼女にとってこちらは未知の世界だ。戸惑うことも多いだろう」

「そこはほら、真田先輩が手取り足取り」

「明彦はそういうのに向いていない。なにより君は同学年だろう？それに彼女は自ら志願してくれたんだ。その志を無碍には扱えない」

（俺は強制的でしたね）

「真田先輩。どうやら戦闘に関して熱心な子らしいですよ」

「なに！？それは本当か美鶴！」

「え、いや。戦闘に関して言われればどうかかわらないが」

「真田先輩が手取り足取り教えれば、きっと戦力になりますよ」

「そうか！今からトレーニングメニューを作ってくる！」

———ボタン

真田先輩は走って出て行った。

その子がどんな子かも聞かずにどうやってメニューを組むんだろ
うか。

「・・・ふう」

「おい、何やりきった感を出しているんだ」

「いいじゃないですか。岳羽さんって、なんかあんまりこっちに関
わるな、っていうかなんかそんな雰囲気出してるんですよ」

「？友達はちゃんといると聞いたが？」

「あー、いや、俺に対して、って感じで」

「嫌われているのか？」

「友達以上踏み込むな、って感じで嫌われてるわけじゃないですけ
ど」

「なら任せた」

「いや、でもですね」

「なら暗越にやらせるか？」

ちらりと先輩を見ると、なんか黒いオーラ出しながらぶつぶつ言
っていた。

「・・・わかりました。わかりましたよ」

「ふふっ。君には期待してる」

（イラネーよそんな期待）

天井を仰ぎ見て、ため息をついた俺はきっと悪くない。

「えっと、岳羽ゆかり、高1です。よろしくお願いします」

「ああ、歓迎しよう。私は高2の桐条美鶴だ」

「あ、はい。知ってます」

桐条先輩に対して、軽く頭を下げる岳羽さん。

「お前、得意な武器はなんだ？何ができる？槍か？薙刀か？」

自己紹介はしようよ、なんて思うけど、あえて何も突っ込まないことにする。

「え、えっと・・・ゆ、弓を少し」

「な、なんだと・・・」

orzの体勢を取る真田先輩。

大方近距離用のメニューを立ててたんだろう。

(ざまあww)

なんて思った俺は悪くない。

「俺は知ってると思うけど、琉峰彩。よろしく」

「あ、うん。なんか知り合いがいると安心するね」

ニコリと微笑み合う俺達。

そう、頑張ってくれ。

岳羽さんが戦力になればきっと、俺に対する愚痴も減るはずだ。

タルタロスが先に進めたのにも関わらず、桐条先輩の愚痴は終わらなかった。

なんだかんだでストレスが溜まっていたのはわかる。
わかるがその捌け口が俺というのはどうも納得がいかない。

一人で戦ってます、って感じだったはずなんだが。

とにもかくにも、俺の横でいまだにぶつぶつ言っている人はどうにかならないのか。

「えっと、暗越先輩ですよね」

「ええ」

冷たっ。

「よ、よろしくお願いします」

「ええ」

おいおい。

この人ずっとこんな感じでやっていくのか。

「ちょ、ちょっと」

「何？」

俺に小声で話しかけてくる岳羽さん。

「私、あの人になんかした？」

「いや、知らん。あれじゃね？ほら、自分より可愛い子に嫉妬するってやつ」

「ちょっと、適当に答えないでよ」

「あれだよ、あれ」

「何よ」

「所謂原因不明」

「おい」

(どうせアレだろ？女の子が俺の周りに増えるのが嬉しくないんだろ？)

「ちょっと、私の彩君となんでそんなにくつついてるの？」

「え？えっと・・・すみません？」

「はいはい。岳羽さん、あれ無視していいから。部屋案内するよ、行こう」

「ちょっと彩君！なんでそんな女のことなんか構うの！？」

「二人ってやっぱり・・・」

「違う」

「そうよ、将来を誓い合った仲。なんだ、あなた分かってるじゃない」

「へ、へえ」

顔が完全に引きつってる岳羽さん。

とりあえず俺はそれを無視して、岳羽さんを案内するために階段に向かう。

ちなみに荷物はすでに部屋に送られている。

「女子は3階。男子は2階ね」

「わかった」

俺はそう言って、3階へと上がる。

「基本的に男子は3階には行くのは禁止されてるけど、今回だけは特別だから」

「あ、そうなんだ」

「私の部屋ならいつでも来ていいからね」

なんで着いて来てるのかは知らないが、無視の方向で。

「ここね。荷物はもう着いてるはずだから」

「わかった。ありがとう」

「ん、じゃ」

「うん」

俺は岳羽さんと別れ、自分の部屋へと向かう。

「ちなみに女子も2階に侵入禁止だから。というか先輩だけは」

「ええ」

なんか拗ねてる先輩は放っておいて俺は自分の部屋に入った。

原作の男主人公の向かい側に部屋が3つになってるんだよね。

原作では荒垣先輩と真田先輩のしかなかったのに。

で、俺はちょうど主人公の向かい側なわけ。

これ不安じゃないか。

なんで主人公の部屋が空いてるんだ。

なんか男主人公の可能性が上がったと思う。

38話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

39話

岳羽さんがメンバー入りしてから3日して、早速タルタロスに行くことになった。

「てか、ペルソナ召還出来るまで待たないんですか？」

「彩がまだ出来ていないんだ。そんなに長期間待つてられるか」

あれ？俺のせい？

「別にペルソナなんてなくても戦えるだろう」

「まあ・・・確かに戦えてますけど」

大丈夫なんだろうか。

岳羽さんは回復役とはいえ、まだペルソナを召還できない。

一応真田先輩もディアは使えるが、戦闘中にそれを使う余裕はあまりない。

割と頼りにならない真田先輩を見ながら、俺は不安を感じながらタルタロスに向かった。

「へえー。これがタルタロスかぁ。おっきいね」

12時ジャストに学校の前に来て、影時間を迎えた。

「まあ、ね」

何度見てもこの変形の光景には目を奪われる。

というか、毎回変形の仕方も若干違うのが少し面白い。

「これって影時間が終わったら戻るんだよね？」

「うん。じゃなきゃ、学校いけないしね」

岳羽さんは始めて見るタルタロスに驚いていた。

俺も最初に見た時は、知っていたとはいえかなり驚いた。

予想していた倍驚いた自信がある。

「じゃ、中入ろっか」

「このポータルで一気に上までいける。まあ、今回何処に行くかは明彦に任せる」

「俺達がいるからな、流石に1階からってのはつまらんだろう。岳羽も幸運にも遠距離武器だしな」

「え？何階から行くんですか？」

「36階からだ」

「行きすぎてやしやせん!？」

「問題ない。まあ、岳羽は最初は戦闘に参加せず見学だ」

「わかりました」

岳羽さんが真田先輩に言われ頷く。

が、本当にわかっているのだろうか。

彼女は自分がレベル1だということを忘れていないだろうか。

「そのうち自然とレベルが追いついてくるだろう」

「ちょ、マジで？」

「よし、行くぞ！」

『明彦!行きすぎだ!』

無線機から桐条先輩の鋭い声が聞こえる。

いつになくテンションが上がっていたみたいだ。

冷静な判断ができなかったみたいく、俺達は今43階まで駆け上が

って来てしまった。

岳羽さんのレベルが1のことを忘れ。

ちなみに俺と岳羽さんは、猛ダッシュしていく真田先輩を追いかけるので必死だった。

「真田先輩！」

やっちゃまった、なんて頬をポリポリと搔いてる真田先輩。

岳羽さんは思いつきり肩で息をしている。

「最初からここまで来れば、簡単にレベルが上がると思うんだが」

「そういう問題じゃないですよ。まずは戦いに慣れないと」

「そうだな・・・降りるか」

なんでそんなに落ち込んでるんだよ。

安全のためには仕方ないだろう、こっちを睨むんじゃない。

『明彦！敵だ！』

「何!？」

俺もその声を聞いてバツと振り返る。

そこにはシャドウが4体もいた。

「こんな時に!・・・まあいい、岳羽、お前は見ていろ！」

「は、はい！」

てか、この敵はヤバくないか？

なんでカッコつけてそんなセリフ言ってるんだよ。
ここは逃げるところだろう。

俺と真田先輩は43階まで来たことはあるが、適正レベルかと言われると決してそうではない。

4人パーティーでも危ないんじゃないか、なんて思うようなレベル帯に2人で来ていたのだ。

今回はそれに加えて岳羽さんもいる。

それに敵を一気に4体も相手したことなんて、最近はなかった。
いつもはちゃんと1体か2体の敵を狙っていた。

「ヤバイんじゃないですか!？」

「大丈夫さ！」

なんでそんなに自信満々なんだ？
どっからどうみても危ないだろう。

真田先輩はそう叫ぶと同時に一気に敵の懷に踏み込み、連続でパンチを放つ。

「なっ!？」

真田先輩の拳が明らかに効いていない。

「桐条先輩！アナライズを！」

『わかった』

「くっ」

目の前が明るくなったため、そこからバックステップで離れる。
次の瞬間そこには敵が降って来ていた。

しかし、まだ光は消えない。

今度はサイドステップで避ける。
そこを敵の攻撃が通過する。

「やっぱり4体ってのは多いんじゃないの！？」

『ブロンズダイス！打撃は効かないぞ！雷が効くようだ！』

「真田先輩！魔法を！」

「くっ！」

真田先輩にそう言うが、真田先輩は敵2体に狙われ、防戦一方だった。

「やっぱり4体は無理だろう！逃げましょう！真田先輩！」

俺は真田先輩にそう叫ぶが、どうも真田先輩にそれを聞く余裕はない。

普段ならこんなことはないのだが、やはり通常攻撃が効かない敵の場合かなりやっかいだ。

ゲームと違って、必ず自分のターンが回ってくるわけじゃない。

ペルソナ召還は、実は最も隙の出る攻撃だ。

それゆえ、最前線のメンバーが使うには、誰かが囷になったりする必要がある。

2体同時に狙われて、綺麗に線をなぞった攻撃をできるほど俺は達人ではない。

とりあえずは、真田先輩に向かってる敵の注意をこっちに向けさせ

———シャツ

後ろから矢が飛び、それがブロンズダイスに刺さる。

（え！？なに攻撃してるの！？）

「私にだって！」

（いや、待って、意味わかんない！）

「っ！岳羽さん、逃げて！」

「え？」

岳羽さんの真上に敵が飛び上がる。

真田先輩や俺なら確実に避けれる攻撃だが、今の彼女にはそれは不可能だろう。

戦闘経験がない上に、割と疲労している。最悪だ。

（ペルソナっ、ペルソナで魔法をつ！）

遠距離だ。

こんな時は魔法だろう。

震える手を気にしてられず、銃を抜く。

迷っていれば岳羽さんが死ぬ。

（こんな時くらい、こんな時くらい！漢になれよ俺！）

俺は自分の銃を頭に向けた。

39話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

40話(前書き)

そして、ペルソナと共に作者の厨二力もフルMAXに発揮されたW

40話

自然と自分のペルソナの名前が頭に浮かぶ。

「来い、シン！」

叫ぶと同時に自分の頭に向けている銃を握る手に力を込めて、一瞬の戸惑いの後引き金を引く。

——パァン！

それと同時に発砲音が響く。

そして、その音と同時に自分の中から何かが出てくるのを感じる。

《我は汝、汝は我》

「これが・・・俺のペルソナ」

自分の背後に出たペルソナを見る。

（なんだこれは・・・）

今まで感じたことないほどの違和感を感じる。

そして目の前の敵を見る。

今はそんなことを考えてる暇はない。

「シン！フブーラ！」

氷結魔法の単体攻撃の高レベルの技を何故このレベルで覚えているのか。

おかしい。ありえない。

シンが手を振る動作をすると同時に敵のシャドウに氷が纏わりつき、敵が凍り、そして碎け散る。

——パリン！

そんな音と共に敵は一撃で消え去る。

「おお！ありがとう！」

岳羽さんは降ってくる氷の破片を見ながら感嘆の声を上げる。

「シン残りもだ！」

感じる違和感を無視し、残りの敵にも攻撃を命じる。

この世界では、連続攻撃なんてやろうと思えばできる。
カウンターを食らうこと考えなければ、だが。

俺は真田先輩の方のシャドウも破壊する。

「助かったぞ！」

戦闘が無事に終了する。

「ペルソナってなかなかイカしてるね！」

岳羽さんは俺のペルソナを見て、そう言う。

『流石彩君！ペルソナも強いね！最強だよ！』

これがかしてる・・・？これが？

強い？強いのか？本当に？

俺のペルソナ、シンは全身を魔法使いのような黒いローブで包まれている。

見えているのはフードの下からわずかに覗く顔とローブの先から出る手。

そして、背中には大きな棺桶があり、それを背負っているようにも見える。

何故か浮いているようにくつついているため、実際に背負っているのかはわからない。

きっと岳羽さんはそんな暗いイメージのペルソナを見てカッコイイと思ったんだろう。

どこか影がある感じた。

でも、

（どうなんだろうな・・・そのローブの下はどうなってるんだろうな。一体どんな中身なんだ？）

シンに問いかけるように思う。

何故ふとこんなことを思ったのかはわからない。

シンは答えない。

（俺にはわかる・・・このペルソナの、シンのローブの下にはきつと何もないんだ）

そのことに確信めいたものを感じる。

途端に寒気が俺を襲う。

空っぽなんだきつと。

そして、顔を見て思う。

（この眼帯のように両目を覆う布。これは俺の『魔眼』のせいかな？）

もう、普通の目ではないと？

俺には目がないとでも？

背中 of 棺桶。

（一体何を背負っているんだろうな、何もない体で、一体何を背負えるっていうんだろうな）

前世の自分なのか？

なら本体はそっちだったりしてな。

カッコイイなんて思えない。
ただ、

「気持ち悪い」

「え？」

俺の言葉に岳羽さんが疑問符で返してくる。
しかし、俺の口からはそんな言葉しか出てこない。

「気持ち悪いな・・・このペルソナは」

気持ち悪い。

なんでこんなにも気持ち悪いのか。

こみ上げてくる嘔吐感。

なんだ？

なんなんだこの不快感は？

周りのメンバーも俺の言葉に疑問を思ったのか声をかけてきた。

「そうか？俺のポリュトワークスよりよほどカッコイイと思うがな。
まあ、あれはあれの筋肉に美しさが集中しすぎているのもあるがな」

『まさに魔術師タイプのようなではないか。君にピッタリだと思うが？』

真田先輩と桐条先輩がそう言う。

「気持ち悪い」

俺はそれだけを答え、心底嫌そうに自分のペルソナを見る。

吐き気が止まらない。

（俺の心の仮面はこんなにも薄っぺらいのか）

シンのステータスは魔と速が異様に高い。

しかし、逆に力と耐は低い。

特に力に関しては皆無だ。

（俺の本性ってか？俺には中身がない、そう言いたいのかよ）

もしペルソナ4に自分がいたら、このペルソナを自分と認めることだけは一生しないと思える。

それほどまでの嫌悪感を感じる。

これは同族嫌悪なのか、それともそれ以外のものから来るものなのか。

（これ以上、見ていたくない）

そう思い、自分のペルソナを睨み付けた後、俺はペルソナをしまう。

すると、抜け出ていた物が戻ってきたような感覚になり、どこか落ち着く。

「チッ」

思わず舌打ちをする。

さっきまで出ていた物が俺の一部だと再確認させられたようだ。

苛立ちが募る。

まるで、食べ物ではないのに、それを食べてしまった時になん

違和感もないことに、逆に違和感を抱く感じ。

そして、序盤からハイレベルな魔法を覚えていること。
きっとこれは俺の『転生』を意味しているのだろう。

自分の全てを見透かされたような感覚。

気分が悪い、寮にいたならすぐさま洗面台に向かうかトイレに駆け込むだろう。

何故自分がこんな嫌な思いをしなければならないんだ。

自分の口元を押さえる。

嘔吐感が我慢できなくなってきた。

『彩?』

桐条先輩が俺を気遣うように声を掛けてくる。

自分でもわかるくらい顔が青ざめている感じがする。

『初めてのペルソナ召還だからな。体調が優れないようなら撤退するか?』

『彩君? 大丈夫なの?』

耐えられない。

「うっ」

思わずその場を走って離れ、壁の隅へと行く。

「う……おえっ」

「彩!？」

『彩君!？』

ペルソナ召還をして吐いた奴なんて俺くらいだろう。

なんとなく自分がペルソナ召還を避けてきた理由がわかった。

これほどにおどましいのか、自分の内面は。

いや、俺自身の性格は狂ってなんてない。

問題は俺の存在自体か。

ペルソナでないものを無理やりペルソナにしたような感じ。

本来この世界に来るべき存在ではなかった者を無理やりこの世界に引き込んだ感じ。

（無理やりこの世界に？）

俺は誰かにここに連れてこられたのか？

（俺の人生はどこで狂ったんだ？）

なんで俺がこんな目にあっているんだ？

（誰が？誰が俺をこんな目に合わせたんだ？）

——ドサリ

「彩！？」

『彩！？』

皆の声が聞こえる中、俺は意識を失った。

40話（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

1話 H e r ' s d e s i r e (前書き)

この人の転生後の名前未定なので、希望があれば感想でお願いします。

1話 Her's desire

——カチャカチャ

室内に響き渡る音は、その一室にいる女性のもつPSPのボタンを押す音のみ。

20代前半程度に見える女性は、部屋で唯一人イヤホンをつけながらPSPの画面を必死に見ている。

そのイヤホンの先はPSPだ。

「次こそは！次こそは逆ハーを作るう！」

この女性、大島由利子は、『ペルソナ』シリーズの大ファンである。

「あ・・・あああ！ちよっとお！嘘、えー折角放課後に選択したのになんもなし？」

一人PSPをやりながら、あーだこーだと騒いでいる。

部屋を見渡して見ると、そこには女性とは思えないような光景が広がっていた。

部屋にあるポスターには『ペルソナ3』『ペルソナ4』の主人公が写っている。

そして、部屋にある2つの本棚には、片方にはゲームカセットがぎっしりと、もう片方には攻略本とファンブックがぎっしりとつま

っている。

この女、正真正銘のゲームオタクである。

そして最近ハマっているのは、もうおわかりの通り『ペルソナ3 ポータブル』。

大島は『ペルソナ3 ポータブル』を予約し、販売日はソレを買うためにわざわざ大学の授業をすっぽかした。

「ぐっは、今ので死ぬかゆかりっち……使えない女」

大島は何度かクリアし、気が済むまでプレイしてから攻略本や、WIKIを見るタイプの人間だ。

ちなみに今は2週目である。

「伊織……そっか疾風が弱点だったね……でもそこがイイ！」

1週目ではなしえなかった完全逆ハーを今度こそはしようと意気込んでいるのだ。

さっきのセリフでわかると思うが、彼女、大島は女キャラにはとことん冷たい。

1週目のクリア時では、女キャラは全てコミュ1以下。

そのため、コミュが出ないキャラがいて1週目では逆ハーが達成できなかった模様。

「あーもう、男で回復キャラ出さないよね」

ひたすらに逆ハーを求めている。

彼女のお気に入りには荒垣というキャラのようだ。

何故なら彼女の机、もはや机と呼んでいいのかわからない物の上には、荒垣というキャラのポスターが綺麗に置いてあり、フィギュアまである。

これは余談だが、彼女のパソコンのデスクトップ画も荒垣である。

「じゃあ！ランクアップ！」

タルタロウスの探索は余裕なため、学校の方へすぐにいくようだ。それからしばらく、しばらくと言ってもたっぷり4時間ほどした時。

「ん？・・・ああ！！電池！電池！充電器は何処！？」

PSPの電池が切れたようだ。

大島は机の引き出しの上から二段目の、充電器系の定位置のひきだしからPSP用を取り出し、コンセントにさしてあわててPSPにもさす。

「・・・セーフ」

なんとか間に合ったようだ。

そして、それからまた2時間ほど経った。

「ふう・・・今日はこんなところかな、お腹も減ったし」

大島は一人暮らした。

そして、今日は大学の授業がない日曜日。

思う存分にPSPをしていた。

「あーなんもないやあ」

冷蔵庫を開けるとそこにはビールしか入っていない。

「コンビニにでも行っこかなあ」

部屋着のジャージから、外行きの服へ着替えようとクローゼットを開ける。

そのクローゼットの中身は8割がアニメのコスプレ。

ちなみにそれらの中の9割が男性用だ。

「んーと、これでいっか」

彼女、大島は見た目にまったく気をつけない人物である。

化粧をすれば、まあ悪くはないのだが、大学に行くときも大抵すっぴんである。

そのせいか、モテた試しが全くない。

最も彼女自身そういったことに興味がないようだ。

ついでに言うておくと、彼女が化粧をするのはコスプレする時のみ。

一度それを見た男友達から交際を頼まれたが、

「毎日、この服（『ペルソナ3』の男子用制服）着てくれるならいいよ」

と言って、一瞬で終わったことがある。

「はぁ・・・転生したい・・・ペルソナの世界行きたいなあ」

大島は立ち止まってポーズを決める。

「ペ・ル・ソ・ナァ！！！」

そう叫んで銃の形にした指を頭に向け、銃を撃つ仕草をする。

「・・・」

場を沈黙だけが占める。

「アホかってんだ・・・」

そんな時、

<クスクス>

「え?・・・何!?!」

<クスクス>

何処からともなく笑い声が聞こえる。

「だ、誰!何処にいるの!?!」

<ワタシ?ココダヨ>

大島は声のした方へと顔を向ける。

<コッチコッチ>

そこにはオルフェウス(女性型)のフィギュアがある。
大島が持っている中で唯一の女性のものだ。

「ま、まさかオルフェウスなの!?!」

(※本当は違います)

<クスクス、ペるそなノセカイニイク?>

「え?・・・行けるの!?!」

長時間のゲームのせいで頭がおかしくなったとは、何故か全く思わない大島。

<ツレティツテアゲヨウカ?>

再びオルフェウス（の後ろの鏡）から声が聞こえる。

「行けるなら行きたい！連れて行って！」

常人なら信じない、それ以前にこんな声が聞こえても幻聴とするだろう。

しかし、大島は違う。

このオルフェウスから声が聞こえたため、彼女にはもう現実が見えていない。

<イイヨ。ドノジカンタイニイキタイ？>

聞き取りにくい言葉にも関わらず、彼女はそれを一瞬で正確に聞き取る。

「えっと、えっと！『ペルソナ3ポータブル』の！女主人公に転生したい！」

<イツゴロ？>

「えっと・・・12歳程度から！」

一瞬最初からと考えたが、幼児の羞恥プレイなど受けたくないと考え、12歳を選ぶ。

それに、例の昔の事故の場に居合わせたくない、という思いもあった。

<ワカッタ。ソノノゾミカナエヨウ>

「本当！？ありがとう！」

疑問より先に感謝の言葉が出るあたり大島である。

そして、その途端光が彼女を包み込み、その光に包まれた彼女は鏡の中（大島からすればオルフェウス）へと入っていった。

こうして大島は念願の転生を果たした。

1話 **H e r ' s d e s i r e** (後書き)

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

2話 Main Culprit

イゴールSide

「ふむ、どうやら新しい客人たるべき人がこの世界を訪れたようです」

青い部屋のソファアに腰掛ける、異様に鼻の長い老人から言葉が漏れる。

「そのようです」

その傍に立つ、前髪が切り揃えられた、金髪の青い服を着た女性が答える。

「しかし、これはまた・・・」

老人はどこか困ったような声を上げる。

「いかがいたしますか？」

会話のメインたる部分が抜けているにも関わらず、二人の間では通じているようだ。

「この世界に着たからには、いや、あの人に“なった”のなら、必ず『命の答え』に辿り着いてもらわなければなりませんな」

老人はそう言うと、ふうとため息をついた。

「予定より早く接触しますか？」

女性は淡々と老人に問いかける。
その声にはあまり感情が籠っていない。

「・・・それでは意味がありませんな」

老人は困ったように答える。

「接触の回数を増やしますか？」

女性は、この件の解決策たりうる策を全て挙げようとしているようだ。

「そうですね・・・しかし、“あの人”がそれに応じるとは限らない、というのはいささか不安ですな」

老人はこの策では不満なようだ。

「では、誰か他の人間により身近な位置から支えさせますか？」

女性のその問いに老人はしばし黙る。

「エリザベス」

何分か経っただろうか、いや何分も経っていないかもしれない。
この空間ではイマイチ時間の感覚がわからなくなってしまうそうだ。

仮に数分としておこう。

数分経った後に、老人が女性を呼んだ。
「どうやら女性の名前はエリザベスというらしい。」

「为什么呢？」

「その人間とは？」

老人はエリザベスに尋ねる。

「誰でもいいのではありませんか？」

「・・・誰でも、その『誰でも』とは一体どの『世界』の誰でもなのか・・・」

老人は独り言を呟くように言う。

「この『世界』以外のどこかの『誰でも』でございます」

「やはり、それしかありませんか」

老人はもう一度ため息を付く。

「はい。これが最善だと思われます」

エリザベスは老人の言葉を肯定する。

「その方にはずいぶん悪いことをすることになりますな」

「仕方ありません。『世界』のためです」

先ほどとは、受け答えが逆になりながら二人は会話を続ける。

「その『世界』は、その方にとっては違う『世界』であるのですがね」

老人はどうやらこの案に乗り気ではないようだ。

「仕方のないことです」

エリザベスは感情の籠ってない声で答える。

「それにしても『あの方』にも困りましたね・・・」

ふう、と本日3度目になるため息を老人は吐く。

「まさか『ご自由になさってください』と言ったら、本当に適当に選ばれてしまうとは・・・」

「それもまた、『あの方』の魅力なのでしょう」

「そうですね・・・」

老人はエリザベスの言葉を肯定する。

「しかし、ただでこちらに呼ぶというのはあまりに理不尽すぎますね」

老人は目の前のテーブルを見つめながら言う。

「一つや二つ程度の特典をつければよろしいのでは？」

「いくらそれを貰おうと、あくまでそれはこちらの『世界』での話し、その方にとっては違う『世界』・・・難儀なことですね」

老人はまたため息をつく。

「エリザベス。その件は任せますよ」

「はい。わかりました」

エリザベスは老人に頭を下げる。

すると、老人はすつと溶けるようにして消えた。

「ふむ。いかがでしたでしょうか」

エリザベスは一人呟く。

「!!・・・そうですわ」

エリザベスはポンと手のひらを叩くと、ポケットから何かを取り出した。

「これを使って直接聞けばいいのです！」

エリザベスは誰もいない空間で一人、取り出したものを掲げ叫ぶ。

「つい最近使い方を覚えました、文明の利器。その名も・・・」

エリザベスは一人盛り上がっている。

「携帯電話！」

そして、一人叫ぶ。

「これで・・・適当な、アドレスを入れて・・・異世界に送ると・・・」

エリザベスはアドレスを入力したところで一旦止まる。

「内容はなんて送れば？・・・あ・な・た・わ・な・に・お・の・ぞ・む・？」

慣れない手つきでエリザベスは携帯に文字を打ち込んでいく。

「ふむ。これではイマイチ文章がわかりませんね」

エリザベスはさらに打ち込む。

「やはり、能力は一つまでですね。それ以上つけるわけにはいきませんし」

彼女は変換ボタンの使い方がいまだにわかっていないようだ。

「ステータスもサービスしましょう。合計は・・・10くらいいいでしょう」

一人納得しながら文字を入力していく。

「これは必須ですね。拒否権はない・・・いい響きです」

「あまり長時間かけられると、時間がどう飛ぶかわかりませんから、5分以内にしてもらいましょう」

「ふむふむ。これでよし」

もう一度自分のメールを見直し彼女はうなづく。

「あ、そうだと忘れるところでした」

彼女は最後にそう呟くと、携帯に文字を打ち込む。

その時に勝手にカタカナ変換になったのは偶然か、それとも必然なのか。

「ぺ・る・そ・な」

2話 Main Culprit (後書き)

誤字、脱字、矛盾点がありましたら報告お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2771s/>

I want BRAVERY

2011年8月12日04時27分発行